ファイアーエムブレム
Fire Emblem
紋章の謎
SPECIAL STORY
～暗黒竜と光の剣～
篠崎砂美
ファミ通文庫

ファイアーエムブレム
紋章の謎 ～暗黒竜と光の剣～

篠崎砂美

篠崎砂美
Sami Shinosaki

1960年7月22日生まれ。埼玉県出身。ファンタジーから近未来アクションまで幅広く手がける。裏設定満載の緻密な作風が好評。著書に『ファイアーエムブレムトラキア776』（全3巻、エンターブレイン）、『ブレイク―エイジ　戦士たちの夏』（アスペクト）など多数。『マッチメーカー』というパソコン用ロボットバトルシミュレーターのデザイナーでもある。
http://hp.vector.co.jp/authors/VA000787/

日野慎之助
Shinnosuke Hino

1973年11月26日生まれ。滋賀県出身。メーカーでコンシューマーゲームのキャラクターデザイナーとして活躍後、イラストレーターとして独立。『ファイアーエムブレム　トラキア776』全3巻のイラストとオリジナルコミック（いずれもエンターブレイン刊）を担当。ほかに、『トリスメギトス　光の神遺物』、『狂骨歌　神咒鏖殺行巻之壱』（いずれも角川書店）などのイラストがある。

カバーイラスト　日野慎之助

ファイアーエムブレム
Fire Emblem
紋章の謎
～暗黒竜と光の剣～

マルス

ドルーア帝国の侵略により父を失い姉と離れ離れになるが、祖国の再興と姉の救出のため立ち上がる。英雄アンリの末裔。

シーダ

ドルーア帝国に追われたマルスが逃げ込んだ先、タリス王国の王女。異国の王子に恋をし、そして貫く、行動的で健気な女性。

ナバール

“紅の剣士”の異名を持つ凄腕の傭兵。その過去は謎に満ちている。オグマやシーダと、過去に関わり合いがあるらしいが……？

オグマ

かつては奴隷剣闘士。仲間を庇って鞭打ちの刑に処せられたが、通りがかった幼いシーダに助けられる。タリス傭兵部隊隊長。

ミネルバ

ドルーア帝国と手を組むマケドニア王国の王女。だが、権力を握る兄ミシェイルとは、反目しあっている。

パオラ、カチュア、エスト

ミネルバ王女の直属の部隊、マケドニア白騎士団に属すペガサスナイト3姉妹。ちなみに、左からパオラ、カチュア、エスト。

ファイアーエムブレム

紋章の謎～暗黒竜と光の剣～

篠崎砂美

イラスト　日野慎之助

目次

History

遥かな太古、人間が生まれる以前の世界では竜族がこの大陸を支配していた。後に生まれた人間たちをも、竜族は支配した。だが、やがて竜族は猛り狂い、人間を滅ぼそうとしたのだ。神々は人間を守るために、光り輝く巨人の戦士、守護神ナーガを大地に遣わし、竜族を鎮めた。光の剣と五色の盾を持ったナーガによって邪悪なる竜の力を石に封じられた竜族は、大地の奥底へと沈んでいった。生き残った竜族は人に近いものとなり、マムクートと呼ばれる存在となった。

そして、人間の時代が始まった。

アカネイア暦元年。アドラ一世によってアカネイア聖王国が建国される。
四九〇年、メディウスにより、マムクートの王国であるドルーア帝国が建国される。
四九三年、ドルーア帝国により、アカネイア聖王国が滅ぼされる。アルテミス王女のみ難を逃れる。
四九八年、勇者アンリによってメディウスが倒され、ドルーア帝国は滅亡。アルテミス王女と聖騎士カルタスによってアカネイア王国が再興される。
四九九年、オレルアン王国が建国され、騎士マーローンが王位につく。

五〇〇年、勇者アンリによってアリティア王国が建国される。
五〇一年、オードウィン将軍によってグルニア王国がドルーア帝国の跡地に建国される。
五〇三年、アイオテによってマケドニア王国が建国される。
五三七年、アリティアより、グラ王国が独立。
五五〇年、カダインに魔法学院設立。
五七九年、タリス王国建国。
五九七年、メディウスが復活。ドルーア帝国を再興する。
五九八年、マケドニア王変死。国政を引き継いだミシェイル王子によって、マケドニアとドルーア帝国の同盟成立。グルニア王国、ドルーア帝国と同盟を成立させる。
六〇〇年、ドルーア帝国がアカネイアに侵攻を開始。
六〇二年、アリティア国王コーネリアスがアカネイアに援軍として駆けつけようとするも、同盟国グラの裏切りにあって敗退。コーネリアス王は戦死し、宝剣ファルシオンは失われる。アリティア王国滅亡。マルス王子のみタリス王国に逃れる。アカネイア王国滅亡。ニーナ王女以外の王族はすべて処刑され、王女は幽閉される。
六〇四年、オレルアンに逃れたニーナ王女が、各地に決起を促す檄文を送る。

六〇九年、アカネイア連合王国記録室資料より

プロローグ　勇者アンリ

「メディウス!!」
　立ちはだかる多くの敵を倒してきたアンリが、玉座に悠然と座る男にむかって叫んだ。彼の後ろには、長きに渡る戦いをともに歩んできた竜騎士アイオテや、聖騎士カルタスとマーロン兄弟やオードウィン将軍を始めとする多くの仲間たちが続いていた。
「ナーガか……」
　メディウスは、つぶやいた。彼の目には、アンリの姿など映ってはいなかった。彼の見ている物は光り輝く剣、そしてその後ろに雄々しく立ちはだかる神竜ナーガの幻影であった。そして、ナーガの周りには、あのときの戦いで倒れたはずの彼の三人の側近の姿も感じとれていた。
「死してなお、なぜ愚かな存在に傾倒するのか。しょせんは利己的で矮小（わいしょう）な人間などという存在に……」
「人は、そんな存在ではない！」
　メディウスのつぶやきに、人間であるアンリが答えた。
「ほう、貴様が答えるか。まるで、我らが王、ナーガの代弁者気取りだな。不愉快だ。高慢すぎる……」

メディウスは、初めてアンリに気づいたかのように声をかけた。そして、ゆっくりと立ち上がる。
瞬間、アンリたちの間を緊張が走り抜けた。仲間たちが、アンリとともに前に出る。彼らの手には、アカネイア聖王国の三種の神器である、神剣メリクルソード、聖槍グラディウス、炎弓パルティアが握られていた。そして、彼らの力を集めるかのように、アンリは光剣ファルシオンを力強く構えた。
「こい、メディウス。決着をつけよう。お前を倒し、すべての人々を闇の呪縛から解き放つ！」
アンリが叫んだ。
「呪縛か……」
思わずメディウスは苦笑する。
「いいだろう。愚かなる者たちよ、自らの罪、我が息吹(ブレス)によって深淵へと沈めるがよい」
メディウスは、懐から緑色の竜石を取り出した。一度は捨て去った力が、再び身体に満ちてくる。
メディウスの姿はみるみるうちに大きくふくれあがり、巨大な地竜の姿となった。
今まで戦ってきたマムクートの中でも最大最強の地竜の姿に、アンリたちの後ろの兵士たちが思わず後ずさった。
ずんという音とともに、メディウスは王の間に敷き詰められた石畳を踏み砕いて一歩を踏み出した。

「いくぞ、メディウス」
アンリがファルシオンを掲げた。剣の周りに、星のような輝きが集まってくる。光の剣とともに、アンリが突っ込んでいった。
メディウスは城をゆるがすように、顎を大きく開いて咆哮した……。

第1章　ファイアーエムブレム

1

「いかがいたしましょうか」
老モロドフ伯が、読み上げたばかりの書状を大きな机の上に広げてマルスに訊ねた。
「もちろん、答えは決まっているさ」
じきに一六歳にならんとするマルス王子は、きっぱりと答えた。
ドルーア帝国に故国アリティアを滅ぼされ、アカネイア大陸東端の島国タリスに身を隠してから早二年。機が熟したとは言えない。だが、昨日届いた一通の手紙は、人々に守られるだけの存在であった少年の日々から、マルス王子に大切な一歩を踏み出させるに足るものであった。
厚手の紙に流麗な文字で書かれた手紙には、マルスの故国と同様に帝国に滅ぼされたアカネイア王国のニーナ王女のサインが記されていた。その内容は、帝国によって苦しめられているすべての人々に対して、蜂起を呼びかける檄文（げきぶん）であった。
一〇〇年前に勇者アンリによって滅ぼされたはずのドルーア帝国。一度は滅んだはずのそ

の帝国が、アカネイア暦六〇二年に突然他国へ侵攻を開始した。そして、マケドニア、グルニアの二王国と同盟を結んだ帝国は、あっという間に大陸を席巻していった。一年と経たずしてアカネイア王国とアリティア王国は滅ぼされ、オレルアン王国もほぼ占領され、グラ王国と独立都市カダインも帝国の軍門に下った。残る辺境の小国たちは、いつ侵攻してくるかもしれない帝国の影に怯える毎日を送っているのだ。

同盟国グラの裏切りにあってアリティアが滅ぶと、アカネイア王国が滅ぶのにさして時間はかからなかった。アカネイア王を始めとする王家の首級のことごとくは、帝国によって城下にさらされた。精神的にも軍事的にも大陸の中心であったアカネイア王家を失うと、人々は帝国に抗う気力を急速に失っていった。それこそが、アカネイア王国を占領するのではなく滅ぼすという手段に出た帝国軍の狙いであったのだ。

だが、彼らにも誤算があった。王家の血筋をすべて滅ぼすことができなかったのだ。ただ一人、ニーナ王女だけが奇跡的にオレルアンに逃げのび、そこでオレルアン騎士団と合流して帝国打倒の軍を起こしたのであった。檄文は、人々に解放軍への参加を呼びかけるものでもあった。

マルスにとって、このニーナ王女の運命は決して他人ごとではなかった。彼もアリティア滅亡の際に、たった一人の姉であるエリスの手によって、少数の護衛の騎士たちとともに故国を脱出していたのだ。

帝国を打倒して故国を取り戻す。ニーナ同様に、それは、マルスの願いでもあった。だが、

彼我の戦力差は明白だ。個々の戦力では、とうてい帝国にかなうはずもない。けれども、大陸中のすべての力が一つに集まれば、帝国と戦える力になりうるはずであった。ニーナの檄文は、まさにその希望を叶えるものであったのだ。

だが、しかし……。

問題は、帝国の動きであった。オレルアン騎士団の動きを知った帝国は、当然網を張っているだろう。集結してくる個々の戦力をその都度叩いていけば、簡単に各個撃破することができる。オレルアン騎士団が各地を回って戦力を増強していくのならばそのようなことはないが、それができないゆえの檄文であった。解放軍をオレルアン国内に封じ込めた帝国にとっては、反抗勢力を一掃できる好機でもあるのだ。

「今の僕たちの力では、オレルアンにたどり着くことさえも難しいかもしれない。だからといって、このまま静観してニーナ王女を見殺しにするようなまねは僕にはできない」

檄文の横に広げられた地図に落としていた視線を上げると、マルスは部屋の中に集まっている臣下たちを見回した。護衛隊の隊長として指揮を執ってきたジェイガンと参謀役のモロドフをのぞけば、ほとんどの騎士がマルスよりも少し年上の若者たちであった。その人数も、わずかに一〇名ほどだ。とても戦力と呼べるような代物(しろもの)ではない。

「いきましょう、マルス様」

凛とした力強い声が、場の空気を一変させた。赤毛の若い騎士が、机に身を乗り出すようにして声を発していた。カインという名の将来を有望視された血気盛んな若者であった。

「いかねばならないとお考えになったのなら、御自分の意志に従うべきです。我らは、王子のお心を実行すべく戦い抜いてご覧にいれます。そのためにこそ、我ら騎士団はあるのですから」
部屋の中の騎士たちは、その言葉に力強くうなずいた。
「機は熟してはいないかもしれません。しかし、殿下なら道を開くことができるものと信じております」
ジェイガンが、全員の心を代弁した。多くの経験を積んだ白髪の聖騎士の言葉は、マルスの決心を決断に変えるだけの重みを持っていた。
「ありがとう。これからも、みんなの力を僕に貸してほしい」
マルスの言葉に、一同が力強くうなずいた。
主君であるマルス同様に、彼らも再びドルーア帝国と戦う日を待ち望んでいたのだった。帝国を倒し、祖国を奪回する。その日のために、日々鍛錬して力を蓄えてきたのだ。アリティアの旗を掲げるときが明日と言われて落胆はしても、今日と言われて慌てたりはしなかった。
「それでは、いよいよマルス殿は決起なされると、陛下にお伝えしてよろしいのですな」
タリス王の使者としてマルスたちの許へやってきていたリフが、王子の意志を再確認するように訊ねた。まだマルスたちの所在は帝国に知られてはいない。そのため、僧侶であるリフが、村々を回るを装って、城に届いたニーナの檄文を持ってきたのだった。もともとはタ

リス王宛の物であったが、彼はマルスにこそこの檄文は見せるべきだと考えたのであった。
「はい。僕の意志は決まりました。今日までのタリス王の御厚遇には感謝の言葉もありません。満足にお礼もできぬ身を恥ずかしく思いますが、今は旅立ちたいと思います」
「陛下は、報酬を期待してそなたたちをかくまったのではありませぬ。お気遣いは無用とのことです。何よりも、民を束ねる王として、御自分の責務を果たされますように」
「ありがとうございます」
「つきましては、出立に備えて必要な物がありましょう。武器や食料もいりましょうし、大陸に渡るための船も必要です。アリティア・タリス連合軍として、陛下と軍議をお開きください」
リフに促(うなが)されて、マルスたちは家の外へと出ていった。マルスとモロドフはリフとともに城へ赴き、そのままタリス王に謁見するつもりであった。その間に、ジェイガンの指揮で残りの者たちが出撃の用意を調(ととの)える手はずである。
だが、事態は彼らの思っているよりも早く動き出していたのだ。
「殿下、あれは……。シーダ様です」
一同がそれぞれの方向に散ろうとしたとき、ゴードンが逸早く空に白い影を見つけて指さした。
逆光で影となってはいるものの、その姿は鳥にしては大きく、また四肢と長い首を持っていた。風に、長い尾と鬣(たてがみ)が靡(なび)いている。それこそ、天翔(あまかけ)る純白の駿馬(しゅんめ)、ペガサスの姿に他な

らなかった。そして、この島で唯一ペガサスに乗れる者と言えば、タリス王の娘であるシーダ王女に間違いなかった。
風を切って降りてきたペガサスは、翼を大きく広げて速度を落とすと、マルスたちの近くにふわりと舞い降りた。
「マルス様！」
着地と同時に、シーダ王女が愛馬の鞍から飛び降りて叫んだ。弾む息を整えようともせずに、一目散にマルスの許へ駆けよってくる。そのただならぬ様子に、一同の間に緊張が走った。
「どうしたんだ、シーダ。何かあったのか」
マルスはシーダを落ち着かせようと彼女の両腕をつかむと、慌てずに訊ねた。
「城が、襲われているの。ガルダの海賊たちが、突然大勢やってきて……」
「どうしてそんなことに」
緊張の糸が切れたのか倒れかかるようにして胸に顔を埋めてくるシーダをだきとめながら、マルスは驚きを隠せなかった。ガルダの海賊と言えば、タリスの対岸にある大陸の港町に巣食う海賊団だが、彼らが一国を相手に戦いを挑んでくるとは予想外のことだ。他国との貿易で経済が成り立つタリス王国の周辺海域は、多くの商船が行き交う航路でもある。だからこそ、海賊たちの略奪も商売として成り立つのだ。生かさず殺さずの原則を超えて、海賊が一国の王都を襲撃するなどということは、通常は考えられないことであった。

「先手を打たれましたな。おそらくは、帝国の差し金でしょう」
冷静に状況を見据えながら、モロドフが言った。
「違いありません。ニーナ王女の檄文がタリスにも届いたことは、すでに帝国も知っているはずです。騎士団を持たないタリスを滅ぼすのならば、正規軍を動かさずとも海賊で充分だと考えたのでしょう」
リフが、モロドフの推測に賛同した。
「おそらくは、タリスを滅ぼさせた後に、海賊を討伐するつもりなのでしょうな。どんな報酬を約束されたかは知りませんが、海賊たちも愚かなことです」
「そんな。帝国はそこまでするのか」
マルスが、怒りを抑えられずにモロドフに問い返した。いかに海賊とは言え、利用だけ利用するという戦略は騎士として恥ずべき作戦だ。
「おそらく、間違いないでしょう。そうでなければ、正規軍が進軍してくるはずです。帝国本来の戦力をもってすれば、海賊の力を借りる必要などありません」
「許せない。――シーダ、城は大丈夫なのか」
マルスはシーダの顔を上げさせると、現状について訊ねた。
「門を閉ざして頑張ってはいるけれど、長くはもちそうにないの。もともとタリス城は戦用（いくさ）に造られた物じゃないから。お父様は、私にマルス様と一緒に逃げるようにおっしゃったけれど、私には城のみんなを見捨てることなんかできない。お願い、マルス様、お父様たちを

助けて」

タリス王は、娘をマルスに託すために彼女を城から逃がしたのだった。たとえ城が落ちたとしても、シーダがいればタリス王家の血は残される。海賊が島の西側に集中しているうちならば、東から船で逃げることもできるだろうということだ。

「それじゃ、同じだ……」

小さな声で、マルスはつぶやいた。

王家を守るため、一番幼き者を逃がすために、他の者が犠牲となる。アリティア陥落のあの日、戦いですでに父親を失っていたマルスは、母リーザと姉エリスによって少数の騎士たちとともに城から逃がされたのだった。最後まで囮（おとり）として城に残ったリーザ王妃は戦死し、エリス王女の生死は、未だにわからないままであった。

「シーダ、安心してくれ。タリス王は、きっと僕たちが助ける」

マルスは、シーダの瞳をのぞき込んで言った。

「みんな、聞いてくれ」

臣下たちの方を振り返ると、マルスはよく通る声で力強く言った。騎士たちが、一斉にいずまいを正した。

「聞いての通り、今タリスは帝国の手先に襲われている。敵は多く、僕たちは寡兵（かへい）だ。だが、僕は逃げない。ここで逃げては、二年前の繰り返しだ。それに、この敵すら倒せないようでは、とうてい帝国と戦うことなどできはしないだろう。今こそ、アリティア騎士団の力を見

せるときだ。全軍で出撃する！」

マルスの言葉に、騎士たちが一斉におうと答えた。周囲をゆるがす大音声とまではいかなかったが、それが逆に、個々の騎士たちの声を一つ一つ聞き取れる結果にもなった。彼らの意志は、彼ら自身が決めたものであり、全員が同じ思いでまとまっていた。命令だからしかたなく同意すると言うような者は、一人としていなかったのである。

マルスたちは急いで身支度を整えると、タリス城へとむかった。

2

血飛沫が舞った。

皮の胴衣ごと胸を深く斬られ、絶叫とともに海賊が橋から城の堀へと落下していく。大きな水しぶきが上がり、剣士の足下をわずかに濡らした。

「ええい、何をやっている。奴を叩き殺せ！」

海賊たちを指揮していたガザックが叫んだ。橋の上の剣士を、化け物でもあるかのように睨みつける。そのたった一人のために、城の正門を突破することができないでいるのだ。すでに門は打ち壊したというのに、城内に突入することができなければ制圧することができない。

件の剣士は、何人やってきても無駄だと言いたげに唇の端に冷笑を浮かべた。力強い琥珀

の瞳で敵を見据え、金色の前髪を後ろに梳(す)き上げた面立ちは秀麗と呼んでもよかった。だが、左頬にある大きな刀傷が彼の来歴を無言で物語り、敵を圧倒していた。

「いかにタリスで名をはせた傭兵オグマでも、数で一気にかかれば敵じゃねえ。奴は橋の上から動けねえんだ」

ガザックは、怒鳴りながら手下たちを集め始めた。門扉がない以上、オグマの方から討って出てくるとは考えられなかった。彼が今の場所にいなければ、海賊たちが一気に城内になだれ込むからだ。

橋をはさんでオグマと海賊たちが睨み合いを続ける間にも、戦いは進んでいった。堀に浮かべた小舟(ボート)から、海賊たちが城壁に手鉤のついた縄(ロープ)を投げ上げる。登ってくる海賊を城内に入れまいとして、斧を持った戦士たちがあわただしく城壁の上で動いていた。だが、圧倒的に数が少ない。最初の奇襲のときに城外で海賊と戦ったタリス傭兵部隊は、かなりの損害を受けていたのだ。海賊から市民を守るために、全力で戦えなかったのである。籠城(ろうじょう)せざるをえなかったのも、初戦の損害の大きさのせいに他ならなかった。

いくらオグマが名だたる傭兵でも、落城は時間の問題に思われた。

「だめだ、防ぎきれない」

城壁の上で斧を振るっていたサジが、同じように必死に戦っているマジやバーツにむかって叫んだ。

「頑張るんだ。ここで敵を中に入れたら、下で頑張ってる隊長に申し訳が……」

答えかけたマジにむかって、片手を城壁の縁にかけて上半身を伸び上がらせた海賊が斧を振り上げた。
「後ろだ！」
バーツが叫んだが、間に合わない。だが、マジが振り返ると、海賊は斧を振り上げたままの姿であおむけに落ちていった。一瞬、城壁の上の戦士たちは何が起こったのかわからなかった。だが、落ち着いて周囲に気を配ると、断続的に風を切る音が聞こえ、そのたびに城壁の上に登りかけた海賊たちが矢に射抜かれていくのに気づいた。
「援軍だ！」
サジが、嬉しそうに叫ぶ。その目には、海賊を弓で狙い撃ちにしているゴードンの姿が映っていた。そして、数騎の騎士たちが大地を踏みならしながら突っ込んでくる。
「どけどけどけぇ！」
後に赤き猛牛という異名をとることになるカインが、露払いとして海賊たちの間に突っ込んでいった。その突進を止められる者は誰もおらず、海賊たちは彼の繰り出す槍と馬の蹄を逃れるために算を乱して逃げ出した。だが、カインの猛攻にすべての海賊が逃げ切れたわけではない。
「あまり張り切りすぎるなよ」
後に続くアベルが、親友でもありライバルでもあるカインに釘を刺した。後に黒豹の異名をとるアベルは、逃げ惑う海賊たちを華麗な槍さばきで確実に倒していく。

先発した騎兵たちと海賊たちが戦闘を繰り広げる一方、歩兵を引き連れたマルスも戦場へ戻ってきた手下たちを追い立てると、ガザックは抜け目なく後方へと下がっていった。

「馬鹿野郎ども。後少しで、この島が俺……、いや、俺たちの物になるってえときに、逃げる奴がいるか。俺たちゃガルダの海賊だ。騎士団だろうが何だろうが、やっつけちまえ」

ガザックが手下たちを怒鳴りつけた。だが、その彼も次の瞬間、我と我が目を疑った。

「あれは……。何でアリティアの騎士団がこんな場所にいるんだ」

ジェイガンの後に続く騎兵の掲げる旗を見たガザックがうめいた。その旗に描かれている紋章は、紛れもなくアリティア騎士団のものだ。彼は、海賊の常として、獲物を確定するために各国の紋章はしっかりと頭の中に叩き込んでいたのですぐにわかった。

「アリティア騎士団推参。タリス傭兵の方々、御安心めされい」

朗々とした声でジェイガンが叫んだ。

「同盟国タリスを害する者たちよ、愚かなる者たちは我らが刃を受けるがいい。悪しき名を残したくない者たちは、武器を捨ててそうそうに立ち去れい」

耳を聾するように響き渡るジェイガンの口上と、突然現われたアリティア騎士団のあまりの勇猛ぶりに、海賊たちは完全に浮き足立った。城を攻める手を休めて、どうしたものかと指揮をとるガザックの許へ集まってくる。彼らは、マルスたちが少人数であることにはまだ気づいてはいなかった。

「怯むんじゃねぇ」

と到着した。
「ここは僕たちが守ります。あなたはいったん城の中へ」
マルスが、海賊たちを蹴散らしてオグマの許へ駆けつけた。
「いや、ここを守ってくれると言うのならば、俺は敵の大将の首を取ってこよう」
やっと自由に動けるとオグマが喜んだ。
「一人では無理です」
マルスがオグマに言った。
「お前……、いや、あなたは……」
マルスを見て、オグマが軽く目を細めた。
「どうしてもいくと言うのならば、僕たちもいきましょう」
「いいだろう。敵の頭を潰して、戦いを終わらせる」
言うなり、オグマは走り出した。
マルスはドーガに城門の守りを命じると、数名の兵を率いて彼の後を追った。
守勢から攻勢に転じたオグマの戦い方は凄まじかった。あたるを幸いに、海賊どもを斬って捨てていく。慌てたガザックが、周囲にいた手下どもを前面に押し立てた。その間に自分は敵から逃げ出そうとする。
「逃がすか。王子！」
数人の海賊たちを一手に引き受けたオグマが、マルスを促した。その声にマルスは飛び出

した。行手を邪魔されることなく、一気にガザックに追いつく。
手下を押し退けて逃げようとしていたガザックは、マルスのそのあまりの若さを見て足を止めた。脇に追いやろうとしていた手下の背中を押して、マルスの方に突き出す。
体勢を整えないままに前へ押し出された海賊は、マルスが気合いとともに振り下ろした剣によって倒れた。だが、それを待ちかまえていたかのように、ガザックがマルスに迫った。頭上から振り下ろされようとしている斧を剣で受け止める時間がマルスにはない。
「マルス様！」
頭上から響く声に、ガザックが瞬間顔を上げた。細身の槍を構えたシーダを乗せたペガサスが、真一文字に彼にむかって急降下してくる。彼の頭と右手を狙ってのばされる槍を、ガザックが慌てて避けた。その一瞬に体勢を立て直したマルスは、素早く手首を返して踏み込むと、剣を横に薙ぎ払った。脇腹を大きく切り裂かれたガザックが、地面を転がるようにして絶命する。
「御無事でしたか、殿下」
慌てて駆けつけたジェイガンが、マルスの無事を確認した。
「聞け海賊どもよ、お前たちの指揮官は、我らが主アリティア王国王子マルス殿下が討ち取った。これ以上の闘いは無用。すぐさま剣を捨てて降伏せよ」
ジェイガンの言葉に、今度こそ海賊たちは戦意を失った。次々に斧を捨てて投降するなり、海岸に泊めた自分たちの船へと逃げ帰る。

こうして、新生アリティア騎士団としての初戦は、マルスたちの勝利で終わった。

3

「御無事で何よりでした」

シーダに請われてタリス王の安否を確認しにいったマルスは、王と王妃の無事な姿を見て安堵した。

「かたじけない、マルス王子。シーダを預けようとしたわしらを救ってくださるとは。タリス建国のおりといい、アリティアには感謝が絶えぬ」

娘をだきよせながら、タリス王が礼を述べた。

「いいえ、今日までの御恩を考えれば、当然のことです。あの日、帝国に追われてこの島に流れ着いた僕たちを、陛下は暖かく迎えてくださいました。帝国に害されることなく今日を迎えられたのも、すべて陛下のおかげと存じます」

タリス王が、逆に礼を述べるマルスを注視した。かつて騎士団に守られながらこの島にやってきた幼い子供の姿はそこにはなかった。彼の前に立っているのは、強い意志を持った若者だ。

「陛下、マルス殿下は、ニーナ王女の呼びかけに応じて、祖国の再建とドルーア帝国の打倒に立ち上がる御決断をなされました」

マルスについてきたリフが、タリス王に報告した。
「そうであったか。よくぞ御決心なされた。だが、敵も我々の動きを察して、このような先手を打ってきたようだ。なれば、準備が整い次第、出立なされた方がいい。我が国からも、いくばくかの義勇兵をお預けしよう」
タリス王が言うと、いつの間にやってきていたのか、タリス傭兵部隊の隊長であるオグマがマルスの前に進み出た。
「陛下の御命令により、不肖オグマ・スビル、本日よりマルス王子殿下に剣をお預けいたします」
片膝をついたオグマが、マルスに頭(こうべ)を垂れた。
「頭を上げてください。あなたほどの剣士ならば、こちらから願い出て力を貸してもらうのが筋です。しかし、あなたを僕たちに同行させてしまっては、タリスの守りがおろそかになりはしないのでしょうか」
オグマを立ち上がらせると、マルスはタリス王に聞いた。立ち上がったオグマは、マルスよりも頭ひとつ高い。この上もなく頼もしい味方だが、それだけに、タリスを守る要の存在であるはずだった。
「それは構わん。わしらとて、考えなしにオグマを王子に預けるのではないのでな。ガルダの海賊が帝国と手を組むことは、密偵の報告によって予想できていたのだ。その場合、アリティア騎士団は、どうしても海賊たちと戦わなければならなくなる。ただでさえ、大陸に上

陸するための障害となる上に、彼らをやり過ごして進軍すれば、後で帝国軍と海賊から挟撃される恐れもある。後顧の憂いを絶つためにも、ガルダの海賊は討伐する必要があるのだ。そして、海賊がいなくなれば、タリスを守るのに多くの兵は必要でなくなる。帝国が直接攻めてくれれば話は別だが、彼らもオレルアン王国攻略でその余裕はないだろう。だとすれば、タリスの兵は王子に預けるのが最良の策ではないのかな」

矍鑠とした口調で、タリス王がマルスに説明した。さすがは、剣士ロレンスとともに、豪族が互いに覇権を争っていたタリス島を一代で統一した剛の者であると言えようか。マルスの資質を早くから見抜き、真に勇者アンリを継ぐ者として期待をかけた答えが、これから明らかになるだろうと彼は考えていたのだ。そこには、情だけではない、王としての広い視野からの考えが含まれていた。

「おっしゃる通りです。僕は、全力をもってタリスの脅威を取り除いてご覧にいれます」

マルスはタリス王の策を理解すると、喜んでオグマをもらい受けた。確かに、可能な限りの兵力でガルダの海賊を倒すのが、敵対勢力を各個撃破するという兵法の基本に則ったものだ。寡兵であるマルスたちでは、複数の敵を一度に相手にする力はない。だが、オグマたちを加えたからといって、海賊たちを倒すのもそうそう簡単なことではなかった。それは、これからのマルスたちの闘いを暗示しているかのようだ。

「ところで、一つだけ頼みがあるのだが、聞いてくれるだろうか」

タリス王が、それまでと多少声音を変えてマルスに言った。マルスが構いませんとうなず

くと、彼は娘であるシーダをマルスの前に進ませた。少しおずおずと、シーダがマルスに近づいていく。
「タリス王家の名代(みょうだい)として、娘を王子の軍に同行させたいのだが、よろしいかな」
その言葉に、マルスは目を丸くして驚いた。王子と王女として、また、年の近い少年と少女として、二人はともに過ごすことが多かった。だが、日常の生活ならまだしも、戦場に彼女を連れていくことは、マルスには考えられなかった。
「それは賛成しかねます」
「私では、マルス様の足手まといですか……。私では、マルス様のお役には立てないと言うのでしょうか。私は、この命を懸けてマルス様をお守りするつもりです」
シーダは、潤んだ目をマルスにむけて訴えた。
小柄で華奢な身体、まっすぐにのびた長い髪、彼女の身体はまだ全身で少女であることを物語っていた。マルスとしては、彼女とお茶の席をはさんで語り合うことはあっても、戦場で一緒に肩を並べるなどということは考えたくもないことであった。シーダを危険な目に遭わせることは、マルスにとって耐え難かったのだ。だが、先ほどの闘いで、マルスが彼女に救われたということもまた事実であった。それに、マルスの心の中では、彼女と別れてしまいたくないという考えも大きかった。それが自身のわがままであるのかそうでないのか、マルスにはまだ判断がつかなかったのである。
「王子よ、わしの娘では不服かな。すくなくとも、天馬騎士として最低限の訓練はさせたつ

もりだが」
「いいえ、そのようなことは……」
あらためてタリス王に言われて、マルスは口ごもった。
「では、ぜひ連れていってやってくれ。身辺はオグマにも頼んであるので王子が心配することはない。それに、わしらがいくなと言ったとしても、これは自分の翼を使って勝手についていってしまうだろうからな」
タリス王が、同意を求めるように王妃の方にちらと目配せをした。何かを思い出したのか、タリス王妃がはにかむように苦笑した。
「マルス王子、私の娘をよろしくお願いいたします」
言葉少なに、王妃がマルスに言った。
「わかりました。シーダ王女、ならびにオグマ隊長とタリス義勇軍の兵士たち、確かにお預かりいたします」
マルスは、はっきりとそう答えた。
「では、兵士の人選はオグマに、船の手配はリフに頼むとしよう」
タリス王が決めると、各人は準備のために散っていった。
翌日、すっかり準備を整えたマルスたちは、タリス王やリフたちに見送られ、一路、大陸の玄関口であるガルダの港へと旅立ったのである。

4

「だから、俺は反対だと言ったんだ」
ダロスは激しい調子で海賊の首領であるゴメスに言った。ガルダの海賊団に属しているとはいえ、もともとの彼は一匹狼的な自分の考えだけで動く海賊だ。がっしりした体格のダロスが凄むと、他の者を圧倒するだけの迫力がある。
「何を言ってやがる。愚痴をこぼす暇があったら、もう一度タリスを攻める準備をしねえか」
ゴメスは机に足を投げ出して椅子にふんぞり返ったまま、ダロスの言葉を聞き流した。
「まだやるつもりなのか」
呆れて物が言えないと、ダロスは大きく肩をすくめた。
「それも帝国の命令か。だいたい、その帝国は何もしちゃくれないじゃないか。噂じゃワーレン近くの砦に兵隊を集めてるっていうのに。少しぐらいこちらに援軍をよこしてもいいんじゃないか。それをしないということは、俺たちを捨て駒にしているってことだ。それすらてめえはわからなくなっちまったのかよ」
「聞いた口をぬかすな。軍がきたら、手柄が横取りされちまうじゃねえか。そうか、貴様グルニアに媚びを売って、俺を追い落とすつもりだろう。野郎ども、かまわねえからダロスを殺しちまえ。俺様に逆らった奴として見せしめだ」

ダロスは仲間たちに弁明しようとしたが、すぐにそれは無駄だと思い知った。
「わかった。貴様とは、もうこれまでだ」
ダロスは叫ぶと、近くにいた海賊を突き飛ばして、一目散にゴメスの部屋から逃げ出した。後ろから、ゴメスの怒号とともに海賊たちが追いかけてくる。追っ手と戦って浅手を負いながらも、ダロスはなんとか自分の船までたどり着いた。
「出港だ！」
渡り板を蹴り飛ばしながら、ダロスは叫んだ。何があったのか聞き返そうとした船員たちは、斧を手に走ってくる海賊たちを見て慌ててダロスの命令を実行した。ゴメスに意見すると決めたダロスが、いつでも船を出せるようにさせていたのが幸いした。
他の船はすぐには出港できず、ゴメスもタリス攻めを前に戦力を割くことをよしとしなかったので、ダロスの船はそのまま逃げることに成功した。
「何があったんですか」
カシムという名のタリスの猟師が、おどおどとした口調でダロスに訊ねた。
「なあに、馬鹿と手を切っただけだ」
ダロスは、一言そう答えた。
やがて、少し前から吹き始めた南風に乗って北へ進んでいったダロスの船は、タリス方向からやってきた一隻の船と遭遇した。小振りなダロスの船とは違って、大型の海賊戦艦だ。
「あれは、ガルダ海賊団の海賊船だな。追っ手かもしれない。みんな、戦闘の準備だ」

あわただしくダロスが命令した。
「いいか、先手必勝だ。一気に船をよせて、白兵戦に持ち込むぞ。カシム、お前も戦えよ」
ダロスは、頼りない腰つきで弓を構えるカシムの背中を思い切り叩いた。
咳き込みながらカシムがまだ遠い敵船の方を見ると、甲板から何かが空に舞い上がった。
巨大な鳥のようでもあり、白い馬のようでもある。タリスの国民であるカシムは、その姿に見覚えがあった。
「あれは、シーダ様……!?」
矢をつがえた弓を下におろし、カシムが驚きを隠せずに言った。
「本当だろうな」
その言葉を聞き逃さなかったダロスが、凄みのある声で聞き返した。慌ててカシムが大きくうなずく。
一計を案じたダロスは、マストに白旗を掲げた。船を近づけると、カシム他数人を連れて、ダロスは相手の船に乗り込んでいった。
「そこで止まれ!」
用心深く縄梯子を下ろしたバーツが、登ってきたダロスをその場で止めた。
「おいおい、話し合いにきたんだから物騒な物は下ろせや」
少しも怯むことなく、ダロスはバーツの斧を片手で下げると、ポンポンと彼の肩を叩いた。
その剛胆な態度に、バーツが呆れるよりも感心してしまう。

「やっぱり、カシムじゃない。何で、あなたが海賊たちの仲間にいるの」
　ダロスの後に続いて現われたカシムを見て、すでに船に戻っていたシーダが叫んだ。タリス島では数少ない猟師として王の狩りの案内役を務めていたのを、何度か見かけていたのだ。
「実は、母の病気の薬代ほしさに……」
　しどろもどろにカシムが言い訳をする。シーダは深くため息をつくと、カシムを少し離れた場所へ呼んだ。
「やれやれ、結局役立たずか」
　ダロスはカシムをシーダに任せると、交渉相手を探してマルスたちをぐるりと見回した。
「タリス軍と見受けたが、責任者は誰だ」
　あくまでも、対等の物言いでダロスが訊ねた。
「話を聞こうか。僕がアリティアのマルスだ」
　マルスが名乗ると、ダロスは驚いて彼を見た。だが、すぐに得心した。アリティア軍の残党が力を貸したために、タリス攻めは失敗したことがわかったからだ。彼はこれまでのいきさつを説明すると、海賊団の首領であるゴメスを倒す方策をマルスに申し出た。共通の敵を倒すことは、お互いに今後の危険をなくすことになると説いたのだ。
「迂闊（うかつ）に信じてよろしいものでしょうか。なにしろ、相手は海賊です」
　モロドフが、マルスに助言した。
「海賊って言っても、いろいろあるんだぜ。中でも俺は義賊を気取ってるんでな。襲うのは、

帝国に媚びへつらってる商人だけだ。俺の船に乗ってる奴らも、そういう奴らに苦しめられた奴ばかりでな。疑うんなら、あいつに聞いてみればいい」
ダロスは、しきりにシーダに頭を下げているカシムを顎でさして言った。何やら、シーダに一生仕えますとかいう言葉が微かに聞こえてくる。それを聞いて、ほとんどの者が苦笑してしまった。
「いいでしょう。僕はあなたを信じます」
「殿下……」
決断するマルスに、モロドフが慌てて口をはさんだ。
「じいは心配かもしれないが、僕は彼を信じたい。もし、何かの罠だとしたら、ここまで堂々とはできないだろう。それは、僕たちが彼らを傷つけないと信じているからだと思うんだ」
マルスが説明した。嘘か真か、その通りだとダロスがうなずく。
「そうだな……。俺は騎士じゃないからうまく言えないが、ガルダ海賊団をぶっつぶすまでは、マルス王子の命令に従うと誓おう。まあかたちってことになるが、これでいいか？」
ダロスは懐剣を取り出すと片膝をつき、彼としてはうやうやしい態度でマルスに手渡した。マルスがそれを受け取るのを見て、ジェイガンがマストの上の物見に隠れていたゴードンに合図を送った。密かに弓を構えていたゴードンが、ほっとしたように緊張を解く。それに気づいたダロスは、豪快に笑い出した。
「うんうん。王子たちが単なるお人好しでなくて一安心だ。用心深い仲間なら、俺たちも安

心して戦える。さあ、一緒に一暴れしようぜ」
「よし、すぐに準備に取りかかろう」
　ダロスの言葉に、マルスは全員に命令した。

5

　夕方も過ぎ、海賊たちも夕餉(ゆうげ)をとって一休みするころ、ガルダの港に二隻の船が戻ってきた、一隻は、タリス攻めに参加したガザックの船であり、もう一隻は先刻港から逃げ出していったダロスの船であった。ダロスの船はあちこち損傷しており、ガザックの海賊戦艦に曳航(えいこう)されているようであった。
　知らせを受けたゴメスは、手下たちの前でニヤリと笑った。
「ダロスも運のない奴だ。おおかた、戻ってくるガザックの船に喧嘩でも売ったんだろ。ガザックの奴も、死んだって聞いたが悪運強く生きてたようだな。それとも、生き残った奴らが動かしてるのか……。どちらにしろ、てめえらで出迎えてやれ。ダロスとガザックの奴が生きていたら、俺のところへ連れてこい。刃向かう奴と失敗した奴は、少し仕置きしてやらねえとなあ」
　ゴメスの命令を受けて、主だった手下たちは桟橋へとむかった。
　次の攻撃の準備で港に集まっていた海賊たちの見守る中、二隻の船はどんどんと近づいて

きた。やがて港内に船が入ってきたときに、突然薄闇が明々と照らし出された。見れば、ダロスの船が大きな炎につつまれている。ガザックの戦艦が待っていたかのように転進し、炎につつまれた船は、単艦でそのまままっすぐに港へと突っ込んでいった。おりしも、港には次の攻撃のための船がひしめいていた。ダロスの船が激突した海賊船はあっという間に炎が燃え移り、次々と他の海賊船を巻き込んでいった。ダロスの船に積まれた油が海面に炎を広げたのも、すべての船を巻き込む力となっていた。

港は大混乱になった。その間に、モロドフが指揮する海賊戦艦は、港を出て漁船専用の小さな桟橋に停泊した。幅広の渡り板を渡し、アリティア騎士団の猛者（もさ）たちが上陸する。

「よいか、存分に暴れ回れ」

ジェイガンに言われるまでもなく、カインとアベルを先頭とした騎士たちは港で混乱している海賊たちにむかって馬を走らせた。

そのころ、マルスとダロスは、オグマたち歩兵を連れ、小舟でゴメスのいる館にむかっていた。ジェイガンたちが敵の船を潰して陽動に出ているうちに、強襲して一気にゴメスを倒そうというのだ。

「あれでなかなか手下をまとめるという術には長けた奴でな。そのかわり、自分以外の奴には権力を認めないときた。だから、ゴメスさえやっちまえば、海賊たちはてんでバラバラになるって寸法だ」

ダロスが作戦を説明する。

館の裏手にたどり着くと、マルスたちは一気に奇襲を敢行した。サジたちが扉を叩き壊し、ドーガとオグマが突入していく。港への攻撃で浮き足立っていた海賊たちは、少ない兵でまともにマルスたちと戦うこともできずにあっけなく倒されるか逃げ出すかしていった。

そして、ゴメスが、実際に何が起こったのかを知ることはついになかった。闘いの中を逃げ出そうとして、オグマにあっさりと斬り捨てられたのだった。遅れて駆けつけたダロスによって、すでに死んでいる男がゴメスだとわかったという次第だ。

館を制圧すると、ダロスが予定通りに火を放った。燃え広がった炎は、館をつつんで巨大な篝火(かがりび)となる。

「見ろ、お前たちの本拠地は火につつまれたぞ。首領も討ち取った。さあ、どうする」

館の火を見て、カインが海賊たちにむかって大声で言った。その言葉に、敵が一気に戦意を喪失して逃げ出す。

この夜、ガルダの海賊団は壊滅した。

翌日、マルスたちはガルダの町の人々から解放軍として賞された。

海賊たちによって、人々は日々の生活にも事欠いていたのである。略奪されていた食料や娘たちを取り戻すと、人々は厚くマルスたちをもてなしてくれた。

「ありがとう、ダロス。あなたのおかげで、有利に戦い、勝利することができた。よければ、僕たちと一緒にきてはもらえないだろうか」

出発を間近に控えて、マルスはダロスに言った。

「それは遠慮しておこう。陸は俺の性に合わないからな。それに、約束はゴメスを倒すまでだったはずだ。俺は、また海賊に戻るさ。おっと、誤解するなよ、襲うのは帝国の船だけだ。タリスやガルダには奴らが近づけないようにしてやるぜ」
新しく海賊団の首領に納まったダロスが言った。帝国に協力しているペラティ王国が自国の島から帝国の領土や占領地に物資を運んでいるため、獲物には事欠かないのだろう。
「代わりに、カシムの奴がついていくと言っているから、やっかいでも面倒みてやってくれ」
マルスはダロスの願いを聞き入れてカシムをタリス義勇軍に組み入れると、オレルアンにむかって進軍を開始した。
ルートとしては海路と陸路があったが、海路は長い船旅が馬に負担をかけすぎるのと、船が寄港できる場所が限られるという理由で見送られた。
陸路は、アカネイア王国とオレルアン王国の間を隔てる山脈を越えていくものだった。ちょうどガルダから西にむかって山脈に入ったところが分岐点である。そこから南にむかえば、レフカンディ渓谷を通り、港町ワーレンか、アカネイア王国の首都パレスにいくことができる。逆に北へむかえば、山地を抜けてオレルアン平原へと出ることができるのだった。当然、マルスたちは北へと進軍していった。
途中途中の村々で義勇兵も募り、少しずつではあるがやっと小規模な軍勢らしきかたちになっていく。

いよいよ山脈深く分け入らなければならなくなり、麓の村で道案内を頼んだときのことであった。
「北へむかうのでしたら、サムスーフ山を越えなければなりません」
村の長老は、厳しい顔で話し始めた。
「道の険しさもさることながら、山はサムシアンと名乗る山賊が根城にしていてとても危険なのです。村人たちは、デビルマウンテンと呼んで恐れております。先日も、私たちが止めるのも聞かずに一人のシスターが山に入り、そのまま戻ってこないくらいです。ガルダから手に入る薬の値段が数倍になって、代わりの薬草を取りにいくと言っていたのですが……」
アカネイア王国が帝国に占領されてしまって以来、辺境警備隊がこないのをいいことに山賊たちが好き勝手をしていいのだ。
「それに、サムシアンには、少し前からナバールという名の傭兵がおります。今までも、パレスを落ちのびた騎士様が何人か北へむかいましたが、逃げ戻ってこれたのは一人だけです。その方も、そのときの傷が元で亡くなりました。他の人々については、無事に山を越せたかどうかも……」
その傭兵の名を聞いたとたん、シーダがオグマの顔を振り返って見た。
「オグマ……」
「彼だとしたら、本当にやっかいですな」
言いつつ、オグマはどことなく楽しげな、複雑な笑みを唇の端に微かに浮かべた。

「でも、本当にあのナバールであるなら、なぜ山賊の仲間なんかに……」
解せないと、シーダが首をかしげた。かつて、タリスの豪族の残党が小さな反乱を起こしたとき、彼女はナバールと出会っていた。それは、さらわれたシーダが牢に入れられていたときのこと。結局反乱は失敗し、豪族は倒れたのだが、残った配下の者たちがせめてシーダだけでも殺そうとしたのだった。だが、ナバールが彼女を助けてくれた。無力な女子供を傷つける剣はあってはならないというのがナバールの信念であったからだ。そこへ、オグマが駆けつけてきた。二人の剣士の戦いは互角であり、シーダが間に割って入ったために決着はつかず、ナバールは無事に落ちのびていったのだった。
「さあ、それは奴にも都合というものがあるのでしょう」
二人のやりとりに、マルスは詳しい話を聞かせてくれとシーダに訊ねた。その間に、モロドフが長老を説得する。渋る長老に、モロドフがガルダ解放の事実と、道案内の身の安全を保証した。なんとか長老を納得させると、マルスたちは案内人を雇ってサムスーフ山へとむかった。
「ここから、道は二つに分かれます」
山の中腹にさしかかったとき、案内人の若者は西と北を指さして言った。西は本来の街道だが、途中でサムシアンが造った関所を通らないといけないと言う。通行税と称して旅人たちから金品をまきあげるための小規模な砦だそうだ。北の道は獣道で、谷を通ってサムシアンたちの本拠地を迂回して街道に出られるのだと言う。

「北の道と言いたいところだが、とても馬では進めそうにないな」

困ったようにマルスは言った。すぐに簡単な軍議が開かれた。結論として、サムシアンとの戦いが避けられないのならば、積極的に彼らと戦うべきだということになった。部隊を二つに分け、アリティア騎士団は街道を西へむかい、関所を攻略することとなった。その間に北上した歩兵部隊は、敵の背後から奇襲をかけるという作戦だ。敵が本拠地を出て関所にむかうようであれば、手薄になった本拠地を叩き、敵を追撃してこれを殲滅する。もしも敵が動かないようであれば、関所を先に攻略し、後に騎馬隊と合流して全軍で敵の本拠地を叩く。地の利が敵にあるとは言え、新兵たちを戦いに慣らすためにはちょうどいい戦闘であるとも言えた。それに、山賊たちがいなくなればガルダの町と同じように人々は助かるに違いない。

作戦はすぐに実行され、マルスの率いる歩兵部隊は獣道へと分け入っていった。先の見えない侵攻ルートの安全を確保するため、シーダが上空からの偵察をかってでる。もう一隊はジェイガンが率い、騎馬隊を中心に弓兵隊と新兵を連れて関所へとむかっていった。

6

「しっ。静かに。声をたてないで」

ジュリアンは、人差し指を立てて牢の中の娘を黙らせると、音を立てないようにして錠前を外した。

「いよいよ、私を売るのですか」
か細い声で、レナがジュリアンに訊ねた。彼は、数週間前にレナが薬草を探す途中でサムシアンに捕まってしまってから、ずっと世話係としてそばにいた青年だった。サムシアンの首領であるハイマンは、レナをノルダの奴隷商人に売るつもりだと彼女に告げていた。いよいよ、その奴隷商人が彼女を引き取りにきたらしい。
「違う、俺と一緒に逃げるんだ」
ジュリアンは、そう言うとレナの腕を引っ張った。
「本当に？　でも、それではあなたが……」
言いかけたレナを、ジュリアンはきつくだきしめて黙らせた。
「レナさんは、俺が守るって約束しただろ」
オレルアンの混乱に乗じて城に盗みに入ったジュリアンは、相棒を捕らえられてほうほうの体でここまで逃げてきたのだった。サムシアンに捕まって仲間となった彼は、新米として雑用をやらされていた。もともと密かに忍び込んでお宝をいただく盗賊であった彼は、強盗として力で金品や命を奪うサムシアンのやり方には馴染めずにいた。そのため、レナの見張りという他の男たちにとっては退屈な仕事も、喜んでやっていたのである。そのうちに情が移ってしまったのは、彼としては自然ななりゆきであったかもしれない。
「明日になったら、奴隷商人どもがやってくるって聞いたんだ。もう今日しかないんだ。さあ、早く逃げ出そう」

ジュリアンに促されて、レナが速足で彼の後に続いた。素直で暖かいジュリアンの言葉に、レナは何度となく挫けそうになった心を救ってもらったのだ。彼女としても、自然と彼に信頼以上のものをよせていった。何一つ強制することのない彼の態度は、彼女が国を捨てる理由となった出来事とは正反対のものに思えたからだ。

見つからないようにと注意しながら、二人は館の中を進んでいった。だが、突然の脱走計画がうまくいくはずもない。扉を開けて外へと出たとたん、二人はナバールと出会ってしまった。

よりによって、一番腕の立つ相手に見つかってしまったのだ。彼がサムシアンに傭兵として雇われたのはちょうどレナが捕まった翌日のことである。ハイマンが館の中を案内して回っていたのを、レナもジュリアンも目撃している。名のある傭兵が山賊に雇われるはずもないと思っていたのだが、彼は牢のそばでハイマンに承諾したのだった。その後は、紅の剣士と呼ばれるナバールの強さを、ジュリアンは何度か見せつけられていた。

かなうはずはないと、ジュリアンにもレナにもわかっていた。それでも、一瞬身体を強(こわ)ばらせた後、ジュリアンはレナを後ろ手にかばいながら懐剣を強く握りしめた。

だが、そんな二人をじっと見つめたナバールは、切れ長の鋭い目をついと横にむけて外すと、一言も言葉を発せずに立ち去っていったのだった。

ジュリアンは、一気に力が抜けたかのように肩を落とした。少し遅れて、全身に震えが襲ってくる。そんな彼をささえながら、レナは長い黒髪の後ろ姿に、深々とお辞儀をした。

「さあ、急ごう、レナさん」
ジュリアンはレナを促すと、谷にむかう木立の間に駆け込んでいった。

7

それぞれの運命の糸がより合わされたのは、谷間でのことであった。
偵察としてマルスたちに先行して飛んでいたシーダは、谷間を逃げる男女と、それを追う山賊たちの姿を発見したのだ。ジュリアンたちの脱走は、ナバールが報告しなくとも、すぐにハイマンの知るところとなっていたのだった。
シーダは、逃げる女性の服装からそれが少し前に行方不明になったシスターだと直感した。そして、山賊たちの中に、一人だけ出で立ちの違う男を見つけて、彼女は身震いした。それは、彼女の記憶にあるナバールの姿であったからだ。
もっとよく確認しようとして高度を下げかけたシーダは、慌てて旋回した。山賊たちの一人が矢を射かけてきたからだ。その飛び方は、兵たちの先頭に立って進んでいたマルスの目に、異変として映った。
「何かあったようだ。急ごう」
マルスは隣を進むドーガに声をかけると、全速で走り出した。だから偵察なんかしなくていいと止めたのにと、マルスは心の中で繰り返す。

「お待ちください、殿下！」
　一人だけで先行するマルスにむかってドーガが慌てて叫んだが、彼は聞いてはいなかった。シーダのことで頭がいっぱいだったからだ。鎧のせいでドーガが追いつけないでいると、殿(しんがり)を守っていたオグマが彼の横を走り抜けていった。彼もまた、シーダの姿を見て、異変に気づいたのだった。
「殿下をお願いいたします」
「わかった。貴様らも急げよ」
　そう答えて、オグマはマルスの後を追った。
　そんな二人の姿は、上空のシーダからも見えていた。このままだと、シスターたちは山賊たちに追いつかれてしまう。それに、オグマが追いつく前に、マルスは山賊たちと、いや、ナバールと接触してしまうだろう。戦いが始まれば、マルスの死は決定的であった。
「私は、マルス様を守ると誓ったのだから。私は……」
　シーダは口の中でつぶやくと、意を決して地上にむかって急降下した。山賊の矢が飛んでくる。ヒュンという音を残して、矢がシーダの頭のそばを通り過ぎていった。反射的に片目を細めながらも、彼女は強引に地上に降り立った。
　突然の出来事に驚いたのは、ジュリアンたちであった。いきなり、目の前に天馬騎士が降り立ったのである。
「あなたは、白騎士団の方……？」

「さっさと、捕まえちまおうぜ。ジュリアンの小僧以外は傷つけるなよ、値が下がるといけねえからな」
山賊の一人が、シーダの姿を見て口笛を鳴らした。
「こりゃあ。女を追っかけてたら、二人に増えやがった。しかも、ペガサスつきとくらあ」
レナの質問には答えず、シーダは剣を抜いて身構えた。すぐに、山賊たちが現われる。
「さあ、早く私の後ろに隠れて」
のだろうが、ジュリアンとレナをも含めて、その場の誰もが動くことができなかった。
しばしシーダとナバールの間で睨み合いが続いた。実際にはほんのわずかな時間であった
疑いをいだく。シーダにしても、ナバールの言葉通りに立ち去れるとは思っていなかった。
ナバールの言葉に、山賊たちはざわめいた。彼がジュリアンたちを逃がすつもりなのかと
供に用はない、さっさと立ち去れ」
「場違いなことを。お前は、今の自分たちの立場がわかっているのか。お前たちのような子
果敢にもナバールと真正面から相対しながら、シーダは彼に問いただした。
「剣士ナバール。あなたほどの人が、なぜこんな山賊たちの仲間をしているのです」
手を出そうとする山賊の鼻先に、ナバールが素早く剣を突きつけて黙らせる。
「ふん、女は俺が……」
言葉少なに、ナバールが進み出た。
「なら、俺がやろう」

そのときである、マルスがそこにやってきた。
「シーダ！」
抜き放った剣を手に駆けてくるマルスに、シーダは蒼白になった。慌てて身を翻すと、マルスにしがみついて彼を引き留める。
「何をするんだ。これじゃ、奴らにやられてしまう。放さないか、シーダ」
困惑してマルスが叫んだ。
「お願いです、無意味な戦いはやめて。あの人と戦ったら、マルス様が死んでしまう……」
シーダは、涙を流しながら懇願した。マルスは、落ち着いて状況を把握しようと努めた。
見れば、ナバールは左手に持った剣をまっすぐに横に広げ、後ろにむけた切っ先で山賊たちが前に出られないように牽制している。
マルスが落ち着いたのを見てとると、シーダはナバールの方を振り返った。マルスは、彼女を見守るしかなかった。
「ナバール、どうか私たちに力を貸してください。あなたの剣は、もっと正しい者にこそ捧げるべき剣のはずです」
頼みながら、シーダはゆっくりと前に進み出た。
「もし、それがだめだと言うのならば、その剣で私を好きにしてください。そのかわり、マルス様たちには手を出さないで！」
剣を鞘に収め、のばした両手を軽く広げたシーダは、微かに目を細めた。

「シーダ、馬鹿なことを言っちゃいけない……！」
マルスが慌ててシーダに駆けよると、彼女の前に出て戦おうとした。その眼前に、ナバールが右手の剣の切っ先を突きつける。一瞬の出来事に、マルスはその場から動けなくなった。そのまま、両手に持った二本の剣で、ナバールがマルスと山賊たちの動きを封じ続ける。
「ナバール、私の命では不服ですか。私の願いは、あなたの耳には届かないのですか」
マルスの肩越しに、シーダは叫んだ。
「……俺は、女に斬りつける剣は持ってはおらぬ」
ナバールが、ゆっくりと口を開いた。
かつて、彼が少年であったころ……。彼が手にした短剣が、彼の意志に反して一人の女性の命を絶ったとき、彼はすべてを捨てたのであった。家系も、故郷も、名前も、すべてを捨てて彼は旅に出た。けれども、すべてから自由になったかのように見えて、実際はそうではなかった。生きるためには、彼は剣を捨てることができなかったのである。それでも、いや、それゆえに、彼は自分の剣を女子供の血で濡らすようなことはしなかった。それが彼の信念となったのだ。そして、いつか彼は、孤高の剣士、紅の剣士ナバールと呼ばれるようになっていた。
「お前が、命を懸けてまで俺をほしいと言うのならばしかたがない。力を貸してやろう」
ナバールの言葉に、シーダはほっとしたかのようにマルスの腕の中に倒れ込んできた。だが、山賊たちにとっては、彼の言葉は明白な裏切りであった。

「貴様、親方に雇われたくせに、裏切るつもりか」
山賊たちは、ナバールとマルスたちを取り囲んで怒鳴った。もはや、ペガサスの後ろに隠れるようにして立っているジュリアンたちは二の次になっている。それに、マルスという名が帝国の手配書にあったマルス王子であるならば、彼らにとっては最高の獲物であった。
一触即発の事態になったとき、運悪くオグマがやってきた。
「シーダ様、マルス王子。お下がりください！」
叫びながら、オグマはナバールに斬りつけていった。さすがに、ナバールが二本の剣を交差させてナバールの一撃を受け止める。
「腕は落ちていないようだな……」
顔をつきあわせて、二人は言い合った。
「違うの、オグマ。彼は私たちの味方になったの」
シーダが叫ぶ。同時に、二人が動けないと思った山賊たちが、一斉に襲いかかってきた。
素早く剣を引いた二人が、背後から迫る山賊を一刀のもとに斬り倒す。そのまま背中合わせに立つと、二人は鋭い眼光で残る山賊たちを睨みつけた。先ほどまでの勢いもどこへやら、射すくめられた山賊たちの動きが止まる。次の瞬間、山賊たちは二人の傭兵の真の恐ろしさを、その身をもって体験することになるのだった。
その間に、マルスはシーダを連れて安全なところまで下がっていた。二人の加勢にいこうとするが、熟練の剣士たちの戦いの中には入り込むすきがなかった。一刀両断の下に敵を斬

り倒すオグマには、まさに二の太刀はいらないと言っていい。対照的に、ナバールは華麗な二刀流で、まさに剣を舞わせるという戦い方であった。マルスは彼らの邪魔にならないようにと、シーダとともにならんで剣を振るいながら、ジュリアンとレナを守った。
遅れてドーガたちが現われたとき、山賊たちはそのほとんどがナバールたちによって斬り倒され、生き残った者も手傷を負って逃げていった後であった。
「大丈夫ですか、殿下」
「ああ。彼らのおかげで助けられたよ」
心配して駆けよるドーガに、マルスは剣を鞘に収めながら言った。視線を、二人の剣士の方へとむける。オグマとナバールは、まだ剣を構えたまま奇妙な緊張感を保ったまま睨み合っていた。
「ありがとう。あなたが、紅の剣士と呼ばれるナバールですね」
マルスは、シーダを連れて二人の間に入った。それによって、さすがの二人も剣を鞘に収めた。
「アリティアのマルス王子殿下、そして、タリスのシーダ王女殿下だ」
すかさず、オグマがマルスたちの名をナバールに告げた。
「王子に王女か。戦にいくにはまだ若すぎるな」
マルスたちを値踏みするように、ナバールが視線を走らせる。
「ええ、僕たちはまだ未熟です。だからこそ、あなたのような立派な剣士の力を借りたいの

です。真に斬るべき者をこそ斬る。あなたには、人々の剣となってほしい」
「私からもお願いします」
マルスとシーダが、ナバールに請願した。
「断る理由はないな。だが、俺は安くはないぞ」
観念したかのように、ナバールが言った。シーダが嬉しそうに礼を言う。
「かつての敵が今日の友か……。奇妙なものだ」
オグマが独りごちた。
「それで、彼らは誰なのですか」
ドーガが、しゃがみ込んだままよかったと声を掛け合うジュリアンとレナをさして訊ねた。
ナバールが、二人の説明を始めようとしたが、途中からジュリアンが口数多く自分たちの説明を始めたのですぐにまた元の無口な男に戻ってしまった。
「見捨てられずに残ったのか。あいかわらずな男だ……」
ジュリアンの話を聞き終えたオグマが、ナバールにむかってつぶやいた。
「サムシアンを叩くのなら、急いだ方がいい。守りを固められるとやっかいだ」
オグマの言葉を無視すると、ナバールがマルスを促した。逃げおおせた山賊が館に戻れば、マルスたちの襲撃は敵に知れてしまう。マルスは、急ぎ進軍再開を命じた。
意外であったのは、レナが同行を申し出たことであった。戦いになれば怪我人が出るでしょうからと、アリティア軍に加わったのだ。もちろん、ジュリアンはレナのそばを離れはし

なかった。

予想外の後れをとったマルスの部隊ではあったが、サムシアンの本拠地に到着したときには嬉しい誤算が待っていた。ジェイガンの部隊が敵の砦を突破して、すでに到着していたのだ。

モロドフの助言で周到に兵を配置したジェイガンは、囮となって関所となっている敵の砦の大扉に近づいていった。旅の老兵を装ったジェイガンは通行料を払って、大扉を開かせた。それを合図として、ゴードンとカシムが門を開けた盗賊を倒し、ジェイガンが扉を開いたままの状態で確保した。そこへ間髪入れず突入したカインとアベルたちによって、砦はあっけなく落ちたのだった。

「全軍、攻撃せよ」

ハイマンのたてこもる館をさして、マルスが命じた。館の攻略は、砦よりも簡単であった。内部をよく知るジュリアンとナバールによって、簡単に突入できたのだ。盗賊たちにとって、ナバールが敵に回ったという恐怖感も大きかった。彼の戦い方を知っている者たちは、逃げ惑ってまともに戦おうとはしなかった。

マルスたちはサムシアンたちを壊滅させると、いよいよオレルアンへとむかった。

8

「やはり、サムシアンはマケドニア軍とつながっていたのですね。囚われていたときにそれらしき話は聞きましたが、まさか、本当だったとは……」
行手の草原に布陣する敵の騎馬隊を見て、レナがため息をついた。同じ女性として、彼女はシーダとともに本陣に同行していた。
山地から見渡せる平原には、マケドニア軍を中心とする帝国軍がアリティア軍を待ちかまえていた。
「いかがいたしますか」
モロドフが、マルスに訊ねた。
「できれば、あんな大軍とは戦いたくはないけれど、あの敵を突破できなければオレルアン騎士団に合流することはできない。戦うしかないだろう」
早くも困難に直面して、マルスは顔をくもらせた。今度の相手は、マケドニア軍の騎士団である。海賊や山賊たちとは違って、訓練された正規軍は今までとはまったく違う強敵であった。
「マルス王子、こちらの斥候が敵の斥候を捕らえましたが、尋問なさいますか」
オグマが、マルスたちのところに現われて告げた。マルスが許可すると、ジュリアンとド

ーガが一人の男を連れてきた。その顔を見たとたん、レナの顔が驚きでいっぱいになる。
「マチス兄さん、なぜこんなところに」
「レナ、お前こそ、何でアリティア軍の中にいるんだ」
兄妹の突然の再会に驚いたのは、本人たちだけではなかった。
「レナ、あなたはいったい……」
シーダが、怪訝そうに訊ねる。
「隠していて申し訳ありません」
レナはマルスたちに非礼をわびると、自らの素性を明かした。
もともと、レナはマケドニア王国の貴族の娘であった。だが、マケドニア王子ミシェイルとの縁談が持ち上がり、彼女は国を出奔したのだ。
まだ、各国を巻き込む戦争が起きる前のこと、マケドニアでは、親アカネイア王国派のオズモンド国王と、反アカネイア王国派のミシェイル王子との確執が日ごとに深まっていた。そして、内乱が起きたのだった。父である現国王を廃したミシェイルは、マケドニアの王位について実権を握った。そして、グルニアとの密約の上でドルーア帝国と同盟を結ぶのである。
その内乱の中で、国王派であったレナとマチスの父は戦死したのであった。
ミシェイルがどこでレナを見初めたのか、彼女にはわからなかった。いや、それはどうでもよいことであったのだ。父の死の原因を作った張本人の妻になる気など、彼女にはさらさ

らなかったのである。
「お前は何もかも捨てていけるだけの強さがあったからいいが、家とともに残された俺は苦労したんだ。財産は残ったが、爵位は継げず、おまけに徴兵されてこんな遠くまで連れてこられちまった。今、下に展開している兵たちも、ほとんどは突然徴兵された奴らさ」
マチスは、妹の勝手に怒るでもなく、さりとて愚痴の一つはこぼしたいとばかりに言った。
「それは本当なのだろうな」
モロドフが聞き返した。敵が正規軍とは言え、新兵ばかりで構成されているのならば勝機はある。
「ああ。それで、俺をどうするつもりなんだ」
助けてくれるんだろうなと、マチスはレナの方を見ながら訊ねた。
「わかった、すぐに解放しよう。それで、君はどうするつもりなのだい」
マルスに言われて、マチスはしばし返答に困った。ドーガたちに捕まったとき、一緒に偵察に出た仲間の何人かは逃げおおせている。彼が捕まったことは、すでに隊長に知らされているはずだ。
「勇気を持ってください、兄さん。今のマケドニア軍は間違っています」
「そうだな。命令に違反したものは処刑される。それが、今のマケドニア軍なんだからな。今さら戻っても、疑われるのが落ちだ」
猜疑心の強い隊長のことを思って、マチスがつぶやいた。

「いいでしょう。アリティア騎士団への参加を認めます」
マルスに言われて、マチスがぎこちない仕草で騎士の礼をとり、レナが胸の前で両手を組んで深々と頭を下げた。
その後、マチスの説明でマケドニア軍の布陣を確認すると、マルスたちは翌日の作戦に備えて休息をとった。

「マルス様、まだお休みになられないのですか」
天幕に映る明かりを見咎めて、モロドフがマルスの寝所となっている場所にやってきた。
「明日のことが気になってしまって……。敵は、マチスのように無理矢理徴兵された者たちだという。マケドニアの兵だというだけで、彼らに罪があるのだろうか」
地図に目を落としながら、マルスはつぶやいた。敵と戦わないでもすむルートはないものかと、何度も何度も地図を見直していたのである。
「罪はありますまい。けれども、敵であることに変わりはありません」
事実をモロドフが告げた。
「じいはそう言うが、僕は彼らと戦うのが正しいと声に出して言えるのだろうか」
「戦いが避けられないものであるのなら、いかに最小限の戦いですむようにするかを考えるのも指揮官の務めです。敵が死ぬとき、必ず味方にも被害は出ましょう。敵に情けをかけすぎれば、その分味方が死ぬのです」

「結局、戦いとはそういうものでしかないのか……」
マルスはため息をついた。正解というものは戦争にはない。ならば、どの道が他のものよりもましであるかということだ。
「ですから、戦うと決めたからには、迷いはお捨てください」
「わかったよ、じい。戦いを引き起こす者、戦いを望む者と僕は戦う。それが、彼らの下で戦う者たちをも一日も早く解放する方法だと願うよ」
マルスはそう答えると、ランプの明かりを消した。

9

「馬鹿な、そんな命令は出しておらんぞ」
マケドニアのベンソン将軍は、部下たちの動きを見て顔をしかめた。想定される敵の渡河ルートである三カ所に兵は分散して配置してあるのだが、各部隊が東の第三部隊に合流を始めたのだ。アリティア騎士団が東から強行突破を始めたため、全軍をもって阻止するように命令が出たと斥候の騎士が伝令としてふれ回ったと言う。
「敵の陽動だと見抜けんのか、この馬鹿者どもが。本隊は逆からくるぞ」
「ですが、実際に敵は現われ、戦闘が始まっております」
報告にきた騎士は、予想外の叱責に萎縮しながら答えた。

「戦闘が始まっている以上、駆けつけた方がよいと思いますが」

黒いフードで顔を隠し、全身も黒い外套（マント）でつつんだ影のような男がベンソンに進言した。

「ふん。ガーネフからよこされた軍師だか魔道士だか知らんが、わしにはわしのやり方がある。口は出さないでもらおう」

ベンソンに言われ、魔道士はフードから微かにのぞく口許（もと）を不満そうにゆがめた。

伝令が出され、移動中の部隊を呼び戻しにいった。だが、戦場を前にして引き返せという命令に、経験の浅い兵士たちはひどく混乱した。後ろから攻撃されるのではないかという恐怖も手伝って、その場で右往左往していたずらに時間を費やしてしまったのだ。その間に、カインとアベルを中心とした精鋭の陽動部隊は、騎馬の機動力を遺憾なく発揮して敵陣をかき回していった。戦いが初めての新兵たちはそれだけで大混乱を起こし、カインたちが強行突破を始めたときも、彼らを見送ることしかできなかったのである。

ベンソンが伝令をだした直後、歩兵を中心としたマルスの本隊は敵本隊への攻撃を開始した。

「よし、他の部隊が戻ってくるまで敵部隊を足止めしろ。包囲して殲滅（せんめつ）するのだ。魔道士殿、見物していないでその魔法の力とやらを見せてもらおう」

ベンソンに言われ、魔道士は無言でうなずいた。

魔道士は、防衛線を引くベンソンの部隊から一人進み出ると、先鋒の部隊と戦闘を繰り広げているアリティア軍の方を見据えた。魔道書を取り出すと、それを開いて呪文を詠唱し始

める。
「風は光に輝かん。荒ぶる魂は敵を切り裂く刃となれり。舞い踊れ、風の白刃よ！」
詠唱とともに、魔道書に書かれた文字が光を帯び、生きた煙のように本から立ち上って空中に白銀の魔方陣を描いた。
「な、何を！」
魔道士の姿を見て、ベンソンが慌てた。まさにアリティア軍に魔法を放とうとしていた魔道士が、突然振り返ったからである。風が彼の周りに集まり、はためくフードの端からのぞく瞳から、鋭い眼光がベンソンを見据えた。次の瞬間、魔方陣から放たれた真空波が、無数の見えない刃となってベンソンに襲いかかった。無惨に身体を切り裂かれたベンソンが、周囲の兵士を巻き込む竜巻によって空中に舞い上げられる。突風が過ぎ去った一瞬の静寂の後、大地に叩きつけられる司令官たちの死体を目のあたりにして恐慌をきたしたマケドニア兵たちは、我先にと逃げ出した。
「マルス様、今です。早くこちらへ！」
魔道士は黒いマントを振り払うようにして脱ぎ捨てると、先頭に立って戦っているマルスにむかって叫んだ。
「マリク!?　みんな、一気に突破するぞ！」
水色のマントを風に靡かせ、緑色の丈の短い長衣（ローブ）からのびる両の素足でしっかりと大地に立つ魔道士の青年の姿を見て、マルスは驚きと歓喜の入り交じった声をあげた。それは、彼

にとってとても懐かしい顔であったからだ。
「どうしてここに……」
立ちはだかる敵を突破してきたマルスは、久々に会う幼なじみの横に立って訊ねた。
「それは後でお話ししましょう。今は、ここを突破するのが先です。私の修行の成果をお見せいたします」
そう言うと、マリクがエクスカリバーの魔法を駆使してアリティア軍の進路を切り開いた。司令官を失い、強力な魔法の攻撃に浮き足立ったマケドニア軍を蹴散らすと、アリティア軍はオレルアン平原へと無事に達することができたのであった。混乱した敵は部隊を立て直すのが精一杯で、アリティア軍を追撃してはこなかった。マルスはカインたちの部隊と合流すると、安全な場所まで軍を移動させてやっと一息ついた。
「君がきてくれて助かったよ。予想以上に敵の布陣が厚くて危なかったんだ。でも、君はカダインにいってたはずだろ。なぜオレルアンに……」
強行軍で疲れた兵士たちに休息を与えながら、マルスはマリクに訊ねた。
「申し訳ございません、マルス様。せっかくカダインまで魔道の修行に出むいていながら、肝心要のときにエリス様やマルス様をお守りすることができなくて……」
あらたまった態度で、開口一番マリクがマルスに頭を下げた。
アリティアの貴族の出であるマリクは、幼いころからマルスやその姉のエリスと仲良く遊ぶ間柄であった。早くから魔道に対する素質を認められたマリクは、その後魔法学院のある

カダインに留学するのだが、それが長らくマリクとマルスたちの運命を分かつ結果となった。厳しい修行でカダインの外の情勢を知る術のなかったマリクは、アリティアが滅亡したことをかなり後になるまで知らなかったのだ。そして、知ったときには手遅れであった。マリクは、国を出るときにエリスと交わした約束に何度苦しんだかしれない。

「私は、エリス様を守ると約束したのに、それを果たせませんでした。けれども、今なら、マルス様のお役に立てます。一緒にエリス様を救い出しましょう」

マリクが、マルスの手をとって言った。

「ありがとう、マリク。でも、姉上は生きているかもわからな……」

「いえ、エリス様は生きていらっしゃいます」

マリクが、マルスの手をぎゅっと強く握りしめた。

「何だって！」

「カダインで、師匠のウェンデル司祭様がお姿を見かけたそうです。話では、アリティア城陥落の際に、ガーネフによって連れ出されたようです」

「姉上が、生きておられるのか……」

感極まったように、マルスは上をむきながら言った。エリスを助けることができなかったことをマリクがずっと悔いていたように、マルスも姉を残したまま逃げることしかできなかった自分をずっと悲しく思い続けていたのだ。だが、エリスが生きているのならば、助け出せる可能性はあるはずであった。

「それで、姉上は今どこに捕らわれているのだ」
マルスの言葉に、マリクの顔がさっとくもった。
「少し前まではカダインにいたのは確かなようです。けれども、ウェンデル様に見つかったために、ガーネフはすぐにエリス様をどこかに連れ去ってしまいました。ウェンデル様が牢の人々を助け出したときには、すでにエリス様の姿はなかったそうです。身の危険を感じたウェンデル様はカダインを脱出され、エリス様を捜してくださっています。ガーネフが、なぜエリス様を必要としているのか、その謎を解くために」
マリクが悔しげに語った。エリスを見つけたのがマリクであったのならば、その場でガーネフと戦ってでも彼女を救い出そうとしたであろう。だが、今やカダインの最高司祭となっているガーネフとまともに戦っても、マリクに勝ち目はなかったはずだ。マリクが動く前にエリスが隠されてしまったのは、不幸中の幸いであるともいえた。
「そうか。では、ガーネフを見つけだして、姉上を解放させるしかないのだな」
「ええ。私もそのために、カダインを脱出してウェンデル様の後を追ったのです。すでにカダインは、ガーネフの配下の魔道士たちが牛耳る魔都となってしまいましたから。けれども、オレルアンにむかったというウェンデル様の消息は途中でわからなくなり、代わりにマルス様の消息を知って、マケドニア軍に紛れ込んで詳しい情報を集めていたのです」
マルスは、複雑な状況に戸惑いを隠せなかった。本心は、今すぐにでもエリスを助けるために動きたかった。だが、彼には祖国を再興するという使命があった。さらに、当面の目的

はオレルアン騎士団とニーナ王女を救うというものだ。すべては一つの直線上にならんでいることとはいえ、エリスを助け出すまでの道はあまりにも遠いものに思われた。
「何はともあれ、マリクがきてくれてこんなに嬉しいことはないよ。姉上のことは心配だが、でも生きていたんだ。いつか必ずお助けする機会があるはずだ」
「その通りです。そのためにも、帝国を追いつめ、ガーネフを燻り出してやりましょう。今回のドルーア帝国の復活と、マケドニア、グルニア、グラの裏切りと同盟には、陰でガーネフが働きかけた疑いがあります」
「ガーネフか……。いったい奴は何を考えているのだろう……」
マルスは、なぜ今回の戦争が起きたのかをいろいろ考えながら、アリティアの王族として、それぞれの国の思惑に思いをはせていった。

10

オレルアンは草原の国、オレルアンの民は草原の民……。
アカネイア聖王国によって統一された北の草原地帯はオレルアン王国として独立し、アカネイア王カルタスの弟マーロンが王位についた。属領とするには王都と離れすぎているためと、先の戦争でのマーロンへの褒賞とするためであった。事実、後を追うように、戦いで功績のあった者たちによって、いくつもの王国がアカネイアの認可の上で誕生している。

長くアカネイアの兄弟国として北に君臨していたオレルアンであるが、もともと部族ごとに草原を風のように移動しながら暮らしていたオレルアンの民のこと、アカネイア式に王都は定めたものの、草原すべてが彼らの住まいであった。それゆえ、帝国に大半の国土を占領されてしまったとはいえ、民の心は敵に屈したりしてはいなかった。

「アリティア軍が、きてくれたのですか」

ニーナ王女は、瞬間、驚きと喜びと不安の入り交じった複雑な表情でハーディンを見た。

「間違いはございません。帝国の騎馬隊を突破してこちらへむかっているとのことです」

頭を下げてハーディンが報告を続けた。

オレルアン王国の王弟ハーディンは、自信をもって答えた。帝国の大部隊が移動したのを知って、偵察の小隊を派遣していたのだ。そのおかげで、アリティア軍の突破と、帝国軍の瓦解は正確に彼に伝えられていた。もちろん、帝国が放った伝令は、彼の部下たちがオレルアン城にたどり着く前に倒している。このことは、帝国はまだ知らないはずであった。

「アリティアと言えば、勇者アンリの血を引く国。必ず、大きな力となってくれましょう」

そうでなくては困ると、ハーディンは密かに心の中でつぶやいた。ニーナ王女を立てて世界中に決起を促してから早数ヶ月。現実は、個人としてやってくるわずかな義勇兵をのぞき、部隊と呼べる援軍は一つもやってこないのであった。

「ええ」

ニーナが、ハーディンに顔を上げるように言う。あらためてニーナの顔を見たハーディン

は、我知らず見とれそうになってしまった。高く結い上げて後ろに垂らした金髪が頭の動きに合わせて涼やかにゆれ、青く憂いを秘めた瞳はそれでいて毅然とした王族の威厳ある光に満ちていた。
ハーディンは、慌てて崇高な騎士の顔を作った。彼としても一国の第一王位継承者であり、草原の狼という異名ほどの粗野な印象はない。口髭を蓄えた顔は端正であり、草原ふうに頭に布を巻きつけて白いマントを背に垂らした姿は、ニーナの目にも異国的な端麗さとして映っていた。
「そうですか、アリティア軍が……」
ニーナは、今は帝国に占領されてしまった母国の歴史を思い出しながら、今一度つぶやいた。
アカネイア王国の前身であるアカネイア聖王国がドルーア帝国に滅ぼされた一〇〇年前、アルテミス王女を助けてアカネイア王国を復興させたのが勇者アンリ、すなわちアリティア王国の初代国王アンリ一世であったのだ。歴史は繰り返すのだろうか。そして、避けられぬ運命というものも……。
「多少賭になりますが、これから我が騎士団は城を奪回するために討って出ようと思います。おそらく、敵はここで我らを殲滅しようとばかりに出撃してくるでしょう。うまくいけば、アリティア軍とともに敵を挟み撃ちにすることができます。さすれば、城の攻略は容易なものとなりましょう」

ハーディンはそうニーナに告げると、自らの騎士団とともに出撃する準備をしていった。
「長き戦いを、俺とともに戦い抜いてくれた勇者たちよ、いよいよ草原を我らの手に取り戻すときがきた。全員騎乗せよ」
ハーディンは、砦の中に集まったオレルアンの騎士たちにむかって力強く言った。
「全員、騎乗！」
騎士団副団長のウルフが復唱する。ザッという大きな音を立てて、騎士たちが一斉に馬にまたがった。砦の門扉が大きく開かれ、ハーディン率いる騎士団が出陣していく。
オレルアン城の見える丘に陣を張ると、ハーディンは目立つように旗や幟を立てさせた。帝国軍に対する挑発と、アリティア軍に対する目印としてだ。また、いたずらに陣を広げず、密集隊形で人数が少ないように見せかけた。もっとも、本当に人数は限られたものであったのだが。
ハーディンの誘いに乗った帝国軍は、ムラク隊長の率いる部隊が迎撃のために出陣してきた。
「よし、敵を充分に引きつけるのだ。アリティア軍が城と敵の間に入り、敵の退路を断つまでは持ちこたえろよ」
次第に近づいてくる敵軍を見下ろしながら、ハーディンは微動だにしなかった。ぎりぎりまで敵を待ちかまえる。
「全軍、攻撃開始！」

満を持して、ハーディンは命令を発した。
「ザガロ、援護は頼むぜ。いこう、ロシェ」
ビラクが仲間の射手に声をかけると、槍を構えて丘を駆け下りていった。遅れじとロシェが、剛胆な仲間の騎士の後を追って走り出す。彼らの先頭には、疾駆するハーディンの姿があった。白いマントをたなびかせながら部下の騎士たちを率いて先頭を走るその姿は、まさに白狼、草原の狼の名に恥じないものであった。
丘を駆け下りる勢いを利用して、ハーディンたちは楔(くさび)を打ち込むかのように敵軍中央になだれ込んでいった。いきなり指揮官のいる部隊の中央に突入されて帝国軍が浮き足立つ。
「ええい、慌てるな。敵を取り囲め。逃げ道をなくすのだ」
乱戦となりかける中、ムラクが兵をとりまとめようと叫ぶ。ハーディンがすかさず合図し、ビラクが角笛を吹き鳴らした。敵の包囲網が完成する前に、前進したウルフたちの弓馬隊が敵の一角を崩す。ハーディンたちは素早くそこから丘の上の陣まで後退した。
なんとか部隊をとりまとめたムラクが、丘の上にむかって攻撃を開始する。だが、守りに徹した戦い方に切り替えたオレルアン騎士団は、敵よりも高い位置にいるという地の利を生かして寡兵ながらも敵と互角に渡り合い続けた。
「ハーディン様、敵の後方に新たな部隊が。敵の援軍でしょうか」
ロシェが、ハーディンに報告した。アリティア軍にしては、くるのが早すぎる。
「確認しろ」

すかさず、ウルフが叫んだ。
「あれは、アリティア騎士団旗です。アリティア軍がやってきたんだ」
ザガロが、嬉しそうに叫んだ。
みるみる間に、アリティア軍は敵後方に追いつき戦闘を開始した。
「あれがアリティア騎士団。マルス王子の軍か……」
アリティア軍の勇猛な戦いぶりを目のあたりにしたロシェが、感心したようにつぶやいた。
オレルアン騎士団こそ最強の騎士団と信じていた彼にとって、自分たちに負けないほどの強さを誇るアリティア騎士団、そして、それを率いるマルス王子というものに強い興味を覚えたのだった。
「全軍、突撃せよ。敵将の首級をあげ、我らの城を取り戻すのだ。アリティアの勇士たちに後れをとるなよ、進めオレルアンの勇士たちよ！」
ハーディンはそう叫ぶと、敵めがけて突進していった。

11

アリティア・オレルアンの両騎士団に挟撃されたマケドニア軍は、ほどなくして全滅した。
その勢いを借りたマルスとハーディンは、一気にオレルアン城に突入した。
「どういうことだ。ベンソンも、ムラクもやられたと言うのか」

オレルアン城占領部隊の責任者であるマケドニアの将軍マリオネスは怒鳴ったが、その言葉に明確に答えられる部下はいなかった。今さらながら、部隊のほぼすべてを二つに分けて敵にさしむけたのは愚策であったと思うが、すでに後の祭りであった。
「撤退の用意をしろ。ミネルバ様の本隊に戻って兵力を立て直すのだ」
マリオネスはさっさと戦いを放棄すると、戦利品などを城から持ち出すよう部下たちに指示した。
少数の部下を連れたマリオネスは、運のないことに脱出の途中でばったりとマルスたちに出くわした。
「どこへいくつもりだ。よもや、我らの受けた屈辱をそのままにしたまま逃げようと言うのではあるまいな」
行手に立ちはだかりながら、ハーディンがマリオネスに言った。
「マルス殿、ここは我らに任せていただきたい。あなた方は、城にとらわれている国王たちを頼む」
「わかりました。御武運を」
ハーディンの気持ちをくむと、マルスは部下たちを連れて城の地下牢へとむかった。
「ええい、何をしている。奴らを倒して道を開くのだ」
マリオネスが叫び、彼につき従っていたアーマーナイトたちがハーディンにむかっていった。

「ハーディン様、ここは我らが」
　すかさず、ロシェとビラクが前に出て敵を迎え撃つ。
「覚悟！」
　ハーディンは剣を交える兵たちの間をかいくぐって進むと、マリオネスにむかって剣を突き出した。反撃する間もなく、鎧の隙間から剣を突き入れられたマリオネスが喀血（かっけつ）する。ハーディンは、剣に力を込めてひねると、そのまま横に薙ぎ払った。鎖帷子（かたびら）を引き千切りながらハーディンの剣がマリオネスの身体を切り裂く。
「敵将は、オレルアンのハーディンが討ち取ったぞ！」
　ハーディンは、敵兵に聞こえるように叫んだ。

12

「騒がしいようだけど、何かあったのかなあ」
　リカードは、同じ牢に入れられている老人にむかって訊ねた。
「お前さんにわからぬことが、同じ場所にいるわしにわかるわけがあるまい」
　困ったように、ウェンデルはリカードに答えた。まだ少年であるリカードは落ち着きがなく、始終動いていたり人に質問していないと気がすまない性格のようだ。穏やかで物静かな老人にとっては、あまりいい話し相手というわけではない。

「そりゃそうだけど、何があったか知りたいじゃないか。もしかしたら、逃げる機会が転がり込んでくるかもしれないし」
「確かに、あきらめてはいかんな。では、助けがくるのを祈るとしようか」
二人がそんな会話を交わしている間にも喧噪（けんそう）は近くなっていき、やがて大勢の人の気配が地下牢に感じられるようになった。そして、突然に分厚い木製の扉が開かれた。
「ひゃっほう、助かったあ。どこのどなたか知りませんけれど……って、ああ!!」
すぐさま外に飛び出そうとしたリカードは、居合わせた人間にぶつかりそうになって慌てて飛び退いた。その相手の顔を見て、指をさして驚く。相手も、また同様であった。
「兄貴ぃ」
「お前、リカードじゃないか。無事だったのか」
ジュリアンが、目を白黒させて言った。リカードは、オレルアンの城に忍び込んだときに彼の相棒だった少年だ。
「捕まって、そのまま牢屋に入れられちまったんですよ。ずっと兄貴が助けてくれると思って待ってたんですけど、本当に助けにきてくれたんですね。もう、これからずっと兄貴についていきますぜ」
「調子のいい奴だな。まあいいや。俺は、今じゃアリティア軍にやっかいになってるんだ。お前も手伝え」
「任せてください」

リカードが安請け合いする。あいかわらずだと、ジュリアンは苦笑いした。

「アリティア軍だと。それでは、マルス王子もおられるのかな」

牢の奥でゆっくりと立ち上がると、ウェンデルはジュリアンの方に近づいていった。そのまま二人の横を通り過ぎてアリティア軍の兵士たちがせわしなくいききする通路へと歩いていく。

「おい、じいさん、勝手に歩き回るとまだ危ないって」

ジュリアンがリカードとともにウェンデルの後を追った。

地下牢から城の一階へと上がったところで、三人はばったりとマリクに出会った。

「ウェンデル先生!?」

「おお、マリクではないか。それでは無事にマルス王子に会うことができたのだな」

驚くマリクに、ウェンデルは足早に駆けよって嬉しそうに背中を叩いた。

「はい。先生の後を追って、カダインを脱出し、無事マルス様と会うことができました。先生こそ、どうしてここに」

「恥ずかしいことだが、ガーネフを追いかけるどころか逆に追っ手を放たれてな。なんとか逃げおおせてオレルアンまできたのだが、そこで捕まってしもうた。その後は、カダインの牢から逃がした子供たちの行方を白状させるために、ずっと牢に入れられていたというわけじゃ」

「そうでしたか。よろしければ、私たちにお力を貸していただけませんか。私たちはこれか

らガーネフとも戦い、アリティアやカダインを悪の手から解放しなければなりません。私たち若輩に、お知恵を貸していただきとうございます」
オレルアンでウェンデルの足取りを見失っていたマリクは、彼の言葉で納得した。そして、ウェンデルに助力を願い出たのだった。
「うむ。カダインに残ったエルレーンたち門下生のことも心配だからな。一刻も早く魔王を自称するガーネフを倒し、神剣ファルシオンを取り返さなければならぬ。それ以外に、ドルーア帝国の皇帝メディウスを倒す方法はない。あ奴は、マムクートと呼ばれる人の姿をした地竜族の王なのだからな。ミロア司祭が生きておられればとは思うが、今さらそれを言っても詮無いことか……」
ウェンデルは、師匠であったミロアのことを思って一時目を伏せた。カダインの最高司祭であったミロアは、アカネイアの司祭長も務めていた。アカネイアの王都パレスに赴(おもむ)いていたとき、ガーネフの陰謀を察知してカダインに戻ったのだが、留守の間にガーネフが編み出した暗黒魔法マフーによって命を落としたのであった。だが、その事実が知られるのはずいぶんと後になってのことであった。ウェンデルがガーネフの野望を知ったときには、カダインの高司祭たちのほとんどはガーネフの手の者に入れ替わっていた。
「未だに、リンダ様の行方もわからないのですか」
「うむ。ミロア司祭からオーラの魔道書を託されてカダインを逃げのびたはずなのだが、その後の消息はわしもつかめなんだ。無事であればよいがの。だが、今はまずマルス王子にこ

れらのことをお教えしなくてはな」
ウェンデルはマリクに言うと、マルスの許へとむかった。

13

「マルス王子ですね、よくきてくれました。私がアカネイアのニーナです」
オレルアン城の謁見の間で、マルスはニーナ王女と対面していた。その場には、オレルアン国王と、ハーディン、ウェンデルなどが集まっていた。
「お会いできて光栄に存じます。アリティアのマルスと申します」
マルスはニーナの前で片膝をつくと、頭を垂れて挨拶を交わした。
もともと、アカネイア大陸最初の統一国家はアカネイア聖王国だけである。後にドルーア帝国が起こり、両国間の戦争で結果的に二つの国は滅んだ。代わって新しく復興したアカネイア王国から、現在の各王国が生まれている。中でも、オレルアンはアカネイアの王族が起こした国であり、アカネイア王国とは兄弟国とも言えた。対してアリティアは、先の戦争での功績で、アカネイア王国の一部を独立した国として勇者アンリがもらい受けたものである。国の規模からしても、彼らの力関係は明確であった。
「顔をお上げください。互いに今は亡国の王子と王女、ともにドルーアと戦う同志として接してください。あなたもですよ」

ニーナはマルスを立ち上がらせると、後ろに控えていたシーダに声をかけた。
「タリス王の名代として参りました、タリス国王モスティンの娘でシーダと申します」
マルスに倣って、シーダが挨拶をする。
「ありがとう。タリスの御厚意もアカネイアは忘れないでしょう。あなたたちがきてくれたおかげで、私たちはオレルアン城を取り戻すことができました。このままオレルアン全土を解放し、アカネイアに進軍するつもりです。二人とも、お力を貸してもらえますか」
「もちろんです、ニーナ様。アリティアは昔からアカネイアに忠誠を誓っておりました。父コーネリアスに代わり、アカネイアのために剣を振るうつもりです」
マルスは、力強く答えた。今回の戦争の初期に戦死したアリティア王を知るオレルアン王は、マルスの姿に若いころのアリティア王コーネリアスの面影を見て静かにうなずいた。マルスの中に流れている勇者アンリの血筋をかいま見たような気がしたからだ。
「今の私にはとても心強いお言葉です。ハーディン侯とマルス王子、そしてシーダ王女のお力添えがあればきっと王都パレスを取り戻すこともできるでしょう。ですが、この戦いは、アカネイアだけのものではありません。オレルアンも、アリティアも、タリスも、グラも、カダインも、グルニアも、マケドニアも、このアカネイア大陸すべての国々の存亡をかけた戦いなのです。ドルーア帝国はマムクートの国、そこに住まうのは人を超える力を持った竜人たちです。彼らの王メディウスは、一〇〇年前と同じように人間をマムクートの奴隷にするつもりなのです。グルニアとマケドニアは今でこそドルーアの同盟国と称していますが、

いずれ人間の王国はこの大陸から消えてしまうことでしょう」
「そのようなことは、我らが許しません。先の戦い同様、我ら人間は力を合わせて邪悪なる竜人どもを倒してご覧にいれます」
ハーディンが自信をもって言った。恐れを知らぬ彼の言葉は、それが決して不可能ではないのだという希望を人々にいだかせた。
「そのためには、ガーネフが持ち去ったアリティアの至宝である神剣ファルシオンを手に入れなければなりませぬぞ。メディウスを倒す力を秘めているのは、唯一ファルシオンだけなのですから。ガーネフとメディウスがどのような関係にあるのかはまだはっきりとはしませぬが、ともに我らの敵であることは明確です」
「だが、今はアカネイアの解放を最優先とすべきだ」
ウェンデルの言葉を、ハーディンがさえぎった。軍としての戦略では、敵勢力の脅威を残したままガーネフを探して倒すなどということをしてはいられない。
「ええ。メディウスを倒すことは、アリティアに生まれた僕の務めでもあります。ファルシオンはアリティア騎士団が必ず見つけだします。けれど、今はハーディン殿のおっしゃるように、アカネイアの解放をこそ第一と考えるべきです」
マルスもハーディンに賛同した。本心では今すぐにでもガーネフを捜し出してエリスを助け出したい思いでいっぱいであったのだが、今は私事は捨てるべきだと自分に言い聞かせたのだ。それが、王族に生まれた者の、国や民に対する務めだとマルスは理解し始めていた。

「ありがとう。お二人がいれば、必ずやアカネイアを取り戻すことも、ドルーア帝国を倒すこともできるでしょう。本当ならば私が先頭に立って戦うべきなのですが、私にはその力はありません。ですから、これを託したいと思います」
ニーナはそう言うと、侍従の者に一つの盾を持ってこさせた。ニーナがその盾を持ったとき、一同は軽く息を呑んだ。
「この盾は、アカネイア王家の至宝であり、王家そのものの印。このファイアーエムブレムの描かれた盾を持つ者は、アカネイア王家の代理として世界を救うために人々を率いる権利と義務をもつことになります」
言いながら、ニーナは一同の顔を、マルスを、ハーディンをゆっくりと見渡した。
「マルス王子」
「はい？」
ニーナに名を呼ばれて、予想していなかったマルスは一瞬きょとんとした。
「私は、あなたにこのファイアーエムブレムをお渡しします。今から解放軍の盟主を名乗り、すべての騎士団、すべての国の人々をまとめて、この世界に光を取り戻してください」
「僕がですか」
マルスは驚いて聞き返した。その顔を、ハーディンがじっと睨むように見つめていた。
過去の戦いでは、メディウスを倒したのはアンリであったが、解放軍の盟主としてファイアーエムブレムを掲げたのは後のアカネイア王カルタス伯であった。

「私のお願いはお嫌ですか。アンリの後継者よ」
ニーナの言葉に、マルスは強硬に辞退することができなくなってしまった。また、他の人々も、ニーナ王女の言葉を覆そうとはしなかった。
ニーナ王女にしても、一大決心の上でのことであった。アカネイア王家の者であれば、アルテミスの運命を知らないわけではなかったからだ。それゆえに、ニーナはマルスに炎の紋章を託したとも言える。マルスならば、悲しき運命を打ち破ってくれるかもしれないと直感したからだ。このとき、まだニーナはマルスとシーダの気持ちを知らなかった。
ニーナは、シーダとともにマルスをじっと見つめ続けて返事を待った。
「マルス王子、オレルアン騎士団は、ファイアーエムブレムを持つそなたの命令に従うことを約束しよう」
長い沈黙を破るかのように、ハーディンが一歩前に進み出ると力強く言った。
「タリスも、王子のためにこれからも戦います」
シーダがそれに続く。マルスは、二人を見回して、身体の内に力が湧いてくるのを感じずにはいられなかった。
「マルス王子」
ニーナが優しく返答を促した。決して強制しているのではないその微笑みに、マルスの心は決まった。
「謹んでお受けいたします。ファイアーエムブレムの名に恥じぬよう、この命に代えて正義

を貫くとお誓いいたします」

マルスは、うやうやしく炎の紋章の盾をニーナから受け取った。

第2章　王女の翼

1

「お帰りなさいませ、ミネルバ様。軍議の結果はどうでございましたか」

天馬騎士（ペガサスナイト）パオラが、白騎士団の野営地に戻ってきたミネルバを出迎えて言った。天馬騎士を中心として構成されたマケドニア白騎士団は、女性だけの部隊であった。美しい翼を持った天馬たちが天幕のそばで休む野営地は、殺伐とした戦場の中にあってどこか優雅な心休まる場所でもあった。

「軍議だと。あんなものが軍議と呼べるか」

ミネルバは、緋色の髪を振って荒々しく歩きながら答えた。彼女は、マケドニア第一王女であり、現在マケドニアの国政を担っているミシェイル王子の妹である。彼女が駆るものは天馬ではなく、飛竜であった。赤い髪と深紅の鎧を纏っていることから赤い竜騎士と呼ばれ、マケドニアの人々からは尊敬を、オレルアンの人々からは恐怖をもって迎えられていた。実際、名目上のオレルアン占領軍の総大将は彼女ということになっている。もっとも、彼女自身はごく最近赴任してきたばかりで、蜂起したニーナたちのゲリラ戦を鎮圧することとしかし

てはいない。

「どうかなされたのですか」

パオラの妹であるカチュアが、心配そうに訊ねた。末娘であるエストを加えた彼女たち三姉妹は、ミネルバ直属の騎士たちであり、最も信頼の厚い部下たちであると言えた。彼女たちタルサ三姉妹は、ペガサス三姉妹と渾名され、ミネルバの命令でしか動かぬ騎士として有名であった。

「どうもこうも、このような作戦は、戦いとは呼べない」

怒りをあらわにして、ミネルバが言った。

ミネルバたちの部隊は、ここレフカンディ渓谷でパレスからきたハーマイン将軍の部隊と合流して陣を張っていた。サムシアンを手先として使っていることを知ったミネルバは、騎士としてあるまじきこととして兄のミシェイルに抗議にいこうとしていたのだった。だが、オレルアン城を離れたとたん、解放軍と名乗るオレルアン・アリティア連合軍によって城を奪還されたという知らせを受けたのだった。ミシェイルの行動は素早く、パレスに駐留していたハーマインの部隊をさしむけ、ミネルバには部隊が合流するまでレフカンディにとどまるように命じたのだ。

到着したハーマインは、ミシェイルの命令で指揮官に任命されていることを笠に着て、王女であるミネルバを部下扱いしていた。もともと父王派であったミネルバを、ミシェイル派の将軍たちは快く思ってはいなかったのである。

ハーマインの作戦は、レフカンディ渓谷に解放軍を誘い込んで、伏兵をもって敵を包囲殲滅するというものであった。だが、竜騎士と天馬騎士を中心に構成されている彼らの部隊では、狭い渓谷ではなく広い草原の方が戦いやすいはずであった。それに、オレルアン平原の戦いで騎馬隊を失っているマケドニア軍としては、竜騎士では敵を足止めして渓谷に閉じこめるということは無理であった。空を飛ぶ騎士たちでは、一撃離脱の強襲はできても、防衛線を張って敵を足止めするというのは難しかったのだ。

だが、ハーマインは実に騎士らしくない策略で兵力不足を補ったのだった。レフカンディ付近の村々から、男たちを兵士として強制的に徴兵したのだ。もちろん、帝国を快く思わない村人たちが、黙ってハーマインの命令を聞くはずもない。彼は、村人たちを従わせるために、老人や女子供を人質としてさらったのである。

ミネルバにとって、これは許し難い作戦であった。だが、彼女たちはハーマインに、いや、ミシェイルに逆らえないわけがあった。彼女の末の妹であるマリアが人質として囚われていたのである。兄が末の妹を人質にとってもう一人の妹にいうことを聞かせるとは、何とも非道な話であった。だが、ミシェイルは自らの野望のために父親を暗殺した男だ。それを考えれば、兄弟の情など薄いものであって当然なのであろう。彼がミネルバを必要とするのは、彼女に従う白騎士団の戦力を有効に使いたいためだけであった。そうでなければ、反逆者としてさっさと投獄していたことだろう。

ミネルバにとって、現在の状況は騎士として耐えられない苦痛ではあった。だが、それで

も生きて牢につながれずにいられるのならば、いつか兄を倒す機会も巡りくるだろうと考えて耐えていたのだった。今や、ミシェイルは彼女の兄などではなく、父の仇でしかなかったのだ。

「今は耐えるしかありません。マリア様のためにも、くれぐれも短慮はなさらずに御自制してくださいませ」

老婆心から、パオラがミネルバに言った。ミネルバの補佐役として、彼女は参謀的な立場にある。

「わかっている。わかってはいるさ……」

ミネルバは、自分に言い聞かせるかのようにつぶやいた。

翌日、いよいよ解放軍がレフカンディに現われた。

「我が騎士団は、砦上空で待機。敵が渓谷を抜けてから、退路を断てとのことです」

伝令として砦に呼ばれていたエストが、ミネルバに告げた。

「よし、出撃する」

ミネルバは、麾下(きか)の騎士団に命じた。

上空から見ると戦場の様子がよくわかる。すでに渓谷に突入した解放軍は砦へと迫っていた。オレルアンの各部隊が合流したらしく、一軍の規模となっている。やがて、敵軍が渓谷を抜けると、マケドニア軍の総攻撃が始まった。レフカンディ砦以外からも、街道近くの民家から歩兵たちがわらわらと湧き出して解放軍を包囲する。

「よし、敵の後方に回るぞ」
ミネルバは戦況の推移に注意しながら、騎士団の移動を開始した。だが、敵部隊を迂回してその後方にむかいながら、彼女は密かに眉を顰めた。
「おかしい。砦の本隊が動いていないではないか。ハーマインめ、卑劣なことを。そのようなことでは勝てる戦も勝てなくなってしまうではないか」
ミネルバは、ついに怒りが抑えられなくなった。ハーマインは、正規軍ではない動員兵たちを、敵を消耗させるための捨て駒として使ったのだ。そのうえで、疲労した敵軍を本隊で叩くつもりなのであろう。騎士としては、あるまじき戦法だ。本来ならば、騎士団の強襲によって分断した敵軍を、包囲した部隊で各個撃破するべきなのだ。それでこそ騎士としての勲もたてられようし、確実に敵を倒すことができる。だが、このような戦い方は兵法に照し合わせても愚かなものであった。戦力の逐次投入など、各個撃破してくれと言っているようなものだ。おそらくは、麾下の部隊の消耗を防いで戦果だけを独占しようという腹なのであろうが、その心根こそが恥ずべきものであった。
「きゃつは、我々をも捨て駒にするつもりか」
白騎士団を初期から戦闘に投入したということは、そういうことなのであろう。
「もう我慢ならん。パオラ、全軍に撤退命令を出せ。人質のいる村を経由して、パレスまで帰還する」
ミネルバは、決断を下した。

「人々よ、無駄な戦いで命を落とすな。このような戦いは、白騎士団の本意にあらず。民草は、自らの命をこそ尊ぶものなれば、自らの意志に従え。人質の安全は、ミネルバの名をもって保証しよう」
ミネルバは、動員された兵士たちの上空を果敢に飛び回りながら大声で言って回った。
「あれは、いったい誰だ？」
飛び交う矢を恐れもせずに、さりとて戦うわけではなく人々に呼びかける竜騎士を、マルスは不思議な思いで見つめた。
「あれは、ミネルバ将軍です。そして、マケドニアの誇る白騎士団です」
マチスが、かつて名目上は上司であったミネルバをさして言った。
「マケドニアのミネルバ王女か……。敵にも、無益な戦いを望まぬ者もいるということなのだろうか」
「殿下、敵兵の一部が逃げていきますぞ。どうやら、先ほどの呼びかけに応じたようです」
モロドフが、戦況を報告した。
「白騎士団が、東方にある集落に降りたもようです」
「敵竜騎士団が砦から出撃しました」
次々と戦況がマルスの下に報告されてくる。
「ハーディン殿、敵本隊をお願いいたします。逃げる兵は、そのまま逃げるに任せてください」

「心得た。ウルフ、弓馬隊を連れてついてこい」
草原の風のごとく、素早くオレルアン騎士団がアリティア騎士団と前衛を入れ替わった。
一時的に、カインたちがマルスの許に戻ってくる。
「カインとアベルは、ゴードンたちを連れてあの村までいってくれ。あそこには何かありそうだ。ただし、必要以上の戦いは避けるんだ」
「わかりました。いくぞ」
マルスに言われて、カインは戦場近くの村へとむかった。
「僕たちも出撃だ。カシム、遅れるなよ」
「はい、頑張ります」
弓兵としてゴードンの下についたカシムが答えた。故郷に残した弟のことを思ってか、ゴードンはよくカシムの面倒を見ていたのである。
白騎士団と戦闘になった場合を想定して、ゴードンたち弓兵もカインたちの後を追って出発していった。

2

「ミネルバ将軍の命令である。傭兵部隊は、現地点を撤収し、本隊に合流せよ」
パオラが、村を制圧している兵士たちに言い放った。だが、傭兵たちは、その言葉には従

う素振りを見せなかった。
「俺たちは、ハーマイン将軍に雇われたんだ。雇い主以外の者の命令には、たとえ王女であっても従わないという契約を結んでいる」
傭兵の一人が、臆面もなく答えた。明らかに、女性ばかりの白騎士団を見下している。
「部下に、そこまで言わせるのか」
ミネルバは、歯がみした。その手が、腰の剣にのびていく。
「いけません、ミネルバ様」
慌ててパオラが、ミネルバの身体をだきすくめるようにして止めに入った。それを見て、傭兵たちがにたにたと笑いを浮かべた。だが、すぐに彼らは笑っていられなくなる。解放軍がやってきたのだ。
傭兵たちは、先手必勝とばかりにやってきたカインたちに仕掛けていった。即座に、カインたちも応戦する。
「ミネルバ様」
カチュアが、指示を仰いだ。
「撤退しなさい。村人たちは、彼らが救ってくれるわ」
ミネルバは、そう部下の騎士たちに命令した。命令に従った騎士たちが、次々に空に舞い上がっていく。そこへ、アベルがやってきた。パオラとカチュアが、ミネルバを守ろうと剣を構える。

「馬上から失礼します。そこにおられるのは、先ほどの竜騎士殿とお見受けしますが」
アベルが、ミネルバたちに訊ねた。背後で戦いが繰り広げられているというのに、まるで何事も起きていないかのような穏やかな口調であった。カインに背中を預けて安心しているからこその態度であったのだが、それはパオラやエストたちには無謀と紙一重の剛胆さとして瞳に映ったであろう。それでいて、アベルには粗野なところは微塵もなかった。
「マケドニア第一王女、ミネルバ様です」
「あたしは、天馬騎士のエストよ」
パオラがアベルの問いに答えた後に続けて、エストが聞かれもしないことを答える。
「このような戦いは、マケドニアの騎士たちの本意ではない。いずれまた会うこともあるだろう。そのときも、剣を交えずにすむことを願っていると貴公の主君にお伝え願いたい。パオラ、退(ひ)くぞ」
ミネルバは自らの飛竜を呼ぶと、天馬騎士たちを従えて去っていった。
やや遅れて、ゴードンたちが現われる。
「待て、彼女たちにむかって射てはいけない。それは騎士としての礼を失する」
アベルは、慌ててゴードンたち弓兵を制した。
「どうした。何かわかったのか。それとも、面白いものでも見つけたか」
傭兵たちを倒したカインが、アベルの許にやってきて無邪気に聞いた。
「ああ、そうかもしれない。とにかく、マルス様のところへ報告に戻ろう」

「そうだな。こちらもカシムが面白いものを見つけたからな」
カインはそう言うと、少し困ったような顔になった。

3

「マムクートの老人だと。ドルーア帝国の手の者か」
カインからの報告を受けて、モロドフが声を荒げた。あまりにも予想外の報告であったからだ。
「いえ、本人はドルーア帝国とは敵対関係にある者だと申しております。事実、他の村人たちとともにマケドニア軍に囚われておりました」
カインが、モロドフに答えた。彼を見つけたのがカシムであったのは、幸いであっただろう。カインであったら、勢いで敵と思って殺してしまっていたかもしれない。
「そのマムクートの老人が僕に会いたいと言うのだな。よし、ここに連れてきてくれ」
マルスは、少し考えた後に決断した。
「しかし、危険ではございませぬか。マムクートは、不思議な竜石を用いて元の邪悪な竜の姿になると言われております」
さすがに、モロドフが待ったをかけた。
「刺客だとしても、敵の情報がわかるかもしれない。それに、罠だとしても、マケドニア軍

の部隊すべてを犠牲にしてまで仕掛けるほど手の込んだ罠だとは思えない。けれども、一応はニーナ様とオレルアン騎士団は安全な場所に離れていてもらおう。会見は、アリティア騎士団だけで行なう。ジェイガン、念のために兵たちを配置してくれ」

マルスは、的確に指示を出していった。いくつもの戦いを通して、指揮官としての経験を確実に積んできた証だ。

人質の解放とともにマケドニア軍の大半は離反し、残るハーマインの騎士団は解放軍全軍の総攻撃を受けてあっけなく全滅した。これが罠だとしたら、恐ろしく手の込んだ罠だ。だが、そこまで用意周到な敵であるのならば、もっと別な方法で解放軍全体を危機に陥れていたであろう。すくなくとも、竜になれるマムクートがいるのであれば、地形を考えれば、それを戦場に投入するだけでもこの戦いは勝利できていたはずであった。

やがて、カインが件の老人をつれて戻ってきた。

「わしは、火竜族のバヌトゥと申す者。そなたがアンリの血を引くマルスかの」

老人は、しわがれた声でそう訊ねた。見た目は人間と変わりがないが、唯一背中に退化した小さな翼が残っていた。

「いかにも、僕がマルスだ」

人間としての威厳をもって、マルスは答えた。

「チキという名の、幼い女の子を見かけなかったかね」

唐突にバヌトゥが訊ねた。どうにも調子が外れて、マルスたちが困惑する。

「ずっと一緒に旅をしてきていたのだが、ペラティに寄ったときに、ガーネフという人間に連れ去られてしまったのじゃ。口惜しいことにそのとき火竜石をなくしてしまったため、戦って奪い返すこともできなんだ。挙げ句の果ては、チキを捜すうちにここの軍隊に捕まってしまう始末。聞けば、そなたたちはメディウスの帝国と戦っているという。ガーネフは今やメディウスの盟友となっておる。そなたたちとともにいればガーネフと出会うこともあるだろうと思い、同行を許してもらいたく申し出た次第なのじゃ」

マルスたちが言葉に窮しているのをいいことに、バヌトゥは一気に自分の言いたいことを述べた。

「またガーネフか。姉上にファルシオン、そしてまたチキという少女……。奴は何を考えて暗躍しているのだろう。それもまた、ドルーア皇帝メディウスの差し金なのだろうか」

「いや、メディウスが人間であるガーネフを本気で信用しているはずがない。あの男は、それを知って何かをしようとしているのじゃろう」

マルスの疑問に、バヌトゥが答えた。皇帝という表の地位にいながらもその実体の見えないメディウスも不気味ではあるが、数々の場面の裏で暗躍するガーネフも負けず劣らず人々の不安をかき立てる存在であった。

「それで、わしを連れていってくれるのかの」

バヌトゥが、再度訊ねた。

「マムクートであるあなたがメディウスの仲間ではないと証明できなければ、むやみにあな

たの言葉を信じるわけにはいかないですな」
　モロドフが、不信感をあらわにしてバヌトゥを見た。
「では、人間であるあなた方がガーネフの仲間ではないと証明できるのですかな。人にも光に属する者と闇に属する者がおるように、我ら竜人族にもメディウスに味方する者もおればその野望を防がんと人間に味方する者もおりますのじゃ」
「それを信じろと申されるのか」
「人間を信じられなかった竜人たちは、ドルーア帝国を作って再び世界の覇者にならんとした。人間を信じた竜人たちは、それを阻止したのですじゃ」
「わかりました。あなたを信じましょう」
　バヌトゥの言葉に、マルスはその手をさしのべた。
「マルス様!?」
　それでよろしいのかと、モロドフが目で確認する。
「僕があなたを信じないと言うのならば、僕もメディウスと一緒だと言いたいのでしょう。あなたが僕に力を貸してくれると言うのであれば、僕もそれに応えなければなりません」
「ありがとうございます、マルス王子。わしも、できる限り王子のお力になると約束いたしましょう」
　バヌトゥが、マルスの手をとって言った。

レフカンディのマケドニア軍を破った解放軍ではあったが、無傷の勝利とまではいかなかった。対する帝国軍も、グルニア軍とマケドニア軍を中央公路へと再度さしむけて防衛線を敷いた。

4

連戦による兵の消耗を避けるため、マルスは軍をワーレンへとむけた。東の海へとのびる半島部をはさむようにして、南のワーレンは北のガルダの反対側に位置する。ガルダと同じく貿易の中継地として栄えている港町であった。

独立都市でもあるワーレンは、その商業的基盤を利用して多くの傭兵たちを雇い、今のところかろうじて中立を維持していた。帝国としても、多くの上納金を献上するワーレンを、すぐに占領してその経済的基盤を破壊するというような愚は犯してはいない。

だが、カナリス隊長の率いるグルニアの部隊が近隣の砦に駐留して睨みを利かすという事態に、ワーレンはついに動き、解放軍への補給を承諾したのであった。これは、オレルアンが解放され、戦争によって滞っていた北方貿易が再開される可能性がでてきたことが大きかった。ワーレンが仕掛けなくても、解放軍がグルニア軍と戦闘になったのであれば、金の力でいくらでも帝国に言い訳が立つとワーレンの指導者たちは考えたのであった。首尾よく解放軍がグルニア軍を打ち破れば、監視を解かれたワーレンはもっと自由に貿易を行なえるわ

けである。
「ありがとう。あなたたちのおかげで、充分に兵たちを休ませることができました」
マルスは、ワーレンの傭兵部隊の隊長の一人であるシーザに礼を述べた。
「いや。マルス王子じきじきに礼を述べられるなど恐縮です。実際には、ワーレンに解放軍が入ることによって、グルニア軍に完全に包囲されるかたちになってしまったのですから。あまりワーレンの評議会の言葉を鵜呑みにするのは感心できません。利用されるだけではつまらないですから」
まだ若いシーザは、小声でマルスに伝えた。実際には、彼以外は解放軍の人間しかいないのだが、どこで聞き耳を立てられているかもしれないという用心深さである。
「それは、ある程度予測のうちでした。どのみち戦闘になるのなら、山道のような戦いにくい場所ではなく、こちらも地の利をいかせるような場所をと思っていたのですから。それに、パレスで全軍の総力戦を行なえば、街にも大きな被害が出るでしょう。それだけはなんとしても避けたい。廃墟を取り戻したとしても、泣くのは民たちなのですから。それゆえ、野戦で敵の勢力を少しずつ撃破していくのが最適だと考えたのです。それに、ワーレンなら船を使って敵の背後に部隊を送り込むことも可能ですから」
「そうでしたか。マルス王子のお考えの深さに安心いたしました。自らの保身に躍起になっている誰かたちとは大違いです。お願いがあります。私の部隊をマルス王子の解放軍に加えてはいただけないでしょうか」

マルスの言葉を聞いたシーザが、決心を固めて切り出した。
「それは嬉しい申し出ですが、構わないのですか？」
マルスは聞き返した。あくまでも、シーザたちはワーレンに雇われた傭兵たちなのである。
「ええ。私も私の部下たちも、自らが望むお方に仕えたいと思っていたところなのです。それに、ここの商人たちは私たちの部隊がいなくても、他の部隊や賄賂を使ってうまく立ち回れるでしょう」
マルスはシーザたちを快く迎え入れると、早速これからの作戦について話し合った。
いくつかの作戦が立案されていく中、シーザの副官であるラディが軍議の席に現われた。
「どうした。何か帝国軍に動きがあったのか」
シーザが、ラディにむかって訊ねた。
「いや、グルニア軍に動きはないが、マケドニア軍から使者がやってきた」
「マケドニア軍の使者？」
ラディの言葉を聞いて、マルスは怪訝そうにつぶやいた。脳裏に、戦場で見た白騎士団の姿と、アベルたちから聞いたミネルバという敵将のことが浮かんでくる。
「海岸で、ロジャーが見つけたそうだ。今、そこに待たせてある」
ラディが説明する。最近町にきた旅芸人一座のフィーナという踊り子にいれあげたロジャーが、そこへいく途中で不審な少女を見つけて話しかけたのだと言う。
「いいだろう。使者に会いたい。ここに通してくれ」

シーザがラディに答えるよりも早く、マルスはそう命じていた。
ややあって、一人のアーマーナイトにつきそわれた少女が部屋に入ってきた。
「お許しをいただき、ありがとうございます」
部屋に一歩入るなり、少女は深々と一同にむかってお辞儀をした。天馬騎士特有のほっそりとした身体が優雅に折り曲げられ、肩口で綺麗に切りそろえられた髪が下がって頰を隠した。一応の礼が終わると、少女は部屋の中央へと進み出た。
「私は、マケドニア白騎士団のカチュアと申します。我が主、ミネルバ王女殿下の伝言を預かり、密使としてマルス王子様に会いに参りました」
カチュアは、居並ぶ解放軍の指揮官たちに少しも臆することなく名乗った。
「僕がマルスだ」
じっと彼女を見据えながら、マルスは言った。カチュアの視線が彼の顔で止まる。
「あなたがマルス様なのですね……。以前からお会いしたいと思っておりました」
マルスの瞳を見つめたまま、カチュアが嬉しそうに言った。
「ミネルバ様の御伝言をお伝えいたします。ミネルバ王女麾下(きか)の我らマケドニア白騎士団は、ドルーア帝国に対しての反乱を計画しております。つきましては、ぜひマルス王子の解放軍のお力をお借りしたいのです」
「これは異なことを。ミネルバ王女といえば、赤い竜騎士の名を持つ猛将。オレルアンにおいても、さんざん我が騎士団を苦しめてくれたほどの女丈夫だ。帝国に反旗を翻すと言うの

ならば、さっさと王女自らが我らの軍に投降すればいいだけの話ではないのか。それができないと言うのは、何か企んでいるからではないのか」

カチュアの言葉に、ハーディンが疑いの眼差しをむけた。オレルアンにいたころのミネルバは、ハーディンとニーナが集めた兵たちを幾度となく攻撃したのであった。そのたびに部隊は瓦解(がかい)し、義勇兵たちは草原に散り散りになってしまったのだった。ミネルバさえいなければ、オレルアン騎士団はもっと多くの兵を初期の段階でそろえることができたであろう。

「それは、無用の戦いを避けるためだったのです。中途半端に大きくなった軍は、マケドニア軍の目を引きすぎたのです。あのままでは、ミシェイル王子によって、総攻撃による殲滅の命令が下されていたことでしょう。それを憂いたミネルバ様は、小規模な部隊による攻撃であなたたちを全滅させることなく撃退するということを繰り返したのです。その結果、オレルアン騎士団の脅威を過小評価した本国は、大規模な騎士団を送り込むことはしませんでした」

「お目こぼししてくれたとでも言いたいようだな」

直接の敵として長くミネルバたちと戦ってきたハーディンは、カチュアの言葉を聞いてもまだ納得することはできずに疑っているようであった。

「確かに、ミネルバ王女は、敵ながら騎士として立派な人物だとはお見受けしている。だが、それゆえ今まで故国のために戦ってきた御仁が反乱を企てているなどという突然の言葉を、いかにして信じろと言うのだ」

ハーディンの言葉も、ある意味もっともであった。マケドニアの指導者であるミシェイル王子麾下の竜騎士団に次ぐ力を持つミネルバ王女の白騎士団が味方になってくれるのならば、解放軍にとってこれほど有利なことはない。それゆえ、間違っても罠などにかからぬよう、慎重を期する必要があると多くの者が感じていた。

「今までのミネルバ様の戦いは、あのお方の本意ではありません。そもそも、ミシェイル王子が父王を暗殺してマケドニアの全権を簒奪したときに、ミネルバ様はマケドニア軍を離れるおつもりでした。ですが、妹のマリア様を人質に取られ、しかたなくミシェイル王子の命令に従ってきただけなのです。ディール要塞に囚われているマリア姫さえ助け出せれば、ミネルバ様と我ら白騎士団は、迷うことなく解放軍と行動をともにできるのです。そのために、どうか解放軍のお力をお貸しください」

「親子で殺し合い、兄妹で憎みあう。マケドニアでは、そんなことが起こっているのか。そのような国の言葉、ますます信じられぬわ」

ハーディンの言葉に、カチュアが顔をくもらせた。簡単に味方になってはもらえないだろうというミネルバの言葉が苦く思い出される。せめて自分ではなく長姉のパオラであればうまく立ちまわれるだろうと思うものの、彼女はミネルバのそばを離れるわけにはいかなかった。末の妹のエストも別命でグルニアにいっている以上、この任務はカチュアにしかできない。

「信じていただくしかありません。そのために、私はここにきたのですから」

カチュアが、ハーディンの方を見て訴えた。その肩に、そっと触れる手があった。
「信じてあげようじゃないか、ハーディン侯」
カチュアは首を巡らせると、そっと肩先にいる人を見上げた。マルスは瞬間カチュアに微笑みかけると、その場にいる人々を見回した。
「マルス殿は、人を信じすぎるのではないか。バヌトゥという老人もしかり、彼らは敵であった者たちではないのか」
ハーディンが、遠慮なくものを言う。
「そうかもしれない。けれども、僕たちが人を信じられなくなったらどうなってしまうのだろう。それで、メディウスに勝てると言えるのだろうか。力によってマムクートや人々を支配しようとするメディウスに、力だけで立ちむかおうとしてよいものだろうか。あいかわらず、僕は甘いのかな……」
「そのようですな。いかにもマルス王子らしい。だが、だからこそニーナ様は、マルス王子にファイアーエムブレムを託されたのでしょう。我らの盟主として決断なされよ。一度決断がなされれば、我らとしても以後は異は唱えない所存」
少し自信なく訊ねるマルスに、ハーディンがきっぱりと言った。
「では、ファイアーエムブレムを持ち、アカネイア王国の意志を代弁するものとして決定する。解放軍は、マケドニア白騎士団と同盟を結び、その証としてマケドニア第二王女マリア姫を救い出す」

迷いのない力強い声でマルスは言った。
「了解いたしました」
ハーディンがマルスに礼を返す。先の言葉通り、ニーナの選んだマルスが決めたのならば、ハーディンも騎士として解放軍の和を乱す気はなかった。必要以上にマルスに反対するということは、すなわちアカネイア王国に賛同しないということであり、それはニーナに対する反抗でもあったからだ。
「では、早速出陣の用意を。グルニア軍を蹴散らして、ディール要塞へむかいましょう」
決まってしまえばハーディンの行動は早い。すぐにでも行軍を再開しようと提案した。
「いや、それでは先にパレスへ攻め込むことになってしまう。先に白騎士団を味方につけた方が賢明だ」
「では、もう一つのルートに決定ということですな」
ハーディンの問いかけに、マルスは無言でうなずいた。了解したとばかりに、ハーディンがシーザたちを連れて出ていく。
グルニア軍を突破して山を越えていったのでは、直接パレスに到達してしまうのであった。そうすれば、マケドニア軍と正面から戦うことになり、ミネルバもマケドニアの将軍として解放軍と戦うか、妹を見捨てて解放軍につくかの選択を強制されることとなる。それを避けるためには、海路で南に下り、パレスの南に位置するディール要塞を落とすのが賢い策であった。素早く隠密裏に行軍できれば、解放軍がディールから北上してパレスに到着するまで

に、ワーレン周辺のグルニア軍は険しい山道を突破してパレスに戻ってはこられないであろう。パレスを解放すれば、市民からの義勇兵とミネルバの白騎士団を補充戦力とした解放軍は、グルニア軍を楽に迎撃できるはずであった。

「本当にありがとうございます、マルス王子。この御恩は忘れません」

皆があわただしく出陣の準備を始める中、カチュアがマルスに深々と頭を下げて礼を言った。

「いいえ。お礼ならマリア姫を救い出してからにしてください。僕たちとしても、あなたたちのような騎士と戦わないですむのなら、その方がよいのですから。それに、レフカンディでちらりと見たミネルバ殿は、悪い方には見えなかった」

マルスは、自分の危険を顧みずに兵士たちに呼びかけるミネルバの姿を思い出して言った。あのときのミネルバの姿は、マルスにとって姉であるエリスの姿と妙にだぶって見えたのだった。母とともにアリティア城の兵士たちを励まし続けていたエリス。死んだと思っていた彼女が生きているとマリクの口から聞いたとき、マルスは心底喜んだ。同時に、肉親を失うことの痛みを再認識する結果ともなった。それゆえ、ミネルバに、マルスは自分がいだいたことのある悲しみを感じさせたくはなかったのだ。

「お礼らしいこともできませんが。よろしければ、これをお受け取りください」

そう言って、カチュアが拳大の赤い石をマルスに手渡した。

「港で、ペラティからきた商人から買ったものです。綺麗だという以外、何の石かはわから

ないのですが、今の私はこのようなものしか持ち合わせがなくて……」
「ありがとう。約束の印として、受け取っておきます」
「お名残は惜しゅうございますが、私は報告のためにミネルバ様の許へ戻らなければなりません。また、ゆっくりとお会いできることを願っております」
カチュアが、女性らしい仕草でマルスに別れの挨拶をした。
「ええ。またお会いしましょう」
「はい！」
マルスの言葉に嬉しそうに応えると、カチュアはマルスにつきそわれて外へ出た。愛馬と再会すると、彼女は夜空の彼方へ舞い上がっていった。
それからほどなくして、マルスたち解放軍は船でワーレンを出港した。夜陰に紛れたその移動はグルニア軍に察知されることはなく、作戦はマルスたちの思った通りに運んでいった。

5

「ミネルバ殿。いったい何をしにこられたのだ。貴公は、レフカンディでの責任を問われて白騎士団とともにパレスで謹慎中ではなかったのか」
ディール要塞の責任者であるマケドニア軍ジェーコフ将軍は、突然要塞にやってきたミネルバにむかって強い調子で訊ねた。

「現在の私は白騎士団長の任を一時的に解かれている。部下たちは、別の任務でグラへ赴いたところだ。今日は、私人として参っている」
ミネルバは、できるだけ下手に出て言った。
「私人としても、勝手な行動はミシェイル陛下がお許しにならぬはず。そうそうにパレスに戻られよ。監禁されぬことを、特権とは思われぬことだ」
まだ即位を果たしてもいないミシェイル王子を陛下と呼びながら、一臣下であるジェーコフが王女であるミネルバを見下しながら言った。
「承知した。ただ、マリアに一目会わせてはもらえないだろうか。まだ幼いあの子のこと、一人で淋しがっているかもしれぬ。あの子の無事な姿を確認したいのだ」
「それはできん。人質の命が惜しければ、会おうなどということは考えずに、早くパレスに戻っ……」
ジェーコフが強硬にミネルバの願いを突っぱねようとしたとき、部下の一人が血相を変えて部屋に飛び込んできた。
「何ごとだ、騒がしい！」
「将軍、大変です。反乱軍の奇襲です」
叱責するジェーコフに、兵士が早口で告げた。
「馬鹿な。奴らはワーレンにいるはず。やってくる方向が逆ではないか……。そうか、船か。だが、なぜこんな場所から上陸したのだ。ええい、すぐに兵たちを出撃させろ」

「すでに、敵は砦の一部に侵入しております」
「では、本丸の守りを固めさせるのだ。それと、パレスに援軍の使者を立てろ」
あわただしく命令を下すジェーコフの陰で、ミネルバは微かにほくそ笑んだ。マルス王子は、カチュアとの約束をちゃんと守ってくれたらしい。後は、無事マリアを助け出せるかどうかということだ。そのとき、ミネルバの心も決まる。
「ミネルバ将軍、聞いての通りだ。貴公にも戦ってもらおう」
「承知した。見事反乱軍を撃退した暁(あかつき)には、妹との面会を許可してもらおうか」
「それは考えておこう」
ジェーコフはそう言葉だけで答えると、砦の守りについた。
帝国軍が反乱軍と呼ぶマルスたち解放軍は、すでに丘の上に建つ要塞の二段構えになっている下部を制圧して、本丸となっている上部を包囲していた。
「おのれ。だが、この丘を登ってくることはできん。我らの竜騎士にとって格好の的だからな。なんとしても死守して、援軍を待つのだ」
「将軍、牢が敵の攻撃を受けております。このままでは、人質が……」
「すぐに別の場所に移せ。くれぐれもミネルバに気づかれぬようにな。どうしても無理な場合は、殺して死体を始末しろ。焼くなりしてしまえば、いつまでも我らの手の内にあると思わせ続けられる」
上空にいるミネルバに聞かれまいと声を潜めながら、ジェーコフは部下に命じた。

「それもかなわぬ場合は、ミネルバには行方不明となってもらうまでだ。白騎士団がミシェイル陛下の指揮下に入った以上、あの女には利用価値はない」
そのつぶやきを知るか知らずか、ミネルバは本丸の真上を飛竜に乗って舞いながら、じっと解放軍を見つめていた。
そのころ、牢に囚われていたマリアはマケドニアの兵士の手で移動させられようとしていた。
「出ろ。反乱軍がくるまでにここから他の場所にいくのだ」
「嫌です。姉上がくるまで、私はどこへもいきません」
乱暴に腕を引く兵士に、マリアはその場に残ると抵抗した。敵か味方かわからない反乱軍は恐ろしくもあったが、それ以上にこの要塞の兵士たちの言うことを聞くのはもう嫌であった。
「急げ。敵はじきにここにくるぞ」
他の兵士が、マリアを連れた兵士を急かした。
「くそ。これ以上手こずらせるようであれば、この場で抵抗できないようにしてくれる」
焦った兵士は、マリアにむけて斬りつけようと剣を振りかぶった。だが、突然の悲鳴を聞いて慌てて振り返る。その目の前で二本の剣が閃き、彼は斬り倒された。予期せぬ出来事に、マリアは震えながらその場にしゃがみ込んだ。堅く目をつぶったそばでは、剣が風切る音が間断なく聞こえる。やがて、それがやんだ。

「終わったぞ。ついてこい」
物静かな声に、マリアは目を開いた。そこには、長い黒髪の剣士が両手に血刀を下げて立っていた。
「ナバール、姫君とやらは見つけたか」
他の通路を調べにいっていたオグマが現われて、ナバールに訊ねた。無言で、ナバールがマリアを指し示す。
「少しぐらいは愛想良くしろよ。見ろ、怯えてるじゃないか」
オグマが、無理な笑顔を作りながらマリアに近づいていった。だが、大きな傷跡のあるオグマの顔に、思わずマリアが尻餅をついたまま後退った。
「お前の顔の方が怖いと見える」
ナバールはそうつぶやくと、その場から歩き出した。
「あ、待って」
慌ててマリアがその後を追う。
「これでも、俺は子供受けはいいはずなんだが……」
不服そうに髪をかき上げると、オグマは二人の後を追っていった。些細なことでも、ナバールに負けるのは嫌らしい。
要塞の大半の場所を制圧した解放軍は、本丸の前に整然とした陣を展開させていた。その陣容を見れば、戦の勝敗は明らかだ。だが、マケドニア軍は降伏しようとはしなかった。双

方は、ともに待っていたのだ。だが、帝国軍の援軍よりも、マルスの望んでいた者の方が先にやってきた。

「マルス王子様ですね。マリアと申します」

くる途中でオグマから説明を受けていたマリアが、可愛らしく腰をかがめてマルスに挨拶をした。

「無事で何よりでした、マリア姫。早速ミネルバ殿にお知らせしましょう」

「ありがとうございます。私も、王子様のおそばでお力になりたいと思います」

無邪気に言うマリアにマルスは思わず苦笑すると、あの日カチュアにもらった赤い石を取り出し、それを持った手を大きく振り上げた。

「その石は、火竜石では……」

マルスの持つ石を見て、本陣にいたバヌトゥが叫んだ。

「えっ？　これがバヌトゥが探していた石だったのかい。だったら、後でこれはあなたに返しましょう」

「ありがたい。これでわしも皆の役に立てるというものじゃ」

マルスの言葉に、バヌトゥは嬉しそうに言った。

上空から解放軍を見ていたミネルバは、その中央で赤い光が輝くのを認めた。一人の少年が、手に赤く輝く物を持って振り回している。そのそばには忘れもしない少女の姿があった。

「あれは、カチュアが渡したと言っていた石の輝きか。すると、マリアのそばにいるあの少

年こそがマルス王子なのだな」
約束を守ってくれたことに、ミネルバは感謝した。同時に、もう本心を隠す必要がなくなった。
「ジェーコフ、すぐに投降しろ。ドルーア帝国に与(くみ)するなどという、間違った行ないに染まった今のマケドニア軍に正義はない。今からでも遅くはない。マケドニアの汚名を雪(そそ)ぎ、解放軍に味方するのだ」
「血迷ったか、この裏切り者めが。構わぬ、反逆者を殺せ！」
ミネルバの言葉に、ジェーコフが怒鳴り返した。
「愚か者が！」
ミネルバは、上空から手槍をジェーコフに投げつけた。肩口に直撃を受けて、ジェーコフがよろめく。それが合図であったかのように、解放軍は攻撃を開始した。
解放軍の猛攻の前にディール要塞は陥落し、ミネルバはようやくマルスと会見できた。
「お姉様！」
駆けよってくるマリアをだきしめてから、ミネルバはマルスに深々と頭を下げた。
「妹を助けていただき、感謝の言葉もありません、マルス殿。このような事情があったとはいえ、今まであなた方に敵対していたことを深くおわびいたします」
謙虚なミネルバの態度に、その場にいたハーディンもあえて何も言葉を発しなかった。
「兄のミシェイルは父王を殺害し、ドルーア帝国に荷担しました。今のマケドニアは間違っ

ています。この上は、亡き父の仇を討ち、祖国を正しい道に戻す所存です。そのためにも、どうかマルス殿の力をお貸しください。また、解放軍のために、我ら白騎士団の力を御自由にお使いください。今は私の騎士たちは引き離されておりますが、必ず解放軍にはせ参じるはずです」

復讐心もあらわなミネルバの言葉を聞いて、彼女にしがみついていたマリアが不安げに、ぎゅっとつかんでいた腕に力を込めた。

「わかりましたミネルバ殿。マケドニア一国のためだけではなく、広くアカネイア大陸すべての国のために力を尽くすと約束していただけますか」

マルスは、あらためてミネルバに問いかけた。

「はい」

ミネルバは、自分の言葉ではなく、マルスの言葉に従って解放軍に加わることを決意して答えた。

6

ついにアカネイア王国に入った解放軍は、パレスにむかって破竹の進撃を続けていった。

帝国軍にとって、マケドニア軍の分裂の痛手（こうてつ）は大きかった。また、しばらく前にグルニア軍の責任者、黒騎士団団長のカミュが更迭されたことも大きく響いていた。精鋭の黒騎士団

がグルニア本国に戻された上に、グルニア軍の動きが精彩さを欠いて鈍くなってしまったのだ。だが、現占領軍司令官のボーゼンは、城の守りに絶対の自信をもって、解放軍を恐れてはいなかった……。

「あの山のむこうがアカネイアの王都パレスなのですね」
馬に乗ったマルスは、同じようにして隣を進むニーナに訊ねた。
四方を山に囲まれた盆地にある王都パレスは、千年王宮と呼ばれる建国以来の美しい王宮を持ち、黄金の都とも称えられている。山々という天然の要害と、王都の周りを囲む多くの砦に守られたパレスは、難攻不落の都でもあった。
「ええ。私の生まれ育った故郷。そして、悲しい思い出の場所でもあります」
昔を思い出して、ニーナは軽く顔を伏せた。
「あの日、多くの人々が亡くなり、そして捕らえられて牢に入れられました。私の両親も、帝国軍に殺されて、無惨な姿を城下にさらしたのです」
「ニーナ様。悲しいことは、無理に思い出さなくともいいのです」
マルスは、涙ぐむニーナに、そう声をかけた。
「ごめんなさい。あなたも、同じ思いをなさったのでしたね」
「いえ、僕はすぐに姉上によって逃がされたので、実際に両親の死を見たわけではありません。それを目のあたりにしたニーナ様にくらべれば、僕はまだましだったのでしょう」
二人はしばらく黙り込んだまま馬を進めていった。ニーナにとってパレスは目前、そして、

マルスにとってもアカネイアを解放すれば次はいよいよアリティアなのだという思いが湧いてくる。
「でも、それも昔のことです。今は振り返っているときではありません。さあ、いきましょう、パレスへ」
「そうですね」
ややあってニーナが口を開いた。マルスもそれにうなずく。
「マルス王子。もし敵の中に、黒騎士カミュがいたならば……」
言いかけて、ニーナが言葉を濁した。よく聞き取れなかったマルスが、何かと聞き返す。
だが、ニーナはそれきり何も言わなかった。
「全軍に告ぐ、空からの敵に注意するんだ。別働隊が制圧したノルダの街に入るまでは、気を抜かないように」
マルスは、自らの気を引き締めるかのように全軍に言い渡した。
別働隊とは、オグマ率いるタリスの部隊とワーレンの傭兵隊を中心とした歩兵部隊である。街道を避け、山間の獣道を通って一気にノルダの街に奇襲をかけようというのだ。
パレスに最も近い街であるノルダは、パレスを訪れる人々がいったん足を止める交易の要所であった。それゆえ、多種多様の人々と文化が混然としている街でもある。それは貧富の差や善悪混じり合った物や人を内包して存続していた。パレス陥落とともに、ノルダには王都を逃げ出してきた難民や、爵位を失った貴族たちが流れ込んできた。護民団を自称する帝

国の息のかかった傭兵たちが戦争で儲けた富豪たちに雇われて街を牛耳り、闘技場や奴隷市が盛んに催されるほど退廃してしまっていた。

「外が騒がしいようだが……」

ジョルジュは、黄金に輝く弓を磨く手を休めて小屋の扉に目をむけた。豪奢な金髪を後ろで一つにまとめた秀麗な顔立ちは、こんな粗末な小屋で暮らしているには不似合いだ。

「おおかた、また傭兵どもが騒いでいるんだろうさ」

同居人のジェイクは、いつものことだと両手を頭の後ろで組んで椅子にふんぞり返った。

「いや、これは小競り合いなんてものではないだろう」

ジョルジュが立ち上がったとき、もう一人の同居人であるベックが扉を蹴破らん勢いで中に飛び込んできた。

「解放軍だ。噂の解放軍がついにやってきたぞ」

息を弾ませてまくし立てるベックに、ジョルジュはその面(おもて)を引き締めた。

「やっと、屈辱の日々も終わりを迎えるときがきたか。二人とも、アカネイア騎士団の者たちに伝えるんだ、今こそ決起するときだと。騎士団旗を掲げてニーナ殿下の許にはせ参じよと」

ジョルジュに命じられて、二人はあわただしく街の中へ散っていった。

街の中では、あちこちで戦いが繰り広げられていた。人々を虐げて搾取を続けてきたとはいえ、闘技場上がりの傭兵たちは思いのほか手強かった。それをよく知るオグマは、兵たち

を小部隊にまとめて集団戦法をとらせた。豪商たちの私兵に近い傭兵たちは個人の戦いには長けていたが、部隊の戦いとなると全軍の指揮官にあたる者がいないのが致命的欠点であった。
「女子供は、家の中に隠れていろ！」
逃げ惑う娘を手近な家の中に押し込みながら、ラディが叫んだ。そんなラディに隙ありと見た敵が、素早く彼にむかって走った。
「ラディ、そっちに二人いったぞ！」
ロジャーが、敵を止めそこなって叫んだ。一人の行手を槍で阻むものの、戦いとなってその場に釘付けとなる。
慌てて振り返ったラディは、家の扉を背に剣を構えた。だが、一瞬遅い。眼前に迫った傭兵の剣が頭上に振り下ろされる。身を沈ませたラディの頭ぎりぎりのところで、敵の剣が扉に食い込んで止まった。ちらりと見上げた敵の胸から血に濡れた鏃が突き出ているのが見える。息つく暇もなく敵の脇腹を剣で切り裂いて前に出ると、ラディはもう一人の傭兵と剣を交えた。何度か切り結び、双方が間合いを開いた瞬間、再び矢が飛んできて敵の首筋に命中した。矢をつかんだままどうと倒れる傭兵から目を離して、ラディは振り返った。銀の象眼のある弓を持った男が、矢を放っては敵兵を正確に狙い撃ちにしていく。
「我らは、アカネイア騎士団の者なり。解放軍の方々、我らはアカネイア騎士団の者なり」
ジョルジュの後ろから現われたジェイクが、大声で繰り返した。

彼らの活躍もあり、予定通りノルダの街は本隊が到着するまでに制圧された。マルスとともに到着したニーナは、そこでジョルジュたちに出迎えられた。
「ニーナ殿下、アカネイア騎士団のジョルジュでございます。先の戦いでは不覚をとり、申し開く言葉もございません。ですが、囚われていた牢から脱出し、炎弓パルティアとともに、再起を夢見てノルダで殿下をお待ちしておりました。どうか、我らも祖国奪回の戦いにお加えください」
アカネイア騎士団の生き残りとともに、ニーナの前に跪（ひざまず）いたジョルジュが許しを請うた。
その手には、かろうじてパレス王宮から持ち出すことのできたアカネイア王家の三種の神器の一つ、炎弓パルティアが握られていた。残る二つの神器である神剣メリクルソードと聖槍グラディウスは、すでにグルニア軍によって持ち出された後であった。
「いいえ。よくぞ生きていてくれました。一人パレスを落ちのびてからも、あなたたちのことを忘れたことはありません。どうか、私たちと一緒に戦ってください」
ジョルジュが差し出す黄金の弓を彼の手に戻し、ニーナが言った。
「はっ。ありがたきお言葉。この身をなげうってでも、パレスを奪回いたします」
ニーナの言葉に、ジョルジュが深々と頭を下げた。
マルスは彼らの再会を邪魔することなく、ハーディンとともに軍の展開を急いだ。ノルダ陥落の報を受ければ、敵はすぐにでもやってくるだろう。
オレルアン騎士団で防衛線を敷き、敵を撃退したところでアリティア騎士団を進めて突破

口を開き、一気に歩兵を進軍させるという作戦のためには、綿密な連携と布陣が必要であった。
「マルス様、少しだけお時間をいただけないでしょうか。少し、やっておきたいことがあるのです」
マルスが歩兵の編成を任せようとしたとき、珍しくオグマが断りを入れてきた。
「ああ、君たちはしばらく休んでからで構わないよ。先にアカネイア騎士団とともに弓兵隊の再編成をやっておこう」
戦闘直後のオグマたちをねぎらってマルスは言った。進軍途中での攻撃を避けるためにも、歩兵を進めるのは敵機動部隊の戦力を削いでからだ。時間的余裕はある。マルスはノルダ攻略に参加した兵士たちを休ませると、ドーガにジョルジュと相談して編成を決めるようにと申し渡した。
「オグマ……」
ノルダの街に姿を消そうとするオグマを、シーダが慌てて追いかけようとする。
「私用です。シーダ様はここでお待ちください」
「いえ、闘技場にいくのでしょう。私もついていきます」
マルスの腕をぎゅっとつかみながらシーダが言った。
「なら、僕もいこう」
暗黙のシーダの願いを聞いて、マルスはオグマに告げた。

「さあ、時間がなくなってしまうよ」
オグマに反論の間を与えずに、マルスとシーダは歩き出した。しかたなくオグマはナバールを呼ぶようにサジに言うと、足早に目的の場所にむかって歩き出した。
「王子とシーダ様は、ここでお待ちください」
闘技場の入り口でオグマが二人をその場に残そうとしたが、シーダが頑として聞き入れず、しかたなく一緒に中に入っていくこととなった。闘技場の詰め所にむかうのかと思われたが、オグマは地下へと続く階段を下り始めた。
地下牢を思わせる造りの地下室には、一人の商人ふうの男が机に座っていた。やけに落ち着き払っているところを見ると、上で何が起こったのかまだ知らないらしい。
「兄さん、買いにきたのかい、それとも売りかい。買うんだったら、商品はその奥の通路だ」
男の言葉に、マルスはそちらをのぞいてみた。そこはまさに牢屋で、中には年端のいかない少年たちが膝をかかえて床に座り込んでいた。
「今いるのは、売れ残りの奴隷ばかりだから安くしとくぜ」
「何だって、貴様、やはり奴隷商人か。今すぐ子供たちを解放して立ち去れ」
男の言葉を聞いて、マルスが剣を抜いた。
「王子、俺がやろうとしていたことを先にしないでください」
苦笑しながら、オグマも剣を抜いた。
「剣闘士オグマの名を覚えているだろう。上の闘技場も、お前が管理していたものだからな。

今日は、借りを返させてもらいにきた。これ以上、お前に人の人生を好きにさせないためにな」
頬の傷を軽くなでながら、オグマが凄んだ。
「お前、あのオグマか。思い出した、そっちの娘は、タリスの娘か。おい、野郎ども、出てこい」
オグマたちの恫喝(どうかつ)に後退っていた男は、大声で用心棒たちを呼んだ。
「王子はシーダ様をお守りください。さあ、このオグマと戦おうという馬鹿者はどいつだ」
通路の奥から現われた数人の剣闘士たちにむかって、オグマが言った。狭い室内でシーダたちをかばいながら、かかってくる剣闘士たちを有無をも言わせずに斬り倒す。そのすきに逃げ出そうとした奴隷商人は、階段を上ろうとしたところで突然血飛沫を上げてあおむけに倒れた。
「ずいぶんと無粋な場所に俺を呼び出したものだな、オグマ」
「愚痴はいいから、ちょっと手伝え、ナバール」
また一人倒しながら、オグマが言った。それに答えるよりも早く、ナバールが最後に残った剣闘士を斬り倒した。
「お怪我はありませんか。だから、待っていてくださいと申したのです」
もう隠れている敵がいないのを確認して、オグマがシーダとマルスに言った。
「こういうことなら、言ってくれれば兵を集めたものを」

「それでは、奴が子供たちを人質に取る可能性がありましたから。一人で一気に倒すつもりだったのです。奴の悪行は、私がノルダにいたときからいつかただしてやるつもりでしたから。さあ、子供たちを解放しましょう」

オグマが、マルスが質問する間を与えずに言った。納得するようにうなずくシーダは、何か知っているようであったが、マルスはオグマの言葉通り子供たちを解放することを自身の好奇心よりも優先させた。ナバールの後からやってきたサジとマジにも手伝わせて、牢を開けていく。

「とりあえず、子供たちはレナのところに連れていこう。衰弱している者も多そうだ。それから、子供たちの中にチキという少女がいたら知らせてくれ、バヌトゥとの約束だ」

マルスは、オグマたちに命じると子供たちを外へと連れ出させた。パレス奪還が終われば、ニーナ姫に言って彼らを親許に帰すなり修道院に預けるなりできるだろう。

「どうしたの、君。立てないのかい」

自分も牢を開けて中に入ったマルスは、そこにうずくまっている少年をだきあげて立たせようとした。瞬間、きゃっという短い悲鳴をあげて少年が後ろに飛び退く。

「マルス様!?」

その声を聞きつけたシーダが、急いでやってきた。呆然と立ちつくすマルスと、床にしゃがみ込んだまま胸を押さえて顔を赤らめている少年を交互に見比べる。

「女の……子!?」

「マルス様、いったいこの子に何をしたのですか」
行き場のなくなった手を困ったようにもてあますマルスに、シーダがつめよった。
「いや、僕は何も……」
「マルス様！」
ことと次第によってはとつめよるシーダに、マルスはしどろもどろになる。ひとときタリス島での仲のよい少年と少女に戻った二人を、少年の格好をしていた少女はじっと見つめていた。
「あなたは、アリティアのマルス様ですか？」
少女の問いにマルスがうなずくと、彼女はすっと立ち上がった。頭に巻きつけていた布を外すと、栗色の髪が零(こぼ)れ落ちた。
「私は、ミロアの娘、リンダと申します」
「君がミロア大司祭の娘……。でも、なぜ男の格好なんかを……」
マルスは、マリクやニーナから聞かされていたミロア司祭の話を思い出しながら訊ねた。アカネイア王宮の宮廷司祭としても活躍していたミロア司祭の身内のことは、ニーナも気にかけていたのだ。
「はい。ガーネフから逃れるために、男装してカダインを脱出したのです。でも、奴隷商人に捕まってしまい、ノルダまで連れてこられてしまいました」
「そうだったのか。君のことはニーナ様も心配していらした。大丈夫、これからは僕たちが

君を守ってあげるから」
「いいえ。私も戦います。お父様から受け継いだオーラの魔道書が、マルス様やニーナ様のお役に立つはずです。きっと、ガーネフを倒してみせます」
気丈さを見せながら、リンダが答えた。
「とにかく、今はニーナ様にその顔を見せて安心させてあげてくれ。これからのことは、その後で相談しよう」
マルスはこの場はお茶を濁すと、本陣へと戻っていった。

7

万全の布陣を敷いた解放軍は、パレスから出陣してきたグルニア騎士団をあっけなく撃退した。すぐに攻守を入れ替えた解放軍は、敵をアリティア騎士団が追撃し、本隊がそれを追うかたちでパレスへとむかった。グルニア騎士団を撃退したオレルアン騎士団は後陣についている。
カインたちの猛追で敵騎士団と同時に砦に突入することでパレスのある盆地に突入したアリティア騎士団ではあったが、いとも簡単にパレスへの玄関である砦を突破させたのは敵の罠であった。
恐ろしい咆哮が山間に響き、慌ててカインたちが退却してきた。彼らの後を追うようにし

て、巨大な頭が砦の上からのぞく。そのまま丸太でできた砦の外壁を押し倒して、火竜がマルスたちの前にその全身を現わした。
解放軍には竜を初めて見た者も多く、たちまちパニックが全軍に広がっていった。
「静まれ。我らはドルーア帝国と戦っているのだ。竜人の帝国と戦おうと心に決めた強者どもが、いざ竜を目の前にして臆してどうするか。剣を取れ、槍を構えよ、矢を放て。戦うのだ」
ジェイガンが騎士たちを鼓舞して回る。アリティア軍の中では、戦いの中で竜族の変身した姿を見たことがあるのは彼だけであった。同様に、ニーナとジョルジュもパレスでの戦いでマムクートたちの変身した姿は見ている。それは、過去の悪夢を彷彿とさせる風景であった。
「マルス殿、ようやくお役に立てるときがきたようですじゃ。ここはわしに任せて、いったん兵を下げてくだされ」
進軍の止まった本陣に、バヌトゥが姿を現わして言った。
「しかし、あんな敵をどうやって……」
「忘れておいでか、わしもまた竜族の者であるということを。さあ、わしから皆を遠ざけてくだされ」
戸惑うマルスにそう言うと、バヌトゥは火竜にむかって進んでいった。マルスの合図によって、カインたちが下がる。バヌトゥが火竜石を取り出して掲げた。赤い輝きが彼の身体を

つつみ、それが爆発的に広がっていった。その光の中で、老人のシルエットが変化していき巨大な竜の姿にふくれあがる。光が消え、そこには敵と同じ姿の火竜が立っていた。
『貴様、何者……そうか、バヌトゥか』
カインたちを追い立ててきた火竜が、足を止めて唸った。マルスたちには、唸り声としか聞こえなかったのだ。
『ショーゼンか。未だ、悪しき主に仕えていると見える』
バヌトゥが、同じ火竜族にむかって言った。敵よりも、幾分低い咆哮に聞こえる。
『ほざけ、ナーガにへつらった裏切り者めが』
ショーゼンが吠えた。その口から、激しい炎が吐き出される。ほぼ同時に、バヌトゥの口からも炎のブレスが吐き出された。炎の固まりがまっこうからぶつかり合い、爆発にも似た勢いであたりに飛び散った。返り血にも似た炎を浴びながら、ショーゼンが突っ込んでくる。
バヌトゥは素早く後ろ足で立ち上がると、敵をはたき込んだ。地響きをたてながら、大地にめり込むようにしてショーゼンが倒れた。立ち上がる暇を与えまいと、バヌトゥがその首筋に嚙みつく。牙が分厚い火竜の皮を貫いて、青黒い血が溢れ出した。
「よし、今のうちにパレスに突入せよ」
マルスは、全軍に命令した。その声に、呆然と火竜同士の戦いを見つめていた騎士たちが我に返る。
「アリティア騎士団、前進。敵が我らに勝るところなし。いざ、パレスを奪回せん！」

ジェイガンが、先陣を切って走り出した。すぐさまカインとアベルがその後に続く。士気を取り戻した解放軍は、バヌトゥたちを迂回しながらパレスへと進軍した。
そうはさせじと、ショーゼンが力を振り絞ってバヌトゥを振り払う。バランスを崩したバヌトゥがもんどりうって倒れた。むき出しになった腹に牙をたてようと、ショーゼンが顎(あぎと)を開く。だが、その上顎が炎につつまれ、ショーゼンはのけぞるようにして苦しみだした。それを合図に、次々にショーゼンにむかって矢が放たれる。遅れてやってきたジョルジュの弓兵隊が、攻撃を始めたのだ。
「凄い、あれがパルティアの力なのか」
ゴードンが、ジョルジュの持つ黄金の弓を、憧れを込めた目で見つめながらつぶやいた。パルティアから放たれる矢は炎につつまれ、何倍もの大きさになって敵を討つのであった。
「いや、本当に凄いのは射手の方だ……」
ゴードンは、ジョルジュを見つめながらつぶやいた。
ジョルジュたちの援護を受けて、バヌトゥがなんとか立ち上がった。パルティア以外の矢はほとんど受けつけないものの、絶え間なく降り注ぐ矢に立ち往生しているショーゼンにむかって、バヌトゥは炎のブレスを吐きつけた。バヌトゥの牙とパルティアから受けた傷が、炎に焼けて大きく広がっていく。焼けただれた全身の傷から沸騰した血を吹き出しながら、ショーゼンがどうと倒れた。そして、断末魔の痙攣(けいれん)をしたきり動かなくなる。
バヌトゥが、勝利の咆哮をあげた。

一方、態勢を立て直した敵軍は、周囲の砦から集めた騎馬隊をさしむけてきていた。だが、ショーゼンが倒されているのを見て、帝国軍の兵士たちは驚きで立ちすくんでしまった。その機を逃がさず、解放軍は一気に敵軍を撃破した。

「騎馬隊は市街の制圧と市民の保護。歩兵部隊のパレス王宮突入を助けよ」

市街地周辺に設置された弩台（シューター）を破壊しながらジェイガンが叫んだ。

「戦える者は、剣を取って自分の身を守れ。そうでない者は、安全な場所に隠れていろ。すぐに帝国軍をパレスから追い出してやる」

カインが、帝国軍の兵士を蹴散らしながら家々にむかって叫んだ。言いながらも、襲いかかってくる敵兵を力強い槍さばきで撃退する。

戦いは市街地まで拡大し、解放軍の到着を喜ぶ暇もなく、市民たちも戦いに巻き込まれていった。

「戦いは、私たちの優勢のようですね。これで、パレスの人々も救われ……あの煙は何でしょう」

解放軍の最後方からパレスにむかって進軍していたニーナは、市街から立ち上り始めた煙を見て叫んだ。

「敵が市街に火を放ったものと思われます。我々を街ごと焼き殺そうとでも思ったのでしょう、愚かな考えです」

部下からの報告で確認したハーディンが、ニーナに説明した。
「いけません、ハーディン侯、家々を焼かれては民が苦しみます。どうか、パレスの人々を助けてください」
「承知いたしました。オレルアン騎士団にお任せください」
ハーディンは、ニーナの願いを承諾すると馬を走らせていった。
「ワーレンの傭兵部隊はニーナ様と救護部隊を警護せよ。オレルアン騎士団は俺に続け。敵が放った火を消火して、ニーナ様のためにパレスの街と民をお守りする。いくぞ」
ハーディンは部下たちを引き連れると、アリティア騎士団が戦いを繰り広げているパレス市街へと乗り込んでいった。
「ニーナ様、私もいって参ります」
危険だからとニーナのそばにとめおかれていたリンダが、もう我慢できないと駆けだしていった。ニーナが止める間もあらばこそ、その姿は進軍する軍勢の中に見えなくなった。
解放軍に追い払われた傭兵が、酒場の扉を壊しながら転がり込んできた。中には、外から避難してきた人々や、宿屋をかねた酒場の泊まり客が身をよせあって戦いの嵐が過ぎ去るのを待っていた。血まみれの傭兵を見て、中にいた娘たちが悲鳴をあげる。
「おい、そこの娘、こっちにこい。この戦、もう帝国に勝ち目はねえ。こうなったら、お前らを盾に逃げ出すまでだ」

傭兵は、テーブルの下に隠れていた娘にむかって手をのばした。だが、横合いからのびてきた別の手が、傭兵の腕をむんずとつかんで捻りあげた。
「傭兵だったら、自分の身ぐらいは自分で守るんだな」
男は、そのまま傭兵を投げ飛ばした。
「貴様ぁ！」
激怒した傭兵が剣を振りかぶって斬りかかってこようとするのを、男は素早く自分の剣を抜き放って受け止めた。そのまま相手の剣を弾いて、返す剣で浅手を負わせる。
「くそ」
かなわぬと見てか、傭兵は慌てて外へ逃げ出していった。
「やれやれ。傭兵の口を探してパレスにきたんだが、帝国に雇われなくて正解だったというところかな」
ああはなりたくないと暗にほのめかしながら、男は傭兵が逃げていった方を見つめた。ふと視線を下におろし、床に落ちていたペンダントを拾う。
「これは、あなたのか」
男は、先ほど傭兵に連れ去られそうになった娘に歩みよって訊ねた。
「ああ、そうです。ありがとうございます」
娘は男からペンダントを受け取ると、大事そうに胸にかけた。豊かな胸の間に鎖をはさまれるようにして、美しい紋章の描かれたペンダントが服の上で踊る。

「煙だ！」
突然、酒場の中にいた少年が叫んだ。見れば、天井から白い煙が出ている。
「マリス、こっちにこい」
隅に隠れていたひげ面の男が、慌てて息子を手許に引きよせた。
「火を放ったか。解放軍が自分たちの都を焼くわけはないから、帝国の仕業か」
酷いことをするものだと、剣を持った男は顔をしかめた。
「安全な場所まで逃げるぞ。俺についてこい、娘」
「私にはシーマという名があります」
男が促すと、娘はしっかりとした口調で名乗った。
「そうか、俺はサムソンだ。いくぞ、シーマ」
意外なシーマの芯の強さに満足しながら、サムソンは彼女の手をとって外に飛び出した。宿にいた他の者たちも彼らに続く。すでに屋根全体に広がった炎からは、火の粉が絶え間なく降り注いでいた。
「街の者か、早く広場へ逃げろ。あそこは解放軍で守りを固めている。そこならば安全だ」
逃げ惑った二人が出くわした騎士が、広場の方向を指さしながら言った。
「ありがとうございます」
シーマが礼とともにお辞儀をする。その勢いで、胸のペンダントが下がり、炎の照り返しを受けて輝いた。

「広場までみんなを守ってやってくれ」
　帝国軍には見えないサムソンに、騎士は頼んだ。無言でうなずいて、サムソンがシーマたちを誘導していく。
　彼らを見送りながら、騎士はその場で小首をかしげた。
「どうかなされましたか、ハーディン様」
　立ち止まったままのハーディンを心配して、ロシェが駆けよってきた。
「どこかで見た覚えが……。いや、何でもない。マルス王子たちは王宮に突入したようだな。我らは、逃げ出してくる敵の武装解除と市街の消火に専念するぞ。まだ戦は終わってはおらぬ、気を抜くなと全軍に伝えよ」
　ハーディンはペンダントの紋章のことを頭から追いやると、ロシェにむかって命令した。

8

「ジュリアン、牢に囚われている人たちを解放してくれ。オグマ、彼らの援護を頼む。ドーガ、マリク、敵司令官を倒す、ついてきてくれ」
　王宮に突入したマルスたちは、二手に分かれて内部を制圧していった。
　地下牢にむかったジュリアンたちは、すぐに激しい戦闘に巻き込まれた。司令官であるボーゼンが、解放軍の王宮突入と同時に捕虜の殺害を命じたからだ。マルスの指示が早く、オ

グマたちの行動が素早かったからこそ間一髪間に合ったというところであった。
「おい、リカード、どこにいるんだ。早く牢を開けるのを手伝え！」
錠前と格闘しながらジュリアンが叫んだ。囚われている兵士たちを助け出して武器を渡せば、それだけこちらの戦力が増えるのだ。戦闘はオグマやバーツたちに任せて、ジュリアンとリカードは牢を開けるのが賢いと言えた。だが、その肝心なときに舎弟の姿が見えない。
「おい、急いでくれ。まだ牢には、ミディア隊長やボア司祭様が囚われているんだ」
「そうだそうだ。早くお助けしなければ」
鉄格子をつかみながら、双子のアーマーナイトがまくし立てた。毛髪のない顔は瓜二つだ。
「ほらよ、開いた」
ジュリアンが言うなり、ミシェランが扉を吹き飛ばしかねない勢いで飛び出した。その後から、トムスが同じようにして飛び出してくる。
「ミディア様たちは、あちらの独房だ。急いでくれ」
「って、おい、ちょっと待ってく……」
引きずられるようにして、ジュリアンが無理矢理トムスに連れられていく。
「おうい、待ってくれよ。俺もいるんだぜ。アカネイア騎士団は、いつも一緒だろうが」
ミシェランたちのあまりの剣幕に牢の奥に引っ込んでいたトーマスが、慌ててみんなの後を追った。

「何やら騒がしいようですね」
独房の小窓から外をのぞきながら、アカネイアの騎士の一人であるミディアが、隣の独房に入れられているボア司祭に訊ねた。
「おそらく、ニーナ様が騎士団を率いて戻ってこられたのだ。それしか考えられん」
「それでは、私たちは助かるのですか」
声だけ聞こえてくるボアの言葉に、ミディアは希望で顔を輝かせた。
ニーナ王女を最後まで守って戦ったミディアの部隊は、最後には敵将カミュの説得によって、ニーナの安全の保証を条件に投降したのだった。カミュは約束をちゃんと守ったが、メディウスはそれを快くは思わなかった。アカネイア王家に恨みをもつ彼は、王家を根絶やしにするつもりだったのである。再三の処刑命令に従わないカミュに業を煮やしたメディウスは、ショーゼンの部隊をパレスにむかわせた。それを知ったカミュは、身分の証としてファイアーエムブレムを持たせたニーナをオレルアンへ逃がしたのである。この反逆行為に激怒したメディウスは、彼をドルーア帝国に連れて帰り、奴隷として幽閉した。彼が処刑されなかったのは、ひとえに黒騎士としての功績ゆえであった。
小隊長であるミディアや宮廷司祭であるボアたちもやがて処刑される予定であったが、ニーナがオレルアン騎士団とともに決起したために状況が変わった。カミュに替わって占領軍司令官となったボーゼンは、彼女たちをニーナに対する人質にしようとしたのである。多くのアカネイア騎士団の騎士たちを捕虜にしておけば、ニーナも手は出せないと考えたのであ

った。
　だが、結局アカネイアの人間はニーナただ一人であり、マルスやハーディンの動きを止めることはできなかった。
「こうなった以上、敵はわしらを生かしてはおくまい。報復処置として捕虜を全員殺すだろう」
「構いません。すでにこの命はアカネイア王国に捧げています。ニーナ殿下の手によって王国が解放されるのであれば、私たちの命など惜しくはありません」
「あいかわらず気丈なものだな。だが、お前が死ねばグラに連れていかれたアストリアが悲しむぞ」
　我知らずボアは苦笑した。すでに老齢の彼自身は死ぬことなど恐れはしないが、若いミディアや他の騎士たちにはこれ以上無駄死にをしてほしくはなかった。強さは、無謀であってはならないのだ。
「ですが、私という人質がいなくなれば、あの人も祖国のために戦えるはずです。今のように帝国の言いなりになるよりは、どれほどいいことか。ただ、死ぬ前に一目でいいからあの人の顔をもう一度見たかった。それだけが心残りです……」
　アストリアを始めとする、帝国軍の命令を聞いて辺境の守りについている兵士たちのことを思ってミディアは唇を噛んだ。地方民の反乱を抑えるため、帝国はかつてのアカネイア騎士団の騎士たちを利用していたのだ。かつての王国騎士団が帝国に恭順している姿を見せて、

民衆の反抗心を削ごうとしたのである。恋人のミディアを人質に取られたアストリアの部隊や、ミネルバを連れ去られた白騎士団などは、グラやアリティアの治安維持に駆り出されていった。肉親や恋人や友人を人質に取られ、彼らは逆らうことができなかったのである。
それゆえ、ミディアは自分たちがいなくなれば、彼らは誰はばかることなく帝国に戦いを挑めると考えていたのだ。騎士として仲間の誇りのために死ぬことは本望であったが、女として恋人に一目会うまでは死にたくないというのも、また本心ではあった。
「ならば、軽々しく死ぬなどという言葉は口に出さぬことだ。武器を持たぬ我らは何もできないかもしれぬが、なんとしてでも生き抜いて、ニーナ殿下やアストリアの力になろうではないか。それまで、決してあきらめてはならぬぞ、生きるのだ」
ボアが、ミディアを諫めた。彼女は、その言葉に無言で答え、じっと牢の外を見つめた。
そこを、貴金属や剣を両手にいっぱいかかえた少年が通りかかる。
「へへっ、大漁、大漁」
こっそりと盗賊の本業にいそしんでいたリカードが、ミディアたちには気づかずに独房の前を通り過ぎようとしていた。
「そこの者、何をしている」
「わー、ごめんなさい。出来心なんです」
突然ミディアに声をかけられて、リカードが狼狽した。
「そんなことはいい。ここを開けてくれないか」

「は、はい。ただいま。開けたら、見逃してくださいね」
懐から盗賊専用のピッカーを取り出すと、リカードはミディアの独房の鍵穴に差し込んだ。
そこへ、ミシェランとトムスに連れられたジュリアンとトーマスがやってくる。
「リカード、てめえ、こんなとこにいやがったのか」
「あ、兄貴……。ちゃんと、仕事はしてますよお」
「仕事って、何の仕事をしてたんだ」
リカードの姿を見つけたジュリアンは、床におかれた宝剣や装飾品を見て聞き返した。リカード自身も、だらしなくネックレスや腕輪などを無造作に身につけている。まるで、趣味の悪いワーレンの豪商といったところだ。
ジュリアンがボアの独房の鍵を開け始めると、通路のむこうから敵兵が現われた。
「わあ、敵だよ」
リカードが叫ぶ。そのとき、鍵が外れ、独房の中からミディアが飛び出してきた。勢いよく開く扉に弾き飛ばされて、リカードがトーマスを巻き添えにして床に転がる。
ミディアは、先に目星をつけておいたリカードが持っていた剣の一本を素早く拾うと、敵兵にむかっていった。今までの鬱憤をすべて晴らすかのように、華麗な剣技で敵を倒す。
「ミシェラン、これを使え。トムスやトーマスの分の武器も敵から調達するぞ」
敵兵から奪った槍を部下に投げ渡して、ミディアが言った。その言葉が終わらないうちに、戦いの喧噪が近づいてくる。オグマに追い立てられた敵兵たちが、ミディアたちのいる場所

にむかって逃げてきたのであった。
　すぐさまミディアとミシュランが敵を迎え撃ち、ほどなく武器を調達したトムスがそれに加わった。弓兵であるトーマスはジュリアンとともに衰弱したボアに肩を貸して後ろへと下がる。リカードは、慌てて戦利品をかき集めて彼らの後を追った。
　じきにオグマの率いる部隊が現われ、挟み撃ちにあった敵兵はあきらめて投降し、今までミディアが入れられていた独房へと押し込められた。
「それは、ちゃんとニーナ様に返しておけよ」
「へい、わかりやした」
　ジュリアンに怒られて、リカードがつまらなそうに答えた。
「まったく、敵陣の中で何をやっているんだか。しかし、どこでそんな物を見つけてきたんだ」
　半ば呆れながら、オグマがリカードに訊ねた。
「敵の詰め所の床板の下に隠してあったんでさあ。たぶん、誰かがネコババしたんでしょうよ」
「なら、リカードが取り返したということにしておくか。それにしても、これは見事な剣だな」
　オグマが、リカードのかかえる剣の一本を手に取って言った。軽く、そして堅く、刀身は金属ではない物質でできているような剣であった。たとえて言えば、象牙や鹿角のような、

生物的な牙か何かを削り出して作ったような剣だ。

「それは、アカネイア王家の宝物庫にあった竜殺しの剣じゃな。普通の剣などよせつけない堅いドラゴンの鱗をも貫き通すと言われる名剣の一振りじゃよ」

トーマスにささえられたボアが説明した。

「ほう、それは使えるかもしれない。まだ敵の竜がいるかもしれないからな。さあ、もう牢の人質は全員救い出した。戦える者は俺と一緒にマルス王子の部隊と合流しろ。後の者は、王宮の広場に避難してくれ。そちらの誘導はジュリアンに任せる。さあ、ぐずぐずせずに動くぞ」

オグマは皆を促すと、マルスの許へと急いだ。

そのころ、マルスたちは思わぬ足止めと脅威にさらされていた。

「まさか、建物の中にも火竜がいたとは……。手前の通廊まで後退するんだ」

手痛い被害を被りながら、マルスは部下たちに後退を命じた。剣や槍をほとんど受けつけない火竜に対して、歩兵での攻撃は自殺行為であった。恐怖にかられてしゃにむに突っ込んでいった若い兵士たちの何人かが、炎に焼かれたり踏みつぶされて命を落としている。火竜の通れない扉を抜けて後退したマルスたちであったが、態勢を立て直す時間を稼ぐのが精一杯で、じきに敵は壁を壊して現われるであろう。

「剣では無理です。ここは、私が魔法でなんとかします。マルス様たちは下がっていてくだ

さい。大丈夫、敵は炎を糧とする魔獣。氷雪（ブリザード）の魔法ならば対抗できるはずです」
心配するマルスに、マリクが自信をもって答えた。
マルスたちがマリクの後ろに下がった直後に、火竜が建物の壁を崩して通廊に入ってきた。
「白き貴婦人よ、冷たき御手（みて）は荒ぶる者の魂を鎮める。吹き荒れよ、氷雪の嵐！」
マリクの持つ魔道書から、解かれた魔文字が立ち上り、白い魔方陣を中空に作り出す。次の瞬間、激しい冷気がそこから吹き出し、嵐となって火竜をつつみ込んだ。
「やったか⁉」
頭部から胸部までを白い霜に被われた火竜を見て、マルスたちは期待に目を輝かせた。だが、一瞬動きを止めた火竜は、苦しみからか大きく暴れ出した。強靭な尾が壁を打ち、天井の一部が崩れ落ちてくる。
「一撃で仕留められなかったか！」
落ちてくる天井に彫られていたレリーフの一部を間一髪で避けながら、マリクは叫んだ。飛び来る破片に半ば埋もれるようにして床に倒れる。火竜は、上顎にできたつららを噛み砕くと、倒れたままのマリクにむかって口を開いた。
「マリク！」
崩れる天井のために体勢を崩したマルスが叫んだ。間に合わないと心の中で叫ぶマルスの横を、小柄な人影が走り抜けていく。
「聖なるかな正しき心。闇は千々に己が罪にて消え去らん。輝け、浄化の光輝よ！」

すぐ後ろで聞こえる詠唱に、倒れたままのマリクはそちらを見上げた。薄紅色の長衣（ローブ）の深い切れ込み（スリップ）からすらりとのぞいた脚で力強く床を踏みしめ、リンダが真正面から巨大な火竜を見据えている。オーラの魔道書から解放された魔文字から作り出された魔方陣は、黄金色に輝いていた。活性化するマナにリンダの長衣（ローブ）の裾が大きくはためき、魔方陣が輝きを増した。同時に、火竜の足下に別の魔方陣が出現し、そこから黄金の光を放つ光柱が立ち上った。光の柱の中で、火竜が苦しみ悶える。

「風は光に輝かん。荒ぶる魂は敵を切り裂く刃となれり。舞い踊れ、風の白刃よ！」

このすきに立ち上がったマリクが、リンダの横に立ってエクスカリバーの魔法を唱えた。白銀の魔方陣がオーラの黄金の魔方陣の横に現われる。真空の刃が、オーラの光に苦しむ火竜の全身を切り刻んだ。傷口からは、黒い煙が立ち上って光の中に消えていく。

「輝け、浄化の光輝よ！」

リンダが、再び叫んだ。光柱が光を新たにし、エクスカリバーで受けた傷の周りが組織崩壊を起こして巨大な鱗が周囲に飛び散る。

魔法の光と風が消え、火竜はマリクとリンダの目の前に地響きをたてて倒れた。

「ふう……」

一気に緊張の糸が解（ほど）けたのか、リンダがマリクの腕の中に倒れ込んできた。ささえきれずにマリクが尻餅をつく。

「大丈夫ですか、マルス様」

オグマが、瓦礫を乗り越えながら一同のところへやってきた。
「ああ、外にいたのより手強い火竜だったが、マリクとリンダが仕留めてくれた」
「そうですか」
どこかつまらなそうに、オグマはまだしゃがみ込んでいる二人に近づいていった。
「リンダの魔法で助かったよ」
「そんなことは……」
答えかけて、リンダはマリクにだきかかえられていることに気づいて頰を染めた。だが、そのとき、死んだと思っていた火竜が突然鎌首を持ち上げた。
「危ない、下がれ」
オグマが叫ぶ。マリクが、ぎゅっとリンダをだきしめるようにして守ろうとした。その間に、素早く踏み込んだオグマが、先ほど手に入れたばかりの剣で火竜の喉を大きく切り裂いた。喉から血が沸騰するような音を立てながら、再び火竜が倒れる。首の半分以上を切断された火竜は、今度こそ本当に動かなくなった。
「大丈夫か」
安否を訊ねるマルスに、マリクたちはなんとかうなずいてみせた。
「よし。思いのほか時間をくってしまった。急いで王宮を制圧するぞ」
マルスの言葉に、その場にいた者たちが一斉におうと答えた。火竜の死体を乗り越えて、奥へと進む。

王の間には、ボーゼンとわずかな兵士たちが残るだけであった。
「馬鹿な、マムクートを倒してきたと言うのか」
「そうだ。もはや、お前たちに勝ち目はない」
啞然とするボーゼンに、マルスが言った。
「ほざけ。こうなればお前たちだけでも倒して、メディウス様に忠誠を示すのみ」
警護兵を突破してくるマルスに対して、玉座から立ち上がったボーゼンは一冊の魔道書を取り出して開いた。
「烈なりし秘めたる炎よ。灼熱の怒りは敵を焼き尽くさん。ほとばしれ、大地の息吹よ！」
ボーゼンの呪文とともに、深紅の魔方陣がマルスの足下に現われる。マルスは、慌てて後ろへと飛び退いた。次の瞬間、魔方陣から炎の柱が吹き上がった。火山の爆発にも似た炎の柱から火の固まりが四方へと飛び散る。火の高位魔法であるボルガノンだ。火球（ファイアー）や、火炎流（エルファイアー）のさらに上位にあたる魔法である。直撃を食らっていたら、骨まで焼き尽くされていたことだろう。
魔法の効果が消えて魔方陣が消えると同時に、マルスはボーゼンに突っ込んでいった。再び魔法を唱える前に、一撃で敵を倒すしかない。マルスの剣が、ボーゼンの喉を刺し貫いた。唱えかけた呪文を声にすることができず、ボーゼンが絶命して魔道書をその手から落とした。

9

「ニーナ王女様、ばんざーい」
パレスの街に、人々の声がこだまする。
戦いは終わり、解放されたアカネイアの王都に、正当な王家の人間が戻ってきたのだ。
ハーディンのオレルアン騎士団が警護する中、ニーナは王宮に入り、謁見用のバルコニーに立って広場を埋め尽くす人々の前に現われた。
「親愛なるアカネイアの皆さん、私は戻って参りました……」
歓声がわき起こり、ニーナ王女の言葉をもかき消した。アカネイア王国の復活、それは人々の希望の復活でもあるからだ。
「……ここにおられるオレルアン、タリス、そして、アリティアの方々の力を得て、私たちはドルーア帝国を打ち破り、大陸に平和を取り戻すと誓います」
ニーナは、そばにいるハーディンとシーダ、そして、マルスに視線をむけて言った。
「マルス殿」
促されて、マルスは紋章の盾を高々と掲げた。極めて形式的なやり方ではあるが、人々に対する効果はこれが最も高いものであったからだ。
アカネイア聖王国が倒れたとき、紋章の盾を掲げた聖騎士カルタスと勇者アンリがドルー

ア帝国を倒し平和をもたらしたという史実は、人々にとっては伝説となっていた。まして、アンリの子孫であるマルスがファイアーエムブレムを戴いたとあればなおさらであった。

「炎の紋章の加護の下、アカネイア大陸のすべての人々に平和を！」

マルスは声高々に宣言し、人々はいつ終わるともしれぬ歓声でそれに応え続けた。

第3章　光の王

1

アカネイア解放の後に充分な補給と休息をとった解放軍は、新たな態勢の下で進軍を再開した。当面の目的はアリティアの解放である。その道程には、帝国に下ったグラ王国を通らなければならず、戦いは避けられないだろう。

母国の解放ということもあり、その主力はアリティア騎士団である。同盟国タリスの傭兵部隊と、ワーレンの傭兵部隊がそれに加わる。また、グラにはミネルバの白騎士団と、アカネイア騎士団の一部がアカネイア解放を知らずにいる可能性があるため、亡命したマケドニアの人々と、アカネイア騎士団の一員であるミディアが同行することになった。残るアカネイア騎士団の主力とオレルアン騎士団は、ワーレン付近に展開していたグルニア軍がレフカンディから戻ってくることに対抗して、ニーナとともにパレスの守りにつくこととなった。

帝国軍としても、その間手をこまねいていたわけではない。ワーレンにいたグルニア軍を呼び戻し、パレス奪還を命じたのは言うまでもないが、グラにも各戦力を集め、グルニア本国の黒騎士団も出撃準備に入ったという。

パレスを出て海岸沿いに北上した解放軍は、グラの北東から進軍した。対する帝国はメニディ川手前に大規模な防衛線を敷き、グルニアの木馬隊と呼ばれる弩兵部隊を配置していた。鉄壁の防衛線を敷き、グルニアからの精鋭黒騎士団の到着を待とうというのだ。
「なぜ敵がそうせねばならないのかと言えば、この地がグラであるからです」
軍議の席で、モロドフが各隊長を前に説明を始めた。
小国であるグラは、大規模な騎士団を有してはいなかった。それゆえ、戦前はアリティアとの軍事同盟によって国防を行なってきたのである。それは、帝国に下った現在でも同じであった。グラを守るのは実質グルニア軍であり、その他の寄せ集めの傭兵たちが主力であるのだ。特に、現在はアストリアの率いるアカネイア騎士団の一部と、マケドニアの白騎士団が傭兵扱いでグラ軍に組み込まれている。戦力不足を補うためには必要なものではあるが、それはまた獅子身中の虫にもなりえるのだ。
もとはといえば、戦争初期にアリティア軍がグラの裏切りによって壊滅したのも、本陣近くでのいきなりの寝返りにアリティア軍が大混乱に陥ったからである。暗殺にも等しいかたちでアリティア国王コーネリアスを殺され、指揮系統が壊滅したのだ。もちろん、カミュ率いる黒騎士団はその機会を逃さず、アリティア軍を全滅させたのである。
グラ国王ジオルがアリティアを裏切るもととなったのはその気弱な性格ゆえであるが、帝国の暗黒司祭ガーネフに巧みにつけ込まれた結果でもあった。アリティア軍出兵の報を聞いたガーネフが、ジオルを懐柔しようと彼のもとを訪れたのである。さすがに帝国への服従は

断ったジオルであったが、それに対するガーネフの回答は凄惨なものであった。ジオル王の第二王妃の変死体が発見されたのは、回答の翌日のことである。その夜に、ガーネフは次は娘か王自身かと脅迫した。結果、ジオルは我が身かわいさに帝国への帰順を密約したのであった。結果として娘をも守ったつもりのジオルであったが、帝国にこびへつらう父親に愛想を尽かした王女は父親を見限って出奔してしまったのだった。

「他国の騎士団をあてにするしかないグラでは、アカネイアとマケドニアの傭兵を更迭する勇気はないでしょう。下手に更迭しようとすれば、そのために多大な労力を割かねばならず、城の守りが維持できなくなるからです。かといって処刑しようものなら、必死の反乱を誘発して戦闘を余儀なくされるでしょう。ですから、グラとしては黒騎士団の到着を待って、それから傭兵部隊を排除するしか道はないのです」

「つまり、すでにグラは自滅寸前なわけなんだね」

奇妙な感覚を覚えながら、マルスが言った。グラ国王ジオルは亡き父王コーネリアスの仇であるが、今まで感じていた憎しみよりも、現在は哀れみの方が強く感じられてしようがないのであった。実際にコーネリアスを殺したのも、ジオル自身ではなく、帝国から彼の部下として送り込まれた暗殺者であった。

「その通りです。おそらくは、情報を操作して、各騎士団を従わせているのでしょう。ミネルバ王女なりミディア将軍が姿を見せれば、グラにいる敵軍は自然と瓦解します」

「だが、口で言うほど簡単ではないのだろう」

マルスの言葉に、モロドフがうなずいた。

「グルニアの黒騎士団がくるまでに敵の防衛線を撃破し、同士討ちの前に白騎士団とアカネイア騎士団を味方につけねばなりません」

モロドフが作戦の具体的な説明を始めた。どちらにしても短期決戦以外に道はない。黒騎士団がグラに到着しないまでも、アリティアにたどり着いてしまえば祖国は激戦の炎に焼かれることとなってしまう。問題は、絡め手でいくか、力押しでいくかだ。

「下手な策を弄するのは時間の無駄だろう。かといって、正攻法で無駄な損害を出すわけにもいかない。もしよければ、ここはバヌトゥに力を貸してもらうのが賢いと思う」

マルスは、あらかじめ呼んでおいたバヌトゥの方を見て言った。

「わしはチキを捜すのを手伝ってくれとマルス王子に頼んだ。王子は、ちゃんとそれを果たしてくれている。ならば、わしも約束はちゃんと守るべき。わしの力が必要なら、遠慮などいらぬ」

バヌトゥが即答し、作戦は決まった。

解放軍は火竜となったバヌトゥを前面に押し立てると、その背後に隠れるようにしてカインたち騎兵が突撃の準備を整えた。

突然現われた火竜に混乱をきたしたグルニアの木馬隊ではあったが、すぐに統制を取り戻すとバヌトゥにむかって攻撃を始めた。飛んでくる太矢を吐き出す炎で焼きながら、バヌトゥが突進する。何本かの太矢を受けながらも、彼は怯(ひる)まなかった。その迫力に、敵がまた恐

慌を起こす。そして、攻撃の間合いに入ったと見るやいなや、バヌトゥの背後からカインとアベルに率いられたアリティア騎士団が二本の激流となってグルニア軍に襲いかかった。懐に飛び込んでしまえば、弩（いしゅみ）はただの飾りに等しい。あっという間に射手を倒され、弦を断ち切られてグルニアの木馬隊は全滅した。

「全軍、進撃を開始せよ。グラ城を落とす！」

マルスは、命令を発した。整然と歩兵部隊が前進を開始する。人の姿に戻ったバヌトゥは最後尾のレナたちと合流して傷の手当てをしてもらい、カインとアベルはそのまま本隊の左右について側面の守りを固めた。上空には、わざと目立つように、ミネルバとシーダがマケドニア白騎士団の旗を掲げて飛んでいる。

この陣形は、早速効果を発揮した。グラ城上空に待機していた白騎士団が、攻撃を開始するを装って即座に駆けつけたのである。

「ミネルバ様、御無事でしたか」

カチュアを連れたパオラが、うれし涙をこらえながらミネルバの隣に天馬をよせた。

「苦労をかけたな。だが、マルス王子のおかげで無事マリアも救い出せた。長い間屈辱に耐えてくれたお前たちにも礼を言う」

久しぶりに会えた部下の女騎士たちの顔を見回して、ミネルバが感慨深く言った。

「もったいないお言葉、我らもこれで報われます」

代表してパオラが答えた。

「あそこに、マルス王子様がいらっしゃるのですね」
シーダの横にならんだカチュアが、地上を進む旗本隊を見下ろしながら訊ねた。
「ええ、あなたたちを見ているわ」
マルスのいる場所を示しながら、シーダが余裕の笑みを浮かべた。実際、マルスは頭上を舞う白い天馬の群れを、美しくも力強いものだと見上げていた。
「綺麗……。なんだか、マケドニアに帰ってきたみたい……」
空を見上げながら、マリアがつぶやいた。
「頼もしいな」
マルスは、そうつぶやいた。少し前までは、マケドニアは帝国を構成する国の一つ、あからさまな敵であったのだ。マケドニア自体は今でも敵であることに変わりはなかったが、今頭上にいるミネルバと白騎士団は間違いなくマルスの味方であった。結局、国ではなく人であるのだ。それは、戦いでも、平和なときの国政でも、何ら変わることはない。マルスは、人を信じることの正しさを、空を舞う天馬の美しさから感じとっていた。
やがて解放軍は、グラ城手前の川に達した。
突然の白騎士団の離反に慌てたジオルは、グラ城の上に弓兵を配置し、川の跳ね橋をアカネイアのアストリア率いる傭兵部隊にあげさせた。
アストリアをわざわざ前線に出したのは他に有力な兵がいなかったせいもあるが、アカネイアの兵士に対して解放軍が攻撃を躊躇して時間が稼げるのではないかという考えがあって

のことだ。だが、それが浅慮であることは明白であった。
「止まれ。貴公らに恨みはないが、わけあってここから先にいかせることはできない。どうしてもと言うのであれば、我らの屍を乗り越えていかれよ！」
弓兵による狙撃も恐れず、アストリアが川岸に進み出て叫んだ。金髪も目に艶やかな凛々しい青年だ。
「アカネイア騎士団のアストリア殿とお見受けするが！」
「いかにも！」
ジェイガンの問いに、アストリアは堂々と答えた。その言葉に、解放軍の部隊の中から、一人の女性が前に進み出た。
「ミディア!?」
その姿を見て、アストリアが驚きと喜びのない交ぜになった声をあげる。
「私は無事です。アカネイアも、マルス王子を始めとする解放軍の手によって帝国から解放されました。今は、ニーナ殿下がパレスにいらっしゃいます」
「本当か！」
「はい。ですから、早く私の許に戻っていらしてください」
ミディアの言葉に、アストリアの部下たちもざわめいた。
「隊長……」
「跳ね橋を下ろせ。我らは、アカネイア騎士団に復帰するぞ！」

部下たちの言葉に、アストリアは高らかに宣言した。すぐに部下が跳ね橋を下ろそうとするが、その前にグラの兵士たちが立ちふさがった。
「裏切り者め、そうはさせるか」
「もともと、我らは祖国を裏切ったりはしていない」
たちまち対岸で戦闘が始まる。それを見て、ミネルバの白騎士団がまっ先に動いた。アカネイアとグラの兵士たちを見わけて、確実に敵兵だけを攻撃していく。
跳ね橋が下りた。満を持して待っていたミディアの部隊が、先陣を切って戦いに飛び込んでいく。
「アストリア！」
恋人の名を叫びながら、ミディアが一目散に彼の許に駆けつけた。
「また会えて嬉しいぞ、ミディア」
「私もよ、アストリア。もう絶対に離れたりしないわ」
互いに声を掛け合いながら、二人はぴったりと合った呼吸で敵を倒していった。
正確な敵味方のわからないマルスたちは、全軍に大声で鬨の声をあげさせると、整然と隊列を組んで橋を渡りだした。効果はてきめんで、戦意を失った敵兵は我先にと逃げ出していった。
「陣形を変更する。戦闘で疲労した白騎士団とアカネイア騎士団は後方へ。弓兵の攻撃後、騎馬隊は敵先鋒に突撃。歩兵部隊は、城内を制圧せよ」

マルスは、すぐに次の命令を下した。そばで、モロドフが優秀な生徒を見る目で彼を見つめている。実戦で彼の戦術論を身につけてきたマルスは、モロドフから見て立派な指揮官に育ったと言ってよかった。

新規参加した兵士を後方に下げて敵味方の区別を明確にすると、解放軍は怒濤のごとく攻城を開始した。城と言っても、グラはそれほど軍事力の発達した国ではない。アリティアやアカネイアから見れば、少し大きな砦ぐらいの防衛力であった。簡単に正門を突破し、解放軍は城内になだれ込んでいった。

「もはや、これまでか。なんとか、命の助かる方法はないものかの」

玉座の椅子をきつく握りしめながらジオルが側近に訊ねた。その顔面は蒼白で、心なしか全身が小刻みに震えている。

「敵の大将はアリティアのマルス王子。陛下を父の仇と狙っている男でございます。降伏しても、助かるかどうか。人の恨みとは恐ろしいものでございますゆえ」

玉座の横に控えていた司祭が、抑揚のない声で答えた。

「拷問の後に処刑されるのは嫌じゃ」

ジオルが、情けない声をあげる。

「お望みとあれば、これを差し上げますが……」

そう言って、司祭は懐から取り出した小瓶を差し出した。それを目の前にして、さすがにジオルが躊躇する。だが、そのとき戦いの喧噪が一気に玉座に近づいてきた。兵士たちの断

末魔の悲鳴がジオルの耳を貫いた。
「シーマ、わしの仇を……」
奪い取るようにして司祭から小瓶を受け取ると、ジオルは一気にそれを呷いだ。
玉座の間に突入したドーガたちの見たものは、玉座にもたれかかるようにして絶命しているジオルの姿だけであった。毒を渡した司祭の姿は、すでにどこにもなかった。
「そうか、哀れな男だ」
報告を受けたマルスは、そうつぶやいた。仇をとったという実感は皆無であった。結局、グラも帝国の犠牲者でしかなかったのだ。
マルスは帝国の兵士をグラ国内から一掃すると、グラ兵を武装解除させた。
この日、グラは再びアリティアの一部に戻ったのである。

2

「そうか、妹さんはアカネイアの至宝を追っていったのか」
地面の上にあぐらをかいてパンを囓りながら、アベルはパオラに言った。
「ええ。グラから持ち出されたメリクルソードの行方を追っていきました。あの剣は、帝国を倒すための大きな力となりますから。まして、敵に使われでもしたら大変です」
アベルの前でなぜか正座しながら、パオラが答えた。そして、慎ましやかにパンを囓る。

「しかし、彼女……確かエストさんだったな、彼女一人で大丈夫なのかい」
「心配になりますか？」
「いや、そういうわけでは……」
小首をかしげて訊ねるパオラに、アベルは照れ隠しに笑い出した。それを見て、パオラがおかしいような悲しいような微笑みを浮かべた。

「おや、珍しく一人か」
ジェイガンが、一人で食事をしているカインを見つけてそばに腰を下ろした。
「グラからこっち、アベルの奴がつきあい悪いんですよ」
思い切りパンを噛み千切りながら、カインがくぐもった声で答えた。
「なるほどな。それで、お前はどうなんだ」
「どうなんだと言われても、いったい何のことです？」
きょとんと問い返すカインに、ジェイガンが思わず苦笑を浮かべた。
「なぜ笑うんですか」
カインが、追い打ちをかけるように墓穴を広げる。
「いや、実にお前らしいと思ってな」
それきり、ジェイガンはこの話題には触れなかった。

翌日、解放軍はカダインへと入った。

複数の島から構成されるアリティア、一つの島であるグラやカシミアなどの内海の島々は、外海のタリスやペラティとは違って、それぞれの島同士が橋で複雑に結ばれていたのだ。グラは、アカネイア北部とカダイン南部に橋で結ばれている。アリティアもカダイン南部と橋で結ばれているが、グラとの間に橋はなかった。橋を架けるには距離が遠いというせいもあるが、グラがアリティアから独立したいきさつなどもあって、大規模な橋はついに造られることがなかったのである。

「ガーネフは、カダインにはいないのだな」

マルスは、カダインにいた司祭と魔道士たちを集めて訊ねた。解放軍はカダインとアリティアの国境に陣を張っている。ここから南に橋を渡っていけばアリティア、北の砂漠に足を踏み入れればカダインである。

「すくなくとも、私がカダインを後にした時点では、どこかに姿を消していました」

マリクが報告する。

「あ奴は、各国を飛び回って暗躍していたからの。だが、戻ってはいないという確証もない」

ウェンデルが補足した。

「もしガーネフがいるのなら、私が倒します。父の仇を討たせてください」

「いや、オーラをもってしてもだめであろう。現にミロア様でさえ破れているのだ」

意気込むリンダをなだめるようにウェンデルが言った。

「それほどまでにガーネフという男は強敵なのか」
「あ奴は、暗黒魔法マフーというものを使いまする。かの魔道書は悪霊によって敵の生命力を失わせるだけでなく、それを持つ者をいかなる攻撃からも守る力を持っておるのです。奴と戦おうとした者は、本能的な恐怖に襲われて動けなくなってしまうのです。おそらく、マルス様や勇敢な騎士の方々ですら、あ奴には傷一つ負わせることはできませぬ」
マルスの問いにウェンデルが答えた。その言葉は、あまりにも絶望的なものであった。ガーネフを倒すことができなければ、帝国に勝つことはできない。
「何か方法はないのか」
「すべての魔法を創始したと言われる大賢者ガトー様であれば……。しかし、あのお方は今どこにおられるのかわかりませぬ。生きておられるのか、死んでおられるのかも。カダインでさえ、すでに伝説とされるお方ゆえ」
ウェンデルの言葉に、全員が押し黙ってしまった。
「いかに敵が魔王ガーネフでも、我らが一斉に立ちむかえば倒せないはずがありません」
カインが意気込んだが、素直にその言葉を信じる者はいなかった。
「ウェンデル司祭の言われた通り、アリティアにもグラにもファルシオンはなかった。やはりガーネフが持ち去ったのだろう。メディウスを倒すためにはファルシオンはどうしても必要だ。アリティアにいく途中で、カダインを無視するわけにはいかないだろう。かといって、ガーネフがいなければ、よけいな戦闘で時間をかけることはアリティアに駐留する敵軍に準

備の時間を与えてしまうことになる」
マルスは、考えあぐねていた。だが、迷いのあるマルスよりも、今度ばかりはガーネフの行動の方が早かった。
「大変です。カダインから魔道士の一軍が、東方の砦よりマケドニア軍が進軍してきました」
「すぐに応戦しろ。カダインを攻略する」
マルスは、決断した。敵の行動の方が早かったとはいえ、臨機応変に対処できれば、逆に攻勢に出ることもできる。それに、カダインからの攻撃は予想の範囲内でもあった。そのため、解放軍の動きも早かった。
「敵の竜騎士は、我らが迎え撃とう」
解放軍に加わってから、初めての本格的な戦闘と、ミネルバが意気込んで白騎士団を率いて出撃した。その行動は素早く、あっという間に遠く離れた空の上で天翔(あまかけ)る騎士同士の空中戦が開始される。
砂漠を進んでくる魔道軍には、マリクを中心とした魔道士の部隊と騎士団がむかった。砂漠では馬が足を取られるため、騎士団はあくまでも後方支援のはずであった。
こちらはゆっくりとした足取りで接近していき、やがて戦端が開かれようとしていた。
「愚か者どもがやってきたか。我が恐ろしさを胸に刻ませるには絶好の機会であるな」
先頭に立つ司祭が、面白そうにつぶやいた。誰あろう、ガーネフその人だ。
「あれは、ガーネフ！」

ウェンデルが叫んだ。その言葉を聞いて、一人の騎士が飛び出していく。
「奴がガーネフならば、俺が倒してマルス様の不安を払ってやる！」
「いかん！」
後先構わず飛び出していったカインを見て、ウェンデルが持っていた杖を振り上げた。
「解放されよ、宿りし力。守れ、悪しき波動より」
ウェンデルの聖句とともに、マジックシールドの杖から放たれた光の球体がカインを守るようにその身をつつみ込む。魔法から身を守ってくれる光の盾だ。そのまま槍を構えてガーネフに突っ込んでいこうとしたカインであったが、なぜか途中で金縛りにあったかのように立ち止まった。
「漆黒の宝玉よ。闇に棲みし眷属は心の闇を喰らえり。放たれよ、暗黒の亡者どもよ！」
ガーネフがマフーの魔法を唱える。現われた漆黒の魔方陣から、見るもおぞましい亡霊たちが飛び出す。それは真一文字にカインへとむかった。地獄の釜の中でわんわんと響くような怨嗟の叫び声が響き、カインを押しつつむようにして亡霊の群れが通り過ぎた。生命力の大半を吸い取られたカインが、馬とともにばったりと砂の上に倒れる。
「カイン！」
アベルが、危険も省みず親友の許へと走った。
「――舞い踊れ、風の白刃よ！」
「――輝け、浄化の光輝よ！」

マリクとリンダが、援護の意味もかねて魔法を放った。だが、エクスカリバーの真空波はガーネフの直前で四散し、オーラの魔方陣はガーネフの足下に途切れ途切れの不完全なものしか顕れず、すぐに消えてしまった。逆に、魔法を放った二人の方が突然蒼白になってその場にしゃがみ込んでしまう。

だが、マリクたちの攻撃はアベルにわずかな時間を与え、その間に彼は砂の上を引きずるようにしてカインを連れ戻すことに成功したのだった。

「わかったか。お前たちでは、このわしに指一本触れることはできないのだ」

ガーネフが哄笑する。

「ひとまず後退しろ」

マルスは、一時退却の命令を出すことしかできなかった。兵たちが恐慌をきたさないように、なるべく整然とゆっくり後退していく。それを見て、ガーネフの後ろにいた魔道兵たちがじりじりと前進してきた。

「ふっ、ちと遊びが過ぎたか……」

微かに額に汗を浮かべながらガーネフがつぶやいた。それは、決して砂漠の暑さのせいではない。

「ガーネフ様、ラーマン神殿での儀式の用意ができました」

「そうか」

側近らしき暗黒司祭が、ガーネフに近づいて告げた。

「ジオルは、かねてからの予定通りに。これで、メリクルソードの行方は、しばらくは解放軍にはわからないでしょう。それから……」
暗黒司祭は、ガーネフに顔を近づけて耳打ちした。
「敵の天馬騎士どもが、カダイン神殿を奇襲して制圧したもようです」
「マケドニアの姫か、兄に負けず油断がならないな。構わん、もうカダインに利用価値はない。ラーマンによった後、テーベへ戻るぞ」
「反乱軍はよろしいのですか？」
不満そうに暗黒司祭が聞き返した。
「今はまだいい。奴らには、まだやってもらうことがある」
そう言うと、ガーネフは宙にかき消えるようにしてその姿を消した。
ガーネフが早々と撤退したことなど知らない解放軍は、魔道兵たちの攻撃を受けながら厳しい後退を続けていた。恐怖心が先走り、戦いにならなかったのだ。かろうじて、予備戦力としてシーダに預けておいたオグマの傭兵部隊が前進してきて壊滅をまぬがれるという状態であった。
だが、そこへカダイン神殿を落としたミネルバの白騎士団が戻ってきた。
直接ガーネフと対峙（たいじ）していなかったことが幸いし、ミネルバの部隊とオグマの部隊はマルスの部隊に代わって獅子奮迅の活躍を見せた。
やがて敵の中にガーネフの姿がないことを知ると、マルスの部隊の兵たちも士気を取り戻

し、砂漠での戦いはかろうじて解放軍の勝利に終わったのだった。

3

カダインを解放したマルスたちは、時間を惜しみながらも傷を癒すことに専念しなければならなかった。
ガーネフによって囚われていた多くの魔道士たちが解放され、シスターたちによって負傷者の治療が行なわれた。シーダはレナやマリアを連れて、病院と化した修道院を精力的に回った。身よりのない子供たちの名を一人一人訊ね、リストにまとめて保管する。戦後に家族が見つかるかもしれないからだ。女性たちは、今現在の戦いよりもその後のことを考えていたのだった。
暗黒の徒と化した魔道士や司祭たちを一掃したカダインは、再び活気と敬虔(けいけん)さを取り戻した。だが、すでに多くの者がガーネフによって命を落としてもいたのである。
「まだ今しばらくは、戻ることはできん。マリクも同様だ。なので、留守の間は、お前に任せたいと思う」
ウェンデルは、エルレーンという名の若者を呼び出して言った。マリクとともに、ウェンデルの誇る弟子の一人であった。
「ぜひ、私も先生と一緒にお連れください」

ウェンデルの意に反して、エルレーンが解放軍への同行を願い出た。
「マリクをカダインに残せばいいではありませんか。私は先生のお役に立ちたいのです」
エルレーンが、強い調子で繰り返した。昔からマリクと一番弟子を争い、ことあるごとにライバル意識をむき出しにしてきた悪い癖が、今ここでも頭をもたげたのだ。ウェンデルはべつだんどちらを贔屓（ひいき）したという意識はなかったが、エルレーンの方はそう感じてはいなかった。アリティアの貴族として将来を嘱望（しょくぼう）されていたマリクと、一庶民から苦労して魔法学院に入学した自分とでは、何もかもが違うと思い込んでいたのだ。
「それはできん。マリクはアリティアの貴族として、マルス王子に同行せねばならないからだ」
「では、先生もカダインにお残りください。カダイン魔法学院の再建は、先生のお力がなければ成し遂げられません」
「駄々をこねるでない。これはもう決めたことじゃ。それとも、わしの言うことが聞けないと言うのであれば、誰か他の者に任せるとしよう。ヨーデルを呼んで参れ」
さすがに声を大きくすると、ウェンデルはエルレーンに言った。
「いえ、先生の言葉にお従いいたします」
その言葉にエルレーンはそれまでの態度を翻（ひるがえ）すと、承諾の印に深く一礼した。
「頼んだぞ。わしもすべてが終われば、すぐにここへ戻ってくる。そうじゃ、あの二人は元気でおるか」

「先生が地下牢から助け出したあの兄弟ですね。修道院で無事にかくまわれているはずです。マリクがカダインを去った後に私たちが囚われるまでは、無事を確認しております」
エルレーンは、マリクの名前にこころもち力を込めながら答えた。事実、ウェンデルの一派が全員無条件に囚われたきっかけは、マリクを始めとする幾人かの魔道士がカダインを脱出したためでもあったのだ。
「そうか。では、後でわしが確認しにいこう。ユミナとユベロと申したか……、どこの子供かは知らないが、わしが見つけたときは食事もさせてもらえずに死にかけておったからな」
そう言うと、ウェンデルはエルレーンの前から去っていった。

4

カダインで思わぬ足止めをくっていた解放軍であったが、帝国軍の方も足並みがそろっていたとは言い難かった。病床にあったグルニア国王ルイは、黒騎士団の指揮官としてのカミュの復職を帝国に打診していた。だが、帝国はなかなかそれを承知せず、ルイが一時的にカミュの召還を断念するまで、黒騎士団はグルニアに足止めされていたのだった。
そのような事情を知らないマルスたちは、軍の再編成が終了すると急いで進軍を開始した。アカネイアからの援軍を待った方がいいという意見もあったが、大軍同士の激突で祖国が荒らされるのを嫌がったマルスは、敵が少数のうちにアリティアを奪回するつもりであった。

カダインでガーネフの恐怖にさらされた兵たちも、今度はグルニア兵たちが相手、それも祖国奪回の戦いとあって、士気をパレス奪回のとき以上に高めていた。

その勢いを維持したまま、マルスは全軍を力強く進軍させた。不思議と、まだ敵の攻撃はない。おそらくは、兵が分散するのを恐れて、充分に引きつけて籠城戦を挑もうというのであろう。黒騎士団の到着を待っているとすれば、それは戦力が戦を左右する決定的な量に達していないということだ。ならば、マルスとしても進軍を急いだ価値はあった。互角、ないしは敵を超える戦力で戦えば、充分に勝機はある。また、祖国での戦いということで、解放軍にはせ参じてくる義勇兵も多かった。

「マルス殿下、お会いでき、これほどの喜びはございません。私は、アランと申すもの。わけあって軍籍を離れておりましたが、祖国の危機を知り、戦える者を率いて村々を守っておりました」

最も大きな部隊を率いてはせ参じたアランという名の騎士が、解放軍参入の挨拶のためマルスに会いにきた。もともとはアリティア騎士団に所属していた騎士であったが、病気で身体を壊し、予備兵役として騎士団を離れていた男だ。その後は諸国を旅して病気の治療に専念していたのだが、祖国が帝国に占領されたと聞いて危険を顧みずに戻ってきたのだった。

「ありがとう、アラン。そして、国のみんなも。今少し苦労をかけるが、頑張ってくれ。必ずやアリティアから帝国を追い出し、平和な故郷を取り戻してみせる」

「ありがたきお言葉。皆に代わって礼を申し上げます。我らも、マルス殿下の下、命を懸け

て戦います」
アランが、そう誓いをたてて下がっていった。
新しく集まった兵たちは、ジェイガンが率いて軍の最後尾へと配備されていった。貴重な戦力であるとはいえ、前線に出して戦わせるには統制がとりにくかったせいだ。マルスの考えとしては、後方支援に徹しさせるつもりであった。だが、敵もおとなしくマルスたちの思惑通りにことを進めさせてくれるほど甘くはなかった。
「後方より敵襲です！」
「何、黒騎士団か」
突然の伝令としてやってきたカチュアの叫び声に、マルスのいた旗本隊は色めきだった。
「いえ、兵装は通常のグルニア騎士団にて、本国の増援部隊ではありません。私たちの知らない場所に伏兵を配していたもようです。すでに、後方部隊が交戦に入っております！」
マルスのそばに舞い降りると、カチュアが詳細を伝えた。
「アベル、後方の応援にいっててくれ。オグマとドーガは前方を。敵本隊が必ずくるはずだ」
マルスの命を受けて、アベルが騎馬隊を率いて後方へとむかう。
「待て、俺もいく」
「病み上がりはおとなしくしていろ。次はお前にも活躍させてやる」
カダインでの傷の癒えないカインをレナたちに押しつけると、アベルは後陣へと急いだ。
背後から襲ってきた敵部隊は、予想以上の大部隊であった。その中で、槍を振り回してア

ランが縦横無尽の戦いを繰り広げている。
「負傷した者は下がれ。後は、我ら騎士団が敵を倒す」
叫びながら、アベルたちは敵に突っ込んでいった。援軍の到着に、アランとジェイガンがほっと一息をつく。だが、アベルたちが加わっても、戦力バランス的には敵の方が物量で勝っていた。ほどなくして、前衛からも戦いの喧噪が聞こえてきた。マルスが予測した通り、前からも敵がやってきたのである。
「完全な挟み撃ちか。どこにこれだけの戦力を温存していたのだ」
してやられたとばかりに、ジェイガンが唸った。黒騎士団が到着した形跡がなかったため、これだけの兵力を帝国が有していたというのは、彼らにとって予想外であったのだ。
「少し前に、グラから多くの騎士が付近を通過したという報告がありました。おそらくは、通過したのではなく砦に身を潜めていたのでしょう」
「帝国は、はなからグラを見捨てて、アリティアに兵を集めていたわけか。ならば、グラ城にグルニア兵の姿がなかったのも納得できる」
アランの言葉に、ジェイガンは歯ぎしりした。今さら知っても遅すぎるのだ。
「ジェイガン殿、敵後方に、新たな部隊が見えます」
「何、黒騎士団が到着したのか」
カチュアの報告に、もしそうだとしたら最悪だとジェイガンは叫んだ。
「いえ、あれは……、オレルアン騎士団の旗です。アカネイアからの援軍です！」

嬉しそうに、カチュアが叫んだ。ハーディンが、騎士団を率いて先頭を切って駆けつけてくる。その後方からは、ジョルジュたち弓騎士団やミシュランたち歩兵が続いている。アカネイアからの援軍の到着で、形勢は一気に逆転した。解放軍を挟み撃ちにしようとした敵後方部隊が、逆に解放軍によって挟み撃ちにあうという状況に陥ったのだ。
優勢から一気に劣勢に陥った帝国軍の混乱は著しく、ハーディンの活躍もあって一気に戦線が瓦解した。
「ジョルジュ殿、後は任せたぞ。ジェイガン殿、遅くなってすまなかった。いざ、マルス殿の許へ！」
敗残兵の追討をジョルジュの率いる歩兵部隊に任せると、ハーディンはジェイガンたちを伴って前衛へとむかった。
敵騎馬隊と戦うマルスたちは善戦しており、タリスとワーレンの傭兵部隊を左右に展開させたまま、陣形を崩さずに戦線をささえていた。そこへ、オレルアンとアリティアの騎士団が戻ってくる。
「援軍だ。すでに、後方の敵は全滅したぞ！」
ハーディンにつき従うロシェが叫んだ。とたんに、敵軍に動揺が広がる。そのままマルスの部隊を追い越した騎士団は、敵軍の中央を楔を打ち込むように突き進んでいった。陣形を崩されて右往左往する敵軍に、左右からオグマとシーザの部隊が襲いかかった。慌てて防御態勢を敷こうとするところへ、ハーディンたちが舞い戻ってくる。結局、帝国軍は態勢を立

て直せないまま、解放軍の機動戦に翻弄されて敗退していった。

「助かりました、ハーディン殿」

新たな陣容を整えて進軍を開始しながら、マルスはハーディンに礼を述べた。

「いや、こちらこそ遅くなってすまなかった。グルニア軍の進軍が予定より遅く、敵を壊滅させるのに時間がかかってしまったのだ。だが、これで帝国には、アカネイアに進軍するだけの戦力はほとんどないはずだ。まだグルニアには黒騎士団、マケドニアには竜騎士団、ドルーアにはメディウスめが残っているが、即座に他国まで遠征するだけの余裕はなかろう。ゆえに、ニーナ様の御命令は、全軍でアリティアを解放し、そこを足がかりとしてグルニア、マケドニア、ドルーアへと解放軍を進めてほしいとのことだ」

「しかし、全軍を移動させては、パレスの守りが薄くはなりませんか」

マルスは、懸念を表明した。

「それは、ニーナ様もお覚悟の上だ。強い姫だよ、あの方は。ニーナ様が心配しておられるのは、アカネイアという王国のことだけではない、大陸全土のことを愁いておられるのだ。そのためには、ドルーア帝国を倒すこと。大陸に平和が戻るのであれば、アカネイア王国はドルーア帝国と差し違えても本望だというお考えだ。その後は、我らに託すとまでおっしゃられた」

「帝国の目をパレスにむけさせて、僕たちへの注意を逸らす……。自ら囮になろうとしていらっしゃるのですか」

その通りだと、ハーディンがうなずいた。
「だからといって、絶対に危険であるとも言えぬ。当然マケドニアのミシェイルなどはパレス急襲も考えるではあろう。だが、そんなことをすれば、留守の間にマケドニア本国を我らに攻撃されることもわかっているはずだ。奴が稀な戦略家なれば、今さらパレスを落とすことは考えまい。メディウスならば、アカネイア王家の断絶を再び目論むかもしれぬが、今や帝国は誰が自分たちにとって最大の脅威であるか知っているからな。ニーナ様を狙う可能性は低いだろう」
ハーディンが、マルスを見つめて言った。その視線に、マルスはあらためて自分の持つファイアーエムブレムを見た。
「アリティア城正門が見えました！」
先頭を進んでいたジェイガンの部隊から、伝令の騎士がマルスたちのところにやってきて告げた。
「さあ、いよいよだな。オレルアン城奪回のときに受けた恩を、十二分に返してさしあげよう」
ハーディンは、そう言うと先陣に戻っていった。
「義理堅いお人だな」
幾度にも渡る戦いの中で培われてきた信頼を込めて、マルスは言った。
「アリティア騎士団は、オレルアン騎士団とともに城を包囲。傭兵隊は、東の砦を攻略。側

面の敵軍を排除するんだ」
マルスは新たな命令を下すと、アリティア城へとむかった。
アリティアは多数の島で構成される国土のため、規模は様々だが各島に一つ以上の砦を擁している。初戦のように砦から伏兵を繰り出されて挟撃されたのではたまらない。当然の処置として、マルスはアリティア城のある島付近の砦を潰して万全を期した。アカネイア軍が加わったことによって、戦力が倍加したからこそ取れる策であった。
「ここは、捕虜収容所のようだな」
東の砦に攻め込んだオグマが、中の構造を見て言った。
「捕虜を解放して、マルス王子に合流するぞ、急げ」
オグマはバーツたちに命じると、速攻で砦を落とさせた。牢番程度の少ない敵兵は、彼らの敵ではない。おそらくは、すでに城の守備として兵力を集中させた後なのであろう。
「開けるぜ」
ジュリアンが、密かに扉の鍵を外しながら言った。ナバールが扉のむこうに敵の気配を感じると言うので、用心の上に突入しようとしているのだ。
こくりと、ナバールが無言でうなずいた。身を低くしたジュリアンが、扉を勢いよく蹴り開けた。同時に中に飛び込んだナバールが、瞬時に敵の位置と行動を見てとった。出会い頭に大上段から振り下ろしてくる敵傭兵の剣を右手の剣で受け流すと、ナバールが左手の剣を突き入れた。腹を突かれた傭兵が、剣を抜いて体勢を立て直そうと後退る。そこを一歩踏み

込んだナバールが、下段から斬り上げた右の剣でとどめを刺した。
「へえー、強いな、あんた」
突然拍手する音が聞こえ、牢の中の青年がナバールに声をかけた。不満げにそちらを見たナバールが、ジュリアンを顎で促す。
「へいへい、ここからは俺の仕事ですよ」
ジュリアンが中に入ってくると、素早く牢を開ける。
「やれやれ、助かった。モーゼスの奴にいきなり捕まったときは、どうしようかと思ったからなあ」
何とも軽い口調で、その若者は牢から出てきた。この一郭には、彼の他には囚われている人間はいないようである。
「何か、変わった奴だなあ。旅の人かい？」
「ああ、そうさ。俺のことは、チェイニーとでも呼んでくれ」
異国ふうの髪飾りをつけた若者は、なれなれしくジュリアンに名乗った。
「見たところアリティアの人間じゃなさそうだが、何で帝国に捕まってたんだい」
「ちょっとした特技があってね、モーゼスの奴が手を貸せって言いよってきたわけだ。当然素っ気なくしたら、こんなところに入れられちまった。まったく、災難だぜ」
「特技ねえ……」
飄々と言うチェイニーの言葉を、ジュリアンが話半分に聞き流した。

「二人とも、集合の合図だ。予定通り、砦の外で集まって、本隊に戻るぞ」
ナバールが、ジュリアンたちを急かした。
「あんたたち、城を攻める気かい。だったら、気をつけた方がいい。城を牛耳っているモーゼスという奴は、たちの悪いマムクートだ。しかも、魔竜族ときている。迂闊に突っ込むと、怪我するぜ。よければ、俺も連れていけよ。牢に入れられた礼は、きっちりと返さないとな。あんたたちの大将に力を貸してやるよ」
たいそうな口を叩くと、チェイニーが落ちていた傭兵の剣を拾ってナバールの後に続いた。
「何か、気持ちだけもらっておくのがよさそうだな」
情報だけありがたくもらっておこうという態度をあからさまにしながら、ジュリアンが二人の後を追った。
建物の一番奥にまで入り込んだ彼らが外へと急ごうとすると、突然帝国兵たちが行く手に立ちふさがった。慌てて立ち止まると、背後からも別の兵士たちがやってくる。
「どこに隠れてやがったんだ、こいつらは。よっぽど、あんたを逃がしたくないようだな」
ジュリアンが悪態をついた。
「しかたないさ。やっつけるしかないだろう」
そう言うと、チェイニーが身体の前で手を横に振った。その動きに合わせて、彼の前に薄い光の壁が現われる。その間に、ナバールは前方から迫る敵を迎え撃ちにいった。その動きに合わせるかのように、チェイニーが光の壁を通り抜ける。光を通り抜けて再び現われたそ

の姿は、ナバールと寸分違わないものであった。
「何だ何だ、いったいどうなってるんだ」
慌てふためくジュリアンを後目に、ナバールの姿に変身したチェイニーが、本人そっくりの華麗な剣技で敵を倒していく。
「へへっ、これが俺の特技ってやつなのさ」
敵をすべて倒して、元の姿に戻ったチェイニーが言った。ナバールの姿形が光の粒子と化して崩れ、光が飛び散った後には元の姿のチェイニーが立っていたのである。
「それはいいが、今度姿を変えるときは、別の者にするのだな」
こちらも敵を片づけたナバールが、切っ先をチェイニーの眼前に突きつけて言った。
「わかったよ。さあ、あんたらの大将のところへ急ごうぜ」
チェイニーは両手を胸の前に掲げて降参すると、二人を促した。

5

「だめです、カインさん。まだ完治していないんですよ」
マリアが、馬にまたがったカインの脚を両手で押さえながら言った。
「祖国での戦いだというのに、これ以上寝てなどはいられないんだ。すまん」
一言謝ると、カインはマリアを振り払って走り去った。

「誰か、あの人を止めてください」
「わかりました、僕がいきます」
マリアの叫びに、あろうことかマリクが応えた。彼は、先のカダインでの戦いにおいて、カイン同様、リンダとともにガーネフに戦いを仕掛けて精神的なダメージを受けて寝込んでいたはずである。だが、彼もカインと同じようにじっとしてなどいられなかったのだ。まして、マリクはアリティア城陥落のときにその場にいなかったという負い目があった。
「リンダのことを頼みます。彼女はここから動かさないでください」
マリアに頼むと、マリクもまた戦場に姿を消していった。
最前線では、帝国の予想外の踏ん張りに戦線は一進一退を続けていた。アリティア城手前の砦に、帝国が部隊を集中させていたということもある。
二手に分かれた解放軍は、オレルアン騎士団とアカネイア騎士団が砦を包囲する間に、アリティア騎士団が砦を迂回して城へとむかった。だが、待ち受けていたホルスタット将軍の重装騎士団によって城への突入を阻まれたのだった。何度かの突撃が敢行されるが、正門前の橋に陣取った敵の壁を突破することは果たされないでいた。
マルスは白騎士団を砦から城の攻略に呼びよせると、天馬騎士と連携して波状攻撃を仕掛けた。さすがに敵の陣形が崩れ、奥で指揮を執っていたホルスタットの姿が見えるようになる。
「今度こそ通してもらうぞ！」

が逸（はや）ったのか、いつもの彼らしからぬ強引な突撃であった。
「カミュ殿が戻るまで、この城を明け渡すわけにはいかないのだよ」
ホルスタットが、キラーランスを突き出した。的確な攻撃に、アベルが馬首を逸（そ）らした。そのまま突っ込んでいっては、串刺しにされてしまうだろう。だが、そのわずかな動作が、攻撃の遅れへとつながる。ホルスタットの槍がアベルの馬を貫いたとき、アベルの槍はまだ敵の身体に達してはいなかった。馬が後ろ立ちとなり、アベルの槍はホルスタットの兜（かぶと）を弾き飛ばすに終わった。初老を迎えたホルスタットの瞳が、倒れていく馬から放り出されるアベルの姿を見つめる。そのまま馬の下敷きにならなかったのは、彼の運の良さであっただろう。
「ここまでだな！」
ホルスタットが、アベルめがけて槍を振り上げた。
「アベル！」
上空にいたパオラが、慌てて急降下する。その視界の中を、一騎の騎士が駆け抜けていった。
投げつけられた手槍が、ホルスタットの肩にあたった。狙いが逸れ、アベルをかすめるようにしてホルスタットの槍が橋に突き刺さる。その槍の柄に頰をこすりつけるように立ち上がりながら、アベルは腰に下げた銀の象眼のある剣を抜き放った。突き出された剣先が、か

ろうじてホルスタットの喉を捉える。そこへ、槍を構えたカインが突っ込んできた。槍の一撃に、ホルスタットが後ろに弾かれるようにして倒れた。同時に、反動を受けたカインが、アベルの上に落下してきた。
「大丈夫か、カイン。無茶をしやがって……」
　間一髪、親友を受け止めると、アベルは剣を構えた。生き残っている敵兵が、二人に迫ってくる。
「二人とも。早く逃げて」
　一瞬遅れて駆けつけたパオラが、敵を牽制する。彼女とほとんど間をおかずに、ミネルバたちとジェイガンたちもその場に現われた。敵将を討った勢いを借りて、一気に攻勢に出る。
「アラン、カインとアベルを頼む。ドーガ、オグマ、一気に突入するぞ！」
　遅れて歩兵を引き連れてやってきたマルスが叫んだ。敵の防衛線を突破して、城内へなだれ込んでいく。
「王子、これを」
　オグマが、マルスに剣を手渡した。アカネイア城で手に入れ、そのままもらってしまった竜殺しの剣だ。
「へえ、竜の牙か、それなら魔竜だって斬れるな」
　オグマについてきているチェイニーが、剣を見て言った。
「本当に、あの日アリティアに現われた竜が、玉座にいるんだな」

マルスは、オグマが連れてきた奇妙な若者にあらためて訊ねた。アリティアが陥落した日、敵の竜を見たのはジェイガンだけだ。マルスたち若者は声を聞いたに過ぎない。だが、それだけに、多くの人々を殺しただろうマムクートがまだ王宮に居座っているというのであれば、それを許すことはできなかった。まして、敵は、マルスの母の仇でもあるのだ。
「モーゼスっていう魔竜族のじいさんだ。老いぼれだが、侮ると手痛い目に遭うから気をつけた方がいい」
臆することなく、チェイニーがマルスに答えた。
王宮に突入すると、通路のそれぞれから敵兵がやってきた。
「シーザ、オグマ、集まってくる敵を頼む。ドーガ、僕たちは玉座にむかうぞ！」
マルスは傭兵部隊に敵の足止めを頼むと、アリティアの騎士たちを連れて玉座へとむかった。
「お手並み拝見かな」
どさくさに紛れるようにして、チェイニーがマルスたちの後に続く。
ドーガを先頭に、マルスたちは道を切り開いていった。決して快進撃というわけではない。だが、確実に敵を押し返し、玉座のある広間へと突入する。たちまち、広間を戦場とした戦いが始まる。だが、周囲で激しい戦いが巻き起こっても、玉座に座ったモーゼスはふてぶてしいほどの態度で落ち着き払っていた。
そこへ、マリクを伴ったアストリアとミディアが現われた。砦を完全に包囲したハーディ

ンは、あえて敵を殲滅させずに完全に封じ込める策をとったのであった。砦に突入するのであればそれなりの兵力を必要とするが、閉じこめるだけならばオレルアン騎士団だけで充分であった。もちろん完全な包囲は不可能であるが、それもまた策であった。包囲の隙間を縫って敵が討って出てくれば、野戦に長けたオレルアン騎士団の格好の獲物となる。そうでなければ、敵の戦力は城の防御には参加できない無駄な戦力と成り下がるのだ。そうやって余力を作り出したハーディンは、アカネイア騎士団を城内へとさしむけたのであった。城さえ落ちれば、砦の敵は降伏するしかない。あえて徹底抗戦を望むのであれば、全軍をもって一気に殲滅させるだけであった。

そんなアカネイア軍の移動に、マリクは追いついたのであった。城の内庭で王宮に入ろうとする敵兵と戦いを繰り広げているジェイガンたちの合間を抜けて、彼らは頼もしい援軍として現われたのである。

「マルス王子、敵兵は我らに任せて、あなた方は敵将を」

隣により添うミディアと、息のあった連携で敵を倒しながら、アストリアが叫んだ。まさに一心同体といった二人に死角はない。互いの背を安心して任せあえる二人は、敵兵を切り崩して玉座への道を切り開いた。

「小賢しい小僧だ。よかろう。その身体、わしの牙で噛み砕いてやろう」

モーゼスが、黒い竜石を掲げて立ち上がった。その姿が石から吹き出す黒き霧につつまれ、巨大な魔竜へと変化する。

『マルスという人間は、貴様か！』
魔竜となったモーゼスが、広間を轟かす大音声で言った。
「僕がマルスだ！」
マルスは、剣を掲げて叫んだ。巨大な魔竜に対して、一歩もたじろがない。
『隠れていればよいものを。お前の母リーザのように我が手にかかるか、それとも姉エリスのようにガーネフにくれてやるか。いいや面倒だ、我が漆黒の炎で焼き尽くしてくれよう』
モーゼスが、正面のマルスにむかって口を開こうとした。
「おい、本物のマルスはこっちだぜ、間抜けな魔竜のじいさんよ！」
突然、左側面から声をかけられて、モーゼスが振り返った。そこには、チェイニーの変身したもう一人のマルスが立っていた。
『忌々しきアンリの子孫が二人だと？』
瞬間、モーゼスはどちらを攻撃すべきか迷った。
「白き貴婦人よ、冷たき御手(みて)は荒ぶる者の魂を鎮める。吹き荒れよ、氷雪の嵐！」
モーゼスの一瞬のすきをついて、マリクの放ったブリザードが彼を襲った。
『この程度の……冷……気で……』
言いかけたモーゼスが、全身を凍らせて動きを止めた。
「僕だって、昨日までのままではないさ。マルス様、今です！」
肩で息するマリクが、そう叫んでその場にしゃがみ込んだ。

雄叫(おたけ)びをあげて、マルスがモーゼスに突進していった。動けない魔竜の凍った胸に剣を突き立てた。魔竜の凍った身体に、竜殺しの剣が突き刺さった場所から罅(ひび)が全身へと広がっていく。断末魔の咆哮をあげようとしたモーゼスの顎が、砕けて氷の破片となって飛び散った。落ちてくる破片を避けて、マルスは後ろへと下がった。

粉々になって崩れる魔竜の姿に、帝国の兵士たちが戦意を喪失する。我先にと逃げ出す帝国兵たちは、もはやマルスたちの敵ではなかった。

6

「スター・ロード!? 僕が……。でも、まだ僕は正式な即位すらしていないというのに」

モロドフのもたらした知らせに、マルスは少し困惑した。スター・ロードというのは、アリティアでの国王に対する尊称だ。王のみが持つことを許される宝剣ファルシオンが鞘から抜き放たれるとき、王の許には星々が集まり、その輝きで敵を討つという言い伝えからついた名前であった。

星を統(す)べる王……。

マルス自身は、その輝きを見たことはない。父であるコーネリアスは人前でファルシオンを抜くようなことはしなかったし、星の光は悪しき者と戦う勇者が人の力ではかなわぬときに神々から遣わされると聞いていたからだ。

「ファルシオンもなく、未だ王でもない僕をスター・ロードと呼ぶのはまずいのではないか」

資格もないうちにそのような称号を名乗っては、歴代の国王に対して申し訳がたたないとマルスは心の中で思った。まして、姉のエリスはガーネフに囚われたまま、城の宝物庫なども荒らされ、オームの杖などのアリティア王家の秘宝は持ち去られてしまっている。

「そのようなことはございません。スター・ロードとは、誰からも王と認められる者のみが呼ばれる尊称なのです。決して自らが名乗るものではありません。まして、ファルシオンを持つ者がそう呼ばれるというのは大きな間違いですぞ。スター・ロードだからこそ、ファルシオンの真の力を引き出し、星をその身に呼ぶことができるのです」

やんわりと、モロドフがマルスの言葉を否定した。

「だとすれば、なおさらその名は辞退させてくれ。確かにアリティアは解放された。だが、それは僕だけの力じゃない、アリティア騎士団のみんな、シーダを始めとするタリスの戦士たち、シーザたちワーレンの傭兵団、ハーディン侯のオレルアン騎士団、ミネルバ王女の白騎士団、マムクートであるバヌトゥ、ニーナ様のアカネイア騎士団……。数え上げればきりがない。これまでの勝利は、じい、あなたを含めてみんなのおかげだ。それを……」

「まだお気づきになられませぬか。あなたがすでに星々を集めることのできる存在であるということを。だからこそ、ニーナ姫は王子にファイアーエムブレムを託されたのです」

穏やかな微笑みを浮かべながら、モロドフがその場にひざまずいた。そして、深々と臣下

の礼をとる。

「さあ、人々が待っております。皆にそのお姿をお見せになってくださいませ、我らが星の王(アワー・スター・ロード)」

促されて、マルスは城のバルコニーへとむかった。三層からなる王宮の二階には、かなり大きな謁見用のバルコニーがある。そこにマルスが立つと、人々の歓声が響き渡った。アリティア中から集まった民衆が、城の前に集まっていたのだ。そこは、地面が見えぬほどに人々で埋め尽くされていた。

「マルス様！」

「星の王、ばんざーい！」

「勇者の御帰還を祝して！」

口々に人々がマルスにむかって叫ぶ。その圧倒的な熱狂は、大きな波となってマルスを押しつつんだ。

「彼らは、あなたを自分たちの王として認めているのです。ここにいるすべては、アリティアの民、そして、あなたは彼らの王となられるお方なのです」

「ここにいるみんなの王となる……」

モロドフに言われて、マルスは人々を見回した。

「ねえ、今こちらをご覧になったわ」

マルスの顔の動きを見て、少女が自分だけのためにそうされたと言わんばかりに喜んだ。

「決めた。私、騎士団に入る」
「そんな。よし、セシルがそうするって言うのなら、僕も騎士になる」
「おい、お前たちだけでずるいぞ。セシルやロディよりも、このルーク様が先だい」
突然の少女の言葉に、隣にいた少年が口を合わせた。
後ろから二人の首に腕を回して押さえながら、もう一人の少年が言った。
彼らのように、人々はマルスのためなら何でも力になろうと決めていた。
「ここにいる人々が、僕の力になってくれる。そして、彼らこそ、僕が守るべきもの……」
マルスはつぶやいた。パレス解放のときも似たような場面に遭遇したが、あのときと今ではまったく別の感じがした。人々の心は、すべてマルス一人にむけられているのである。
「その通りです。彼らが称えてくれたスター・ロードの名に恥じぬお方におなりください、マルス様。さあ、お言葉を」
「わかった。じい、いや、モロドフ伯」
モロドフに答えると、マルスは人々にむかって言葉を発した。

第4章　暗黒竜と光の剣

1

「スター・ロード・マルスか……。ずいぶんとたいそうなこったなあ。じいさんのことだ、この状況も利用するんだろう。ほっときゃいいものを。なあ、バヌトゥ」
アリティア城の屋上に寝ころびながら、チェイニーはそばにじっと立っているバヌトゥの姿を見上げた。バヌトゥは黙して語らない。
「心配すんなって。チキは、俺も捜してやるさ。アンリの末裔もこうして見つかったんだ、すぐに見つかるさ。まあ、ガーネフのやることだ、だいたいの目星はついてるんだろうけどさ。なあ」
最後の言葉を星空にむかって言うと、チェイニーは立ち上がって大きく両腕を広げた。
アリティアを取り戻してから数日後の夜、マルスは懐かしい自分の部屋でまどろみ始めていた。夢と現（うつつ）の間を意識がゆっくりとゆききしていく。そんな夢ともつかぬ風景の中に、豪華な長衣（ローブ）を纏（まと）った一人の老人の姿が浮かび上がった。

『――マルス王子よ』
「誰だ！」
老人に声をかけられて、マルスは寝たまま誰何した。身体は動かず、何よりも目をつぶったままで老人の姿を見ていることから、これは夢の類であるらしい。
『我が名はガトー』
老人の声が、遠く近くで聞こえた。白い髯をたたえた老人の表情は穏やかであったが、一分のすきもない。
「あなたは、大賢者ガトー様ですか」
以前ウェンデルやマリクから聞いたことのある名だと思い出して、マルスは老人に訊ねた。
いかにもと老人がうなずく。
『そなたに助言を与えよう。かつてミロアとともにわしの弟子であったガーネフは、闇よりマフーの魔法を作り出し、それとファルシオンをもってドルーア帝国を我が物にできると考えておるのじゃ。元弟子ながら愚かなこと。そして、看過することもできぬ。テーベの遺跡に潜むガーネフを倒したいのであれば、光の宝玉と星の宝玉を探し出し、マケドニアにいるわしの許へ持って参れ。さすれば、ガーネフのマフーを破る唯一の魔法、スターライト・エクスプロージョンを授けよう』
「その二つの宝玉は、いったいどこにあるのですか」
思いがけない言葉に、マルスは少し急くように訊ねた。実際に目のあたりにしたガーネフ

のマフーの魔法。それを破る力が手に入るのであれば、カダインでの二の舞は避けられる。
『グルニアの北の地にあるラーマン神殿に奉納されておる。おそらく、チキという少女もそこにおるだろう』
「グルニア……、マケドニア……。僕たちもいずれドルーア帝国を目指して進軍するつもりでした。ラーマン神殿はその行程の途中にあります。わかりました。その宝玉によってガーネフを倒す魔法が手に入るのであれば、喜んで賢者様の許へ持って参ります」
いずれにしろ、ガーネフは避けては通れない敵であった。グルニアとマケドニアも、ドルーア帝国に攻め込むためには、先に戦って勝たねばならない相手だ。
実際には、ここ数日間のマルスは迷っていた。
帝国に占領された国々はすべて解放された。これ以上戦火を拡大して、グルニアやマケドニアを滅ぼすなり占領する意味があるのだろうか。マルスの脳裏には、グラの姿が焼きついていたのだ。結局、グルニアとマケドニアもドルーア帝国に利用されているに過ぎないのではないかという思いが消えないのである。敵国を滅ぼしたところで、それは人間同士の消耗戦でしかないのかもしれない。それこそ、マムクートであるメディウスの思惑であるのかもしれないのだ。
弱気ともとれる思いの裏には、ガーネフとメディウスの存在への恐怖もあった。マフーを破る方法がなければ、ガーネフを倒すことはできない。それはまた、ファルシオンを取り戻せないということを意味し、メディウスに対抗する力を取り戻せないということでもあった

のだ。メディウスを倒さない限り、帝国は何度でも蘇るだろう。それならば、むやみに帝国に攻め込んでも兵を無意味に死なせるだけになってしまうのではないのか。それゆえにマルスは躊躇していたのだった。

だが、勝機があるのであれば、話は違ってくる。確実にメディウスを倒せる可能性があるのであれば、アカネイア大陸の命運をかけて帝国と戦う意味もある。

『うむ。待っておるぞ』

「ガトー様……」

まどろみの闇の中に姿を消し始めたガトーを、マルスは呼び止めた。

『何じゃ』

「ありがとうございます」

マルスの言葉に、ガトーは微笑みながら姿を消していった。

2

「マルス王子は、いつまでここにとどまるつもりなのだ。これ以上動かぬと言うのであれば、オレルアン騎士団とアカネイア騎士団だけでもグルニアに攻め込むぞ」

「まあまあ、落ち着きなされ、ハーディン殿。アリティアはマルス殿の国、それに、グルニア本国に攻め込むのであればそれなりの準備も必要じゃろう」

朝からしびれを切らすハーディンに、ウェンデルがやんわりと水をさした。
「ニーナ様のことが気がかりなのはわかるが、我らは一枚岩でなければならぬのだ。敵を軽視して単独行動をとれば、今度はわしらが帝国にやられてしまうことになりかねん。くれぐれも、軽はずみなことはなさらぬように」
再度釘を刺されて、ハーディンが軽く鼻を鳴らした。彼としては、グルニアに一刻も早く攻め込みたくてしようがなかったのだ。それが、草原の民の気性であるのか、戦士としてのハーディンの勇猛さの表われであるのか、あるいは……、それはウェンデルにもわからなかった。
「――それで、カダインでは修道院の子供たちを見て回っていたんです」
「シーダらしいね」
扉のむこうから、微かに声が近づいてくる。ハーディンたちは、押し開かれる扉の方に目をむけた。
「おはようございます、ハーディン殿、ウェンデル司祭殿」
遅めの朝食を終えたマルスが、シーダを伴って現われた。
「じきにミネルバ殿たちもやってきます」
「では、いよいよなのだな」
ハーディンが、嬉しそうに訊ねた。
「ええ。グルニア攻めの軍議を開きましょう」

はっきりとした口調で、マルスは言った。

三日後に、万全の準備を整えた解放軍はアリティアを出撃した。

補給線の整備と部隊の再編成はアリティア城奪回の直後からハーディンやウェンデルの手で着実に行なわれていたため、異例とも言える早さの出撃であった。ボア司祭の手配したアカネイアからの補給物資到着を待たなければ、もっと早くなっていたかもしれない。騎馬隊を中心とするオレルアン騎士団にとってはそれが普通であったかもしれないが、歩兵を中心とするアカネイア騎士団や各傭兵隊にとってはやっと連戦の疲れがとれた程度にしか休んでいなかった。それでも、兵士たちはマルスとともにいけることを喜び、不平一つ言わなかったのである。

そんな状況を鑑(かんが)みて、マルスは比較的ゆっくりと大軍を進めていった。わざと解放軍の全容を帝国軍に見せ、その威容で敵を威嚇するためである。

この策は、グルニアを動揺させるのに充分であった。遅い進行スピードは、必要以上に解放軍を大軍と思わせたのだ。

初期に援軍としてアリティアへむかっていたスターロン将軍率いる黒騎士団は、アリティア陥落の報を受けていったん後退していた。アリティア守備隊との共同作戦により、敵の挟撃が本来の作戦であったからだ。いかに敵が疲弊しているとはいえ、橋の多いアリティアの地形では騎馬ではその機動力を生かし切れず不利であった。そのため、グルニア王ルイの命

令によって、黒騎士団はカシミア島まで下がってそこに陣を張ったのである。カシミア大橋という大陸と島を結ぶ巨大な橋があるその場所は、守るには最適の場所であるとも言えた。桟橋を有する砦を北の大陸側に持ち、南に位置する島側にも多くの砦を有している。北の砦で敵を迎え撃ちつつ、橋を渡ってくる敵は島に入るところで波状攻撃をかけて個別撃破することができる。

このグルニアの作戦は、一見すると地の利を生かした当然のものに見えた。だが、その実は、国王ルイの弱気から出た消極策の表われであったのだ。もともと身体の弱かったルイは、実際の戦いはカミュを始めとする各将軍たちに任せていた。だが、最も頼りにしていたカミュが帝国によって更迭され、統制を失ったグルニア軍は解放軍によって各個撃破されていったのである。次第に追いつめられていく恐怖感に、心労の増したルイはついに倒れてしまった。病の床に伏したルイは援軍を要請するが帝国に認められず、かろうじてカミュの現場復帰だけを約束させたのだった。そのため、黒騎士団の最大の目的は、敵を足止して指揮官であるカミュの到着まで時間を稼ぐことであったのだ。

解放軍とグルニア軍の水面下の駆け引きは、静かに、そして激しく行なわれた。結果、初期の解放軍の進軍の遅さはグルニア軍に味方したように思えた。だが、必要以上に防衛線を固めて動かなくなったグルニア軍のおかげで、解放軍は安全に補給部隊を進めることができたのだ。解放軍としては、黒騎士団が機動力を武器にカダイン西南部の草原で攻撃を仕掛けてくることを最も恐れていたのである。偵察を受け持った白騎士団からの報告を受けた解放

軍は、オレルアン騎士団とアリティア騎士団とからなる機動部隊を本隊から先行させた。安全が確保できたとわかった時点で、電撃戦に切り替えたのである。この時点で、グルニア軍の時間的優位は早くも崩れだしていった。
北の砦との戦闘が始まると、マルスは補給部隊を残して本隊を戦場へ急行させた。確実に敵軍が攻勢に出られないのを確信して総攻撃に移ったのだ。
もしこのとき、カミュが黒騎士団に到着していたら事態は変わっていたかもしれない。海路を使って少数精鋭の攻撃部隊を解放軍の背後に送り、解放軍の補給部隊を潰してしまえば大軍の維持は難しくなる。度重なる戦闘のため、解放軍としてもすぐに同等の補給物資、特に食料を送り出すことは不可能であろう。その上で、カシミア大橋に防衛線を敷けば解放軍は撤退するしかなくなる。それを追撃して戦力を削いでいけば、解放軍と帝国軍の戦力差は帝国に傾くはずであった。
かように、指揮官次第で、軍の戦闘力は大幅に違ってくる。だが、不幸なことにそのときカミュはまだマケドニアを越えたところであった。
一気に北の砦を歩兵で包囲した解放軍は、カシミア大橋にむけて騎士団を進軍させた。先鋒をかって出たハーディンが、麾下の騎士団とともに橋を渡っていく。得たりと、黒騎士団が対岸で待ちかまえた。そこへ、ハーディンたちが突っ込んでいく。
「我は、オレルアン騎士団が長、ハーディンなり。黒騎士カミュはおるか。いざ、堂々と立ち合われよ！」

怒濤の勢いで敵騎士団の前衛を打ち倒すと、ハーディンが大音声で敵に名乗りをあげた。
だが、カミュはその場にいないため、出てこようはずもない。
「臆したか。かくも黒騎士団とは腑抜けの集まりよ。戦うにも値せぬわ。戻るぞ、皆の者」
大声で敵騎士団をあざ笑うと、ハーディンの部隊は馬首を返して大橋を戻り始めた。ウルフたち弓馬兵がそれを援護する。
「おのれ、我が騎士団を愚弄するか！」
プライドの高い黒騎士団の騎士たちは激怒し、まんまとハーディンの誘いに乗ったのだった。
橋も砕けよという勢いで、黒騎士団の半数近くが怒りに燃えてオレルアン騎士団を追ってくる。大橋の中継点にあたる中州にまで黒騎士団が達したときであろうか、旗本隊の中からジュリアンが鏑矢を放った。鏃に笛を仕込んだ矢が、大きな音を立てて飛んでいく。それを合図にして、上空に広がる雲の中からミネルバの率いる白騎士団が忽然と現われた。
翼から白い雲を引きながら、天馬の一軍が黒騎士団めがけて急降下していく。動きのとれない橋の上の黒騎士たちは、自由な空を舞う白騎士たちの投げる手槍に次々に打ち倒されていった。一撃離脱で上空に戻ったミネルバたちは、上昇の頂点で静止した飛竜や天馬の身体を傾け、再び敵に急降下攻撃を仕掛けた。二度の攻撃で隊列も何もなくなった敵騎士団に、満を持してオレルアン騎士団が襲いかかった。立ちはだかる敵騎士を橋から追い落とし、一気に対岸に攻め込む。そこに後陣としてアリティア騎士団が、上空からは白騎士団が続いた。

戦力の過半数を失い、予定の陣形を維持できなくなった黒騎士団は、三つの騎士団の攻撃を受けて総崩れとなった。
「よし、橋を確保するんだ」
ジェイガンが、アランやアベルに指示した。ほどなく、北の砦を落としたマルスたちが隊列を組んでカシミア大橋を渡ってきた。

3

黒騎士団の追討とグルニア本国へ進む準備をハーディンやモロドフたちに頼むと、マルスは少数の精鋭を率いて東にあるラーマン神殿へとむかった。全軍を動かす必要はないと判断してのことであった。
ラーマン神殿は、ナーガ神を祀った神殿であった。ナーガ神話において、神が地上に遣わした巨人神である。人々はそれに感謝してこの神殿を建てたとされている。かつては神官らしき人物がいたとの記録もあるが、ここ数百年は無人のままである。そのため、盗賊による供物(くもつ)の盗難が頻繁にあるという。だが、そのたびに信仰の厚い人々が、盗賊から取り返した供物を再び奉納にきているのだと言われている。その言い伝えが再び盗賊たちを呼びよせ、悪循環を引き起こしていた。
そして、最近のラーマン神殿には、恐ろしい魔物が住み着いたという噂がある。だが、一

部の盗賊たちは、それは自分たちを遠ざけるためのデマだと考えて信じようとはしなかった。
盗賊たちの間では、ラーマン神殿で至宝を手に入れた者は王にさえなれるという根拠のない言い伝えが信じられていたのだ。それゆえだろうか、ラーマン神殿は人間の醜い欲望を引きよせる場所となっていた。
「考えようによっちゃ、僕たちも盗賊だな」
ラーマン神殿を目の前にして、マルスは思わず苦笑した。
「まあ。ガトーとかいう賢者に宝物を見せて魔法をもらったら、後で返しにくればいいじゃないですか。それで今まで通りですよ」
ジュリアンが、気休めのように言った。そのようにしてラーマン神殿の供物は完全に失われることなく存在し続けていたのだ。恩恵を享受した後は返せばいいことだとほとんどの者は思っていた。
「へへっ、お宝、お宝っと」
勝手についてきたリカードが、足取りも軽く鼻歌交じりに言った。その後ろを、バヌトゥが無言でついてくる。ガトーの言った、チキも神殿にいるだろうという言葉を信じてついてきたのだ。
他には、マリクと、オグマとナバールを始めとする傭兵たちが同行していた。
「さあ、神殿の中に入ろう」
マルスが促し、シーザとラディが神殿の扉を開けた。とたんに、何かの咆哮が中から聞こ

えてきた。全員が一斉に身構えるが、声だけで何も出てくる気配はない。
「何だったんだろう、今のは」
慌ててジュリアンの陰に隠れたリカードが、おそるおそるみんなに訊ねた。
「チキじゃ」
バヌトゥだけが、リカードの問いに答える。
「チキって何者なんだい」
リカードが問い返した。
「チキは、神竜族の最後の生き残りの一人。次代の神竜族の女王となられる運命の少女じゃ」
「少女って、あんな声で鳴く奴が少女であるわけないじゃないか」
冗談はよせとばかりに、リカードがバヌトゥに言い返した。
「その少女もマムクートなんだね。その子は、僕たちに危害を加えたりしないのかい」
マルスは、バヌトゥに訊ねた。
「わからぬ。本来なら、チキは優しい子じゃ。だが、あの子をさらっていったガーネフが、邪悪な技で邪(よこしま)な暗示をかけていることも考えられる。先ほどの声は、激しい怒りと敵意に満ちておったからの。チキは、決してあのような声をあげる子ではなかった」
「だとすると、やっかいですね。おそらく竜の姿になっているだろうその子と、戦わないで光と星のオーブを持ち出すことは難しいでしょう。かといって、僕たちが戦えば、それはガーネフの思惑通りでしょうから、面白くはありません」

マリクが、難しい顔で言った。
「その通り。ガーネフは、オーブを持ち出せないように、チキを神殿の番人として利用したのじゃ。おお、かわいそうに」
「何か方法はないのか。そのチキとかいうマムクートがガーネフに操られているのであれば、暗示を解く方法があるだろう。それができなければ、戦って倒すか、竜の目を盗んでオーブを持ち出すかだ」
ここにいてもしようがないと、アストリアが一同を見回して言った。
「神竜は竜族の中でも最強の力を持つ種族。それは、火竜であるわしの何倍もの力じゃ。わしでは足下にも及ばぬ。当然、ここにいる全員で挑んでも無駄じゃろう。だが、一つだけ方法がある。光のオーブじゃ。あのオーブの力は、邪悪なすべての力を退けることができる。あれがあれば、ガーネフの呪縛を打ち破ることもできよう」
「ちょっと待ってよ。オーブを手に入れるには、竜をなんとかしなくちゃいけない。竜をなんとかするためには、オーブがいる。これって堂々巡りじゃないか」
バヌトゥの言葉に、勘弁してくれとリカードが叫んだ。
「馬鹿野郎。そのために俺たちがついてきてるんじゃないか」
ジュリアンが、軽くリカードの頭をこづいた。
「マルス様、チキとかいう竜の注意を引いてもらえますか。その間に、俺たちがオーブを探し出します」

「そんな、おいらまで……」
反論しようとするリカードを黙らせると、ジュリアンがマルスに決断を求めた。
「それしかないか。オグマ、ナバール、二人についていってくれ。神殿の中には、竜に追い立てられた盗賊たちがいるかもしれない。他の者たちは、僕と一緒にきてくれ。もし、竜がジュリアンたちの方へむかうようであったら、囮になって注意を逸らすんだ。くれぐれも、竜とまともに戦おうとはしないように。いざとなったら、逃げ出して態勢を立て直す。いいね」
マルスの言葉に、全員がうなずいた。それぞれが、それぞれの目的のために散っていく。
「とほほほほ……。何でこんな目に遭うんだろう」
他に聞こえないよう、ささやき声でリカードが言う。
ナバールが、低い声で言った。時間を節約するため、ジュリアンとリカードで手分けして探すことにしたのだ。
「愚痴はいい。さっさと探せ」
ラーマン神殿の内部は、一般に神殿と呼ばれるものとはかなり異なっていた。最深部にある祭壇の広間をのぞき、小部屋がいくつも整然とならんでいる。小部屋の中は一見すると倉庫のような造りになっており、全体が一つの宝物殿と言った方がしっくりくる構造であった。
実際に、ガトーの言う宝玉はこの神殿の供物であるのだから、神器などの神聖な物を納めるために建立（こんりゅう）されたと見てもいいだろう。だが、問題はその規模であった。
各小部屋には無数の棚があり、ごく小さな何かが整然と納められていたのではないかとい

う印象を与える。そもそも、誰がこの神殿を造り、誰が無数とも思えるどんな供物を納めていたのだろうか。供物と思われる物が一つも残ってはいない以上、それを推し量ることは難しかった。たまに何かがあれば、それは最近誰かが納めたらしい金品だけである。

「これかなあ。まあいいや、とっとこうっと」

緑色の拳大の玉を見つけて、リカードが言った。

「次にいくぞ」

ナバールが促す。戻ってきたリカードとともに次の小部屋を目指したとき、突然二人は盗賊の小集団と遭遇した。

問答無用で、ナバールが盗賊たちに剣をむける。だが、それが裏目に出た。驚いた盗賊たちが罵声をあげてかかってきた。すぐさまナバールが斬り倒すものの、神殿内に響き渡った戦いの声と音は、祭壇のある広間で寝ていたチキの注意を引くには充分であったのだ。

広間の床に伏すように寝ていた巨大な竜が鎌首をあげる。黄金色に輝くその神竜は、視線を神殿の中央にむけた。そのまま、のそりと動き始める。

「しかたない……」

それまで物陰に隠れて様子をうかがっていたマルスたちが、チキの視界に飛び出した。即座に、神竜が目標を変える。

ファイアーエムブレムを構えるマルスの蒼い瞳と、神竜であるチキの翡翠色の瞳が出合う。神竜が、何かを思い出すかのように小首をかしげた。わずかな間があり、チキが大きく口を

開いてブレスを吐こうとした。その仕草を見極めて、直前でそれを避けようとマルスが身構える。だが、チキの行動が、途中から単なる咆哮に変わる。
振り返ったチキが、自分の尻尾に竜殺しの剣を浅く突き立てているオグマを睨んだ。
「マルス王子、オーブだ！」
オグマの陰から飛び出したジュリアンが、マルスにむかって光り輝く宝玉を投げた。とっさに剣を投げ捨て、マルスがそれを受け取る。
「バヌトゥ！」
マルスは、光のオーブを素早く背後にいたバヌトゥに投げ渡した。
宝玉を受け取ったバヌトゥが、前に進み出ながら竜石を掲げる。マルスたちは、その変身に巻き込まれないように慌てて後ろに下がった。
突如現われた火竜に、神竜がオグマにかまうのをやめて振り返る。敵意と怒りをむき出しにしたチキは、大きく顎を開いた。
『チキ、わしじゃ、バヌトゥじゃ』
怯みもせずに、バヌトゥがこもった声で言った。口に、光のオーブをくわえていたからだ。
『バ……ヌ……トゥ……!?』
チキが、バヌトゥの名を口にした。さらに一歩バヌトゥが前に出る。
光のオーブが輝きを増した。その光を受けて、チキの身体が金色に美しく輝く。神竜をつつんだ金色の光が、ゆっくりと小さくなっていった。そして、光につつまれた少女がマルス

たちの前に現われた。それを見て、バヌトゥも、元のマムクートの姿に戻る。
「バヌトゥのおじいちゃん……」
「おお、チキや。正気に戻ったか」
とことこと走りよってだきついてくるチキに、バヌトゥが感慨深く言った。
「この子が、チキなのかい」
先ほどまでの猛々しい神竜の姿と、現在目の前にいるあどけない少女の姿との差に戸惑いながらマルスはバヌトゥに訊ねた。オグマを始めとする他の者たちも、マルスと同じ思いであった。
「うん、そうだよ。おにいちゃん」
バヌトゥが答えるよりも早く、あっけらかんとチキが答える。そして、彼女はマルスの前に駆けよった。
「おにいちゃんは？」
「僕かい。僕はマルスと言うんだ」
素朴なチキの質問につられて、マルスは微笑みながら答えていた。その笑顔は、チキをいたく安心させたようである。
「じゃ、マルスおにいちゃんだね」
そう言ってだきついてくるチキに、さすがにマルスも少し困った顔になる。
「どうやら、その子はマルス王子にお任せした方がいいようですな」

オグマが、マルスに近づいてきながら言った。そして、懐から透明な宝玉を取り出してマルスに渡す。
「ジュリアンが見つけた物です。宝玉の中ではいくつもの小さな輝点が光を放っていた。たぶん、星のオーブかと」
それを見て、バヌトゥとリカードも集まってきた。
「じゃ、これは違うのかなあ。もしいらないんなら、俺にちょうだいよ、マルス様」
リカードが、緑色の宝玉を取り出して言った。
「それは、大地のオーブじゃな。大地をゆるがすほどの力を持ち、周りの人々に勇気を与える至宝じゃよ。それは、この光のオーブとともにマルス王子が持っておられるのがよかろう」
バヌトゥが、マルスに光のオーブを手渡しながら言った。
「それは、僕が預かっておくよ、リカード」
「ちぇっ。まあいいや、いろいろ他にも見つけたし」
悪戯っぽく舌を出すと、リカードが微笑みながら手を差し出すマルスに大地のオーブを手渡した。
「さあ、目的の物は手に入れた。早く本隊に戻ろう」
マルスはみんなを促すと、ラーマン神殿を後にした。チキは、マルスの腕に自分の腕を絡めたまま彼についてきた。たまに、ちょっと痛そうにお尻をさすりながら……。
本隊に戻り着くまでにチキの言うことには、彼女はペラティでバヌトゥと離れ離れになった後、ガーネフに捕まってしまったのだと言う。その後カダインを経てラーマン神殿に連れ

てこられた彼女は、ガーネフの持つ漆黒の宝玉によって何度も暗示をかけられたのだった。
「おそらく、ガーネフは大賢者ガトー様がスターライトの魔法を創り出すことを予見していたのではないでしょうか」
マリクが、マルスに私見を述べた。
「魔道書というものは、自然界に存在する魔力を魔文字に組み直して書物に写し取ることで作り出されます。そのときには、魔力を秘めた品物が触媒として使われるのですが、僕の持つエクスカリバーやリンダの持つオーラなどは、強力な力を持つ宝玉から作り出されたとウェンデル先生からお聞きしました。ガーネフもそのことを知っていたからこそ、チキさんを宝玉の番人としてここにおいたのではないでしょうか。普通に戦ったのでは、バヌトゥさんを上回る力を持つというチキさんには勝てないでしょうから。ただ、一つだけわからないのは、なぜガーネフ本人が宝玉を持ち去らなかったのかということです。ファルシオンのように奴自らが宝玉を持っていったならば、僕たちに勝ち目はなかったでしょうに……」
マリクの疑問ももっともであった。わざわざチキに暗示をかけて宝玉を守らせるよりは、ガーネフ自身が宝玉を持っている方が確実なはずであった。
「おそらく、奴にはそうできない何かがあったのだろう。いずれにしろ、宝玉が手に入ったのは幸運だったよ。これでマケドニアにいるというガトー様に宝玉をお渡しすれば、ガーネフと戦える力が手に入るんだ」
「はい。スターライトの魔道書が手に入った暁(あかつき)には、僕がそれでガーネフを倒してみせます。

僕たちの手でガーネフを倒し、奴に連れ去られたエリス様を一緒にお救いしましょう」
「もちろんだとも」
マルスとマリクは、そう固く誓いあった。

4

マルスたちが帰還し、解放軍はいよいよ本格的にグルニアに侵攻していった。悲報が対するグルニアは、帰国したカミュを総大将に迎えて迎撃態勢を整えつつあった。グルニア国王ルイが崩御したのだ。もともと身体が弱く、そのせいで気の弱いところのあったルイだが、解放軍の接近による心労に耐えきれず、衰弱して命を縮めたのだった。

度重なる援軍の要請に、マケドニアとドルーアが応えなかったということも、ルイの絶望を深めた要因の一つにあげられる。もともとドルーアと連合したマケドニアに同盟か開戦かを迫られ、表面上はカミュの進言を入れるというかたちで同盟に合意した彼であった。その実状は、帝国を単に恐れただけのことである。その帝国に見捨てられたという思いは、自らの選択が間違っていたのではないかという悔恨となって彼の心を苦しめたのだ。

実質的な指導者を失ったグルニアであったが、それで解放軍に全面降伏するというわけにはいかなかった。なぜなら、王位継承者であるルイの子供、ユミナとユベルという双子の姉

弟が帝国に人質として囚われていたからだ。ルイは帝国と同盟を結ぶにあたって、裏切らない証として自らの子供たちを人質として差し出したのだった。兄妹の確執を理由にマリア王女を人質として帝国の名の下に自軍で幽閉していた狡猾(こうかつ)なマケドニアとは違い、グルニアが最初から帝国の属国扱いであった証拠でもある。
「ドルーアはまだしも、ミシェイルが我らを見捨てたとは信じたくないな。だが、これも運命ならば、私は祖国グルニアに殉ずるのみ。将軍はいかがなされるつもりかな」
カミュは、ロレンス将軍を前にして訊ねた。かつて傭兵としてタリスからこのグルニアにやってきたロレンスを、将軍として迎えるようにルイに進言したのはカミュであった。
「将軍は生粋のグルニア人ではない。無理にここで命を落とすことはないと思うが」
「いや、御心配は無用……と思っていただきたい」
ロレンスが、静かに答えた。まだ若く輝く金髪とともに精悍な顔立ちと洞察力に満ちた優しくも鋭い目をしたカミュとくらべて、白髪と白い髭に被われたロレンスは、老練なという言葉が一番似合う男であった。
「王女と王子が存命であるならば、その命を守るために解放軍と戦うのみ」
「国よりも、人か。貴公らしい」
ロレンスの言葉に、カミュは苦笑いを浮かべた。
「国は滅んでも、王位を継ぐ者が残っていれば再興できるではありませぬか。アリティアやアカネイアのように」

「アカネイアか……」
グルニアは、長い間アカネイアから属国のような扱いを受けてきた。グルニアが力をつけて、第二のドルーア帝国となることをアカネイアが恐れたためだ。グルニアから見れば、不条理なことであった。ならば、本当にアカネイアの脅威となってやろうと思うのも無理からぬことだ。
だが、結局はドルーアに併合されるに近いかたちとなり、アカネイアがドルーアにすげ替わっただけであった。むしろ、異なる文化を持つドルーアの方が、アカネイアよりもやっかいだと言える。
すべては、マルスが蜂起したときから、カミュとミシェイルの描いた筋書きは狂ってしまっていた。前線に出ていたグルニア軍とマケドニア軍は、今やドルーア本国の戦力を下回るほどに弱体化していたのだ。
「マケドニアが動けぬ以上、手持ちの戦力でなんとかするしかあるまい」
カミュは、あえて動かないとは言わなかった。
「では、わしは城の裏手の守りを固めるとしよう。経過はどうであれ、よき結果となるように戦うのみ」
そう言って、ロレンスがカミュの前から立ち去った。
「経過はどうであれか……。望むべき結果をうるためには、人は愚かであり続けなければならぬときもあるということか」

カミュは、腰に佩いたメリクルソードの柄に手をやると、地下牢にむかって歩き出した。

5

満足な守備兵もいないオルベルン城を落とした解放軍は、いよいよグルニア本城への攻撃を前に充分な休息をとっていた。
城の外では春雷が鳴り響き、激しい雨が降っている。
「ロレンス将軍？」
マルスは、シーダに聞き返した。
「ええ。父の古い友人です」
マルスの肩越しに窓の外の嵐を眺めながら、シーダが言った。
「しばらく前にグルニアに身をよせて、将軍として迎えられたと聞いています。私が解放軍にいると知れば、あるいは……」
「それは難しいだろう」
シーダの希望的観測に、マルスは難色を示した。
「でも、このまま戦って命を落とすのは愚かなことです。私の目から見ても、グルニアに勝機などありません。私は、意味もなく人々が死んでいくのは辛いのです」
「シーダ……」

マルスは、声を荒げるシーダをそっとだきしめた。
「誰だって、好きで命のやりとりをするわけではないさ。でも、彼らにも意地も誇りもあるだろう。それを捨て去ってくれればいいのだが、それほど簡単なことではないのさ」
「馬鹿だわ」
マルスの胸に顔を押しつけながら、シーダがつぶやいた。
「ああ、馬鹿だ。だから、こんな馬鹿なことは早く終わらせよう。戦いを長引かせて多くの人が死ぬよりも、なるべく少ない戦いで終わりにしよう。カミュを倒すなり捕虜にできれば、敵は降伏するかもしれない。そのとき、ロレンス将軍の説得は君に任せる」
「はい、マルス様……」
シーダが、マルスの胸から顔を上げた。瞬間視界に入った窓の外に、彼女は何か白いものを見つけて目を凝らした。
「マルス様、あれを」
シーダに顔をよせかけたマルスは、その声に後ろを振り返った。
「ペガサスだわ。誰が乗っているのかしら」
マルスと一緒に窓に駆けよると、シーダが確信をもって言った。遠く嘶き（いなな）も聞こえ、白い影はどんどんと近づいてくる。
「高いな。城の屋上に降りるつもりだろう」
「いってみましょう」

二人は部屋を飛び出すと、階段を駆け上がっていった。
激しく雨が降る屋上にたどり着くと、そこにはパオラとカチュアの二人の天馬騎士が先にきて空を見つめていた。
二人に気づいたパオラが、少し驚いたように言った。
「マルス王子、シーダ王女も」
「マルス王子……」
姉の声に振り返ったカチュアが、よりそうシーダの姿を見て視線を空に戻した。
「あれは誰なんだい」
マルスは、訊ねた。
「たぶん……」
「ねえさまー！」
振り返らずにカチュアが答えかけたとき、雨の中を飛んでくる天馬騎士の方が大声をあげた。
「やっぱり。エスト！」
雨粒を弾き飛ばしながら屋上に降りるペガサスに、カチュアが駆けよっていった。飛び降りてくる妹のエストを、しっかりとだきとめる。
「マルス様、妹のエストです」
あらためて、パオラがマルスに紹介した。

「エスト、マルス様の前ですよ。どうやってここにきたのかちゃんと説明しなさい」
パオラが、カチュアの腕の中で飛び跳ねて喜んでいる妹にむかって言った。声は淡々とした口調だが、その目元は嬉しさに緩んでいる。
「メリクルソードを探してグルニアにいって、そしたら捕まっちゃって、でも、カミュって人がなぜだか逃がしてくれて、そのとき一緒にメリクルソードももらっちゃって……」
「少し落ち着いてしゃべらないか。何を言ってるのか、さっぱりわからんぞ」
その声を聞いて、パオラとカチュアが一礼した。エストも、大慌てでミネルバに頭を下げる。
「皆、びしょ濡れではないか。風邪を引かないうちに中に入ろう。さあ、マルス王子も」
ミネルバは一同を促すと、さっとマントを翻してエストの上に被せた。そのまま、ねぎらうように彼女の肩をだいて城の中へとむかった。

6

「メリクルソードを私に!?」
エストの持ってきた剣を手渡されたアストリアは、最初困惑の表情を隠せなかった。
「これは、アカネイアの至宝。ですから、アカネイアの方が持っているのが自然でしょう」
マルスは、アストリアとともに呼んだミディアとジョルジュの顔を確認をとるように見回

してから言った。そのジョルジュは、ニーナから正式に貸し出されたもう一つの至宝であるパルティアを所持している。
「けれど、私は傭兵の身分……」
「最終的にはニーナ様の許可をいただかねばならないけれど。僕は、あなたがこれを持っていることが一番ふさわしいと考えている」
マルスはアストリアの言葉を途中でさえぎると、メリクルソードを彼の前に差し出した。
だが、アカネイアの貴族の出であるミディアやジョルジュと自分をくらべ、アストリアは躊躇せずにいられなかった。
「アストリア……」
いただきなさいと、ミディアが促す。彼が至宝を持つということが、彼女にとってとても嬉しいことなのだと目で語る。アストリアは、静かにうなずいた。
「お預かりさせていただきます」
メリクルソードを手にとって、アストリアが深々と一礼した。

翌日は、昨日までの雨が嘘のように晴れ渡っていた。まだ地面はぬかるみ、川も増水しているが、雨の中で戦うよりは条件はいい。
マルスは部隊を四隊に分けると、グルニア城に進軍していった。シーダと傭兵部隊から構成される歩兵部隊は、東から城下町沿いに迂回して城の裏側へとむかった。アカネイア騎士

団とアリティア騎士団の歩兵を率いたマルスは、南部の砦を攻略して城への援軍を断ち、さらに川沿いに北上しながら城を目指す。残るアリティア騎士団の騎士とオレルアン騎士団は、城の南に展開した敵騎士団主力にむかっていった。白騎士団は遊撃隊として、敵砲台の排除後に自由に攻撃するように配置した。

兵力で敵を凌駕（りょうが）しているからこその布陣である。

全軍が完全包囲されることを嫌って砦に戦力を分散させたグルニア軍であったが、それは裏目に出てしまった。一丸となって力押しでくるだろう解放軍を四方からゲリラ的に攪乱（かくらん）するつもりであったのだが、マルスが兵を分散させたために、戦力の再集結が果たせずに逆に各個撃破の憂き目にあったのである。

「まずは砲台を破壊しろ。空を制すれば、敵の布陣も意味をなくす」

ハーディンが部下たちを鼓舞した。いつになく、戦いに力がこもっている。

天馬騎士たちの唯一の脅威である弩が排除されれば、後は彼らの独壇場であった。

「カチュア、エスト。久しぶりにそろった私たちの力をミネルバ様にお見せするわよ」

「はい」

パオラに声をかけられて、妹たちが声を合わせて答えた。

城の前衛部隊を指揮していたのは、カシミア大橋の戦いをかろうじて生き延びたスターロン将軍であった。名誉挽回とばかりに部下たちを指揮するスターロンにむかって、三騎のペガサスが降下していった。大きな螺旋（らせん）を描きながら、敵を取り囲む。周回する三騎のどれが

攻撃してくるのかと、黒騎士が身構えた。包囲の輪が狭まると同時にペガサス三姉妹のスピードも上がっていく。

「おのれ」

じれたスターロンが、馬を動かした。三姉妹は、一気に彼に近づくと、大きく翼を羽ばたかせて垂直に上昇した。強い風と舞い踊る白い羽根に視界をさえぎられて黒騎士の動きが止まる。その瞬間、上空に上がった三姉妹が一斉に反転した。急降下の勢いを載せて槍を放つ。直後に散開した三姉妹が水平飛行から、再び上空へと戻った。その一糸乱れぬ動きは、下向きに咲いた百合の花のようだ。後には、正確な狙いで投げられた槍に身体を貫かれた敵の姿だけが残っていた。

「あいかわらず、いい動きをする。さあ、敵の指揮官は倒した。敵を分断し、地上の騎士たちと連携して殲滅(せんめつ)せよ」

三姉妹が自分たちでトライアングルアタックと名づけた同時攻撃の華麗な技を鑑賞した後、ミネルバが白騎士団に一斉攻撃を命令した。

統制を失った黒騎士団は、あっけなく瓦解していった。もともと、本来の黒騎士団はカシミア大橋の戦いでほぼ全滅している。現在城を守っている黒騎士団は、隊長格の何人かをのぞいては、ほとんどが新兵であった。

敵主力騎士団を撃退したハーディンたちは、その勢いを借りて城へとむかった。

同じころ、南の砦を攻略したマルスは、多くの捕虜の管理をアストリアたちアカネイア騎

士団に頼み、ドーガたち直属の騎士を連れて川沿いに城を目指していた。
「そうか、我が騎士団もここにいる者たちですべてか……」
迫りくる解放軍を見て、カミュがつぶやいた。
「討って出るぞ。座して待つなど、我らの流儀にあわん！」
カミュは、少数の手勢を率いて城から出撃した。残る者たちには、自分たちが敗れたら降伏するようにと言い残していく。
たちまちに、オレルアン騎士団と最後の黒騎士団との激しい戦闘が始まった。さすがにカミュ麾下の精鋭たちは、少数とはいえ勇猛果敢であった。
「カミュか、その首もらい受ける！」
カミュの姿を見つけたハーディンが、槍を手に突っ込んでくる。
「ハーディン侯か、久しいな」
アカネイアの神器である聖槍グラディウスで軽くハーディンの突撃をいなしながら、カミュが言った。
「ニーナ姫は、御健勝か」
「当然だ。後のことは、我らに任されよ」
「そうか。それはよかった」
戦いながら、カミュは微かに微笑んだ。彼がパレスから逃がしたニーナが、運良くすぐにオレルアン騎士団に保護されたことは知っている。その後アカネイアを取り返したと聞いて

はいたが、詳しい情報はそれ以後伝わってはこない。だが、ハーディンの言葉で、カミュの最後の心配も晴れた。
「じきにマルス王子の部隊もやってくる。もはや、貴様に残された道はない」
ハーディンが言い切る。その言葉に、カミュの表情がわずかに動いた。
「マルス王子か。どのような男か、一度見極めておきたいものだ……。ベルフ、ライデン、ロベルト、ここを頼んだぞ！」
そう叫ぶなり、カミュは馬を走らせた。
「臆したか、カミュ！」
後を追おうとするハーディンの前に、カミュの部下たちが立ちふさがる。
カミュは敵陣を駆け抜けると、マルスの部隊を目指した。そのころ、マルスたちは川に架かる橋にたどり着いたところであった。分散した兵を補うように、上空には白騎士団が護衛として随行している。
「マルス殿はいずれか」
橋の対岸に陣取って、カミュが呼ばわった。
「僕がマルスだ」
臆することなく、マルスは進み出た。
大軍が一気に渡れないように、橋は馬一頭が渡れるほどの幅と強度しか持っていない。二人の間をさえぎるものは何もなかった。

微かに時が止まる。人々の声がやみ、静寂の中でカミュとマルスが視線を戦わせた。橋の下を流れる川の激しい水音が再び時を呼び戻し、人々を動かす。

「黒騎士カミュ殿……」

「いざ！」

　穏やかに声をかけてくるマルスに、カミュが気迫を込めて答えた。グラディウスを構える。それを見て、マルスは剣を構えた。カミュが軽く馬の横腹を蹴る。カンという蹄の一蹴りの後、白馬が走り出した。

「お下がりください、殿下」

　ドーガが、マルスの前に飛び出して橋の上に立ちふさがった。カミュの持つ槍が、ただの槍ではないことを一瞬にして感じとったからだ。

「どけ！」

　自らマルスの盾となったドーガに、カミュがグラディウスの一撃をみまった。疾風にも似た波動が聖槍の周囲に巻き起こり、槍の動きとともに前方に放たれた。その衝撃に、重鎧を着たドーガがあっけなく後ろへと吹っ飛ばされる。

「ドーガ！」

　マルスをジュリアンとカシムたちに頼んで後退させたゴードンが、倒れたまま動かない同僚の許に駆けよる。鎧は砕けて出血もあるが、まだ息はあった。

　だが、さすがのカミュも、ドーガによって一度立ち止まることを余儀なくされた。その彼

の周りに白い羽根が舞う。わずかに、カミュが目を細めた。
「カチュア、エスト！」
反転急降下に移りながら、パオラが妹たちにタイミングを促した。
「あの人だ」
見上げるカミュの顔を見たエストがつぶやいた。思わず槍の狙いを外した彼女は、姉たちよりも早いタイミングで槍を投げてしまった。白馬をかすめるようにして槍が橋に突き刺さった、激しく白馬が動いて橋を踏みならして倒れた。そこへ、狙いのはずれたパオラたちの槍が橋に突き刺さる。橋に突き刺さる槍と馬の倒れる衝撃によって、橋が壊れた。水に落ちまいとカミュがグラディウスを橋桁に突き刺してつかまろうとしたが、彼の愛馬が彼を道ずれにして濁流に引きずり込んだ。飛び散る木の破片とともにカミュの姿が濁流の中に呑まれて消える。
「追いますか」
あっという間に下流に運ばれていく白馬の姿を見て、パオラがマルスにうかがいをたてた。ひっくり返って流されていく馬の四肢は見えたが、カミュの姿は水中にあるのかまるで見えなかった。軽装とはいえ鎧を着込んでいたのでは、濁流から逃れる術はなかったのだろう。
「いや。この流れでは……。それに、助かったとしても、彼にはもう戻る場所はない。さあ、グルニア城を落とすぞ」
騎兵がいなかったのを幸いに、マルスは白騎士団の力を借りて部隊の多くを対岸へと渡し

ていった。

7

城の裏手へむかったシーダの部隊は、ロレンス将軍の守備隊と距離を保ちながら対峙していた。シーダが無用な戦いを避けたせいもあるが、ロレンス側も討って出る余裕がないため守備に徹しなければならないという事情があった。いたずらに戦端が開かれなかったのは、シーダとロレンスがよく部隊を押さえたからに他ならない。それだけ、二人は兵たちに信頼されていたということである。

膠着状態が続いた後に、一騎の天馬騎士が彼らの頭上に現われた。

「敵将カミュ殿は、見事な最期を遂げられた。これ以上の闘いは無用である、グルニア軍は剣をおかれよ」

矢で狙撃されることを恐れずに、カチュアが堂々と触れながら人々の上を飛び回る。

グルニア軍に動揺が走った。だが、すぐにロレンスが静める。

それを見て、シーダは護衛も連れずに両軍の中央までペガサスで進み出た。愛馬を降りると、ロレンスと対峙する。

ロレンスの横にいたグルニア軍の射手が、矢の狙いをシーダに定める。

「手出しは無用」

ロレンスはその矢を下げさせると、全軍にむかって命令した。
「タリスのシーダと申します。将軍、もはや戦いは終わりました。剣を収めてはいただけませんか」
戦場によく通る声でシーダが言った。
「シーダ姫か。立派になられたものだ……。だが、それはできん。今我らが引けば、グルニアの世継ぎであるユベロ様とユミナ様の命がないのだ。ガーネフの手によって、帝国への人質として連れ去られている。我らが死すとも、殿下たちには生きていただかねば困る」
「ユミナ……、ユベロ……？」
シーダは、ロレンスが口にした名に聞き覚えがあった。カダインを解放した後、ウェンデルが子供たちを避難させた修道院にいったときのことだ。帝国に人質となっていた各地の貴族の子供たちの中に、二人の名を見た記憶があった。
「カダインで、ガーネフが牢に入れていた子供たちは私たちが救い出しました。その中に、お二人の名もあります。御安心ください」
「本当か」
「我が父タリス王モスティンの名と、ロレンス殿との絆に誓って、偽りがないと保証いたします」
驚きを隠せないロレンスに、シーダは堂々とした態度できっぱりと保証した。ドルーア本国に連れ去られたと思っていたロレンスたちにとってカダインは意外であったが、ガーネフ

が自分の手許においたとするならば不思議なことではない。それに、ロレンスはかつてタリス統一のときに盟友であったタリス王の娘を疑うことはできなかった。
「カダインに使者を出せば、すぐにでも帰国がかないましょう」
シーダのその言葉に、ロレンスも覚悟を決めた。
「よろしい。御信頼いたしましょう」
ロレンスは進み出ると、自らの槍をシーダに手渡した。それに倣って、グルニア軍が武器を手放して地面におく。
はらはらしながら推移を見守っていたオグマは、やっと肩の力を抜いた。剣を鞘に収めた兵を前進させて敵兵を捕虜として拘束する。
そのころ、ハーディンと合流したマルスも、戦闘を中断させてグルニア軍を投降させることに成功していた。事前のカミュの命令もあり、ハーディンとは異なるマルスの穏やかな物腰を見たグルニア軍は、素直に彼の言葉に従っていった。戦いの興奮も冷めやらないハーディンはかなり不服そうであったが、そこで解放軍の和を乱すようなことはしなかった。
ここにグルニアは征服され、アカネイアの管理下におかれたのだった。

8

グルニアの監視役としては、負傷したドーガがしばらく残ることとなった。アカネイアか

ら将軍に昇格したトムスの部隊が到着するまでの暫定的な人事だ。
戦いで手に入った三種の神器の最後の一つであるグラディウスは、ミディアが辞退したために ドーガが一時預かることとなった。カミュとの一件を聞いたミディアが、ドーガが持つ方がふさわしいと言い出したからであった。ハーディンは、カミュから取り戻した槍などは必要もないとばかりに一顧だにしなかった。最終的には、ニーナの意志を携えたトムスがどちらが持つのか決めてくれるだろう。
進軍の足をゆるめずに、マルスたちはマケドニアにむかった。
アカネイア大陸南部に位置する最大の島にマケドニアはあった。アカネイア王国のある半島に匹敵する大きさの島には、南部にマケドニア王国、山脈に周囲を囲まれた北部中央にドルーア帝国がある。
船で島へと渡った解放軍は、ゆっくりとした足取りでマケドニアへと侵攻していった。気温の高いマケドニアは、国土のほとんどを密林と山に被われていたからである。唯一飛竜の棲む彼の地は、多くの兵士たちにとっては初めて体験する秘境でもあった。
西海岸から上陸して態勢を整えた解放軍は、山脈沿いに南下して島の南端を目指した。だが、そこには満を持して待ちかまえていたオーダイン将軍率いる竜騎士団の一部隊があった。
「ゴードン、私に師事したいと言うのであれば、その腕前をここで見せてもらおう」
アカネイア弓騎士団を従えたジョルジュが、アリティア騎士団の弓兵部隊を率いるゴードンに言った。多くの戦いで同じ戦場にいることの多かったゴードンは、すっかりジョルジュ

の弓の腕前に惚れ込んで、少し前から弟子入りを打診していたのだ。
マルスは斥候から敵の布陣を聞くと、素早く自軍の配置を定めた。森の中に弓兵隊を潜ませ、軽装の歩兵部隊を敵へと進ませた。白騎士団を弓兵隊の背後に固定し、騎馬隊は最後尾に下げさせた。
先発した歩兵隊は、当然空からの攻撃には無力であった。逃げ惑い慌てて退却する解放軍に、マケドニア軍は調子に乗って追撃を開始した。ある程度追撃したマケドニア竜騎士団は、森の上に展開する白騎士団を発見した。マケドニア軍内では、竜騎士団が筆頭であり、白騎士団はそれに次ぐものとして位置されている。まして、マケドニアから見ればミネルバたち白騎士団は反逆者であった。
「ちょうどよい。反乱軍など恐れるに足らず。反逆者どもを一掃して、我が国の汚名を雪(そそ)いでくれよう」
オーダインは、全軍に一斉攻撃を命じた。全速で突っ込んでくる竜騎士団に対して、白騎士団は大きく翼をはためかせてゆっくりとした速度で左右に分かれていった。
「愚かな。取り囲もうなど、愚策の極み」
オーダインは全軍を転進させ、螺旋を描きながら急速上昇させようと考えた。上空に昇り、反転急降下して左右から集まってきた白騎士団を上空から狙い撃ちにしようと考えたのだ。
緑の森の上で、白い天馬の群れと翠色(みどりいろ)の飛竜の群れが、美しい群舞を舞うかのように一糸乱れぬ流れを青い空に描いていく。

オーダインが上昇に移ろうとした瞬間、一条の炎が彼の騎竜に突き刺さった。
「何だと！」
叫びながら、オーダインが墜落していく。それを合図に、無数の矢が森から竜騎士めがけて襲いかかった。たちまち隊列が乱れ、上昇途中で竜騎士たちが四方に散開して逃げ出そうとする。
「撃ち方やめ」
ジョルジュが、全弓兵隊に命じた。半数以上の竜騎士が、彼らによって撃ち落とされている。不時着した敵には反転した歩兵部隊があたり、難を逃れて散り散りになった敵には白騎士団が整然と隊列を組んで襲いかかった。
「悪くない」
予想以上の戦果に、満足げにジョルジュがゴードンに言った。

9

「そうか、オーダインの部隊が全滅したか」
報告を受けたミシェイルは、そう言うと伝令を下がらせた。
つい先日、グルニアが解放軍を名乗るアカネイア連合軍の手に落ちたと聞いたばかりであった。急遽国境警備隊を増強したのだが、連合軍の侵攻はミシェイルのつかんだ情報よりも

早かった。このままでは、本土決戦は避けられないであろう。
「御老体には伝えておくべきか……」
ミシェイルは竜舎から騎竜を連れ出すと、一人で城下の外れにある館にむかった。王家の持つ別荘の一つだが、稀に来賓の随行員用に使われる程度のもので、国民にもその存在をほとんど知られてはいない場所だ。
ミシェイルは人目を避けて館に降り立つと、中へと入っていった。
突然の国王の来訪に、使用人たちが少し慌てながら出迎える。
「そろそろ参られるころだと思っておったよ」
ミシェイルが部屋に入ると、開口一番ガトーが言った。
「では、状況は私よりもよくお知りなのでしょうな」
多少皮肉混じりにミシェイルが訊ねると、ガトーは力強くうなずいた。
「では、一刻も早くここを離れられよ。じきにここも戦場となる」
「それはできん」
きっぱりとガトーは言った。
「今ここを離れては、ガーネフの野望を阻むことができなくなる。移動しながら場を保つことは難しいからの」
「それでは、しかたない。ここまで戦場が広がらないうちに、連合軍を撃退するようにはするが……」

「まだそんなことを申しておるのか、ミシェイルよ」
落胆したかのように、ガトーは大きく息を吐き出した。
「マルス王子と手を携えることはできぬのか。そなたやカミュの目的は、最終的にはマルス王子と同じではないか。ドルーア帝国を倒すためには、力を合わせる方が賢いのではないのかな」
「いや、我らとアリティアとでは、考え方に決定的な違いがある」
「アカネイア王国のことか……」
「アリティアやオレルアンのようなアカネイアの属国では、マケドニアやグルニアがアカネイアから受けてきた苦しみは知るまい。俺が滅ぼしたいのは、復活したドルーア帝国とともに、旧態依然としたアカネイア王国でもあるのだ」
表面的には友好を保ってきた大陸の各王国であったが、グラとアリティアが奥深きところで反発していたのと同様、アカネイア王国は常にマケドニアとグルニアの国力が大きくなることに警戒心をいだいていたのだ。それは、大陸の盟主国の命令というかたちで、何度も両国に苦汁を飲ませ続けていた。
「そして、そなたが大陸の覇者として名を馳せるか。愚かな考えじゃ。そもそも、アカネイアを滅ぼすためにドルーア帝国と手を結んだ時点で道を誤っておる」
「アカネイア侵攻に、後顧の憂いは残せなかったからな。それに、隷属させた蛮族や傭兵しか持たぬドルーアなど、光剣ファルシオンと三種の神器を手に入れた我らの前には脅威です

らない」

ミシェイルが、本心を口にした。ドルーアとの同盟によって、アカネイア王国を滅ぼし、周辺諸国を平定する。その後、返す刀でドルーア帝国を滅ぼして大陸を統一する。それが、ミシェイルの描いた筋書きであった。カミュは、その考えに賛同した唯一の盟友である。

「だが、ガーネフがファルシオンを奪っていきおった。だいたい、ドルーアの使者としてガーネフごときを信じたことが愚かだったようじゃの」

ガトーに言われるまでもなかった。

マルスたちの抵抗にあって計画は大きく狂ってしまった。しかも、ガーネフの暗躍によって、未だにメディウスに対抗する力を得られていないという状態だ。今では、マムクートたちを再集結させたドルーア帝国と、マケドニアの力関係は逆転してしまっていた。グルニアがマルスたちによって占領されるまで、情報封鎖をされていたのがいい証拠だ。結果としてカミュを見捨てるかたちになってしまい、マケドニアは完全に孤立してしまった。

「何とでも言われよ。父王を手にかけ、妹たちと袂を分かってまで手に入れた覇者への道。今さら、後戻りはできぬ」

「嘆かわしいことだ。覇者ならずんば、覇者への礎になるつもりかの」

ガトーの言葉に、ミシェイルは答えなかった。

「忠告はした。あとは御老体の好きにされよ」

そう言い残して、ミシェイルは城へと戻っていった。

マケドニア城では、すでに全竜騎士が戦闘準備を整えていた。ただし、ミネルバに味方する者や和平派の大臣などは幽閉されて除外されている。それに辺境警備の将軍の何人かは、様子見を決め込んで召還に応えない者もいた。今ここにいるのは、ミシェイル直属の部下たちだけである。だが、彼らこそはマケドニア軍の精鋭であるとも言えた。

「いよいよ、反乱軍どもがやってくる。恥ずべき反乱者のミネルバも一緒だ。今こそ竜騎士の勇猛さを奴らに思い知らせるべきときだ。我ら竜騎士の誇りにかけて、一兵たりとも生きてマケドニアの外に逃すな。我らこそ、この大陸の覇者となるべき勇者なのだ」

王家に代々伝わるアイオテの盾を掲げながら、ミシェイルは居並ぶ騎士たちを鼓舞した。おうと、一斉に騎士たちが応える。彼らの士気は少しも衰えてはいなかった。

「騎乗せよ。出撃する！」

ミシェイルは自ら飛竜に乗ると、先頭に立って蒼天へと舞い上がった。王の後に続いて、多数の竜騎士と天馬騎士が空に舞い上がる。オレルアン遠征軍の戦力を失ったとはいえ、温存されていた戦力は強大であった。

マケドニア軍が布陣を終えるころ、解放軍も彼らの視界に入ってきていた。先頭は騎馬隊、その後に弓兵隊、歩兵隊と続く。天馬騎士で構成される白騎士隊は先行しすぎないように歩兵隊の上に白い雲のように展開していた。

「敵弓兵が攻撃できぬよう、敵天馬騎士団と乱戦に持ち込み、これを撃破する。地上部隊は

城門を固め、敵騎馬隊を阻止せよ。空を制した後は敵歩兵を分断し、敵弓兵隊を地上戦で殲滅する。後は、総攻撃をもって残敵を掃討するだけだ。いくぞ！」
ミシェイルが各部隊に伝令を出し、ついに戦闘が開始された。
地上からの射撃をものともせず、天空を翔る騎士たちが疾風のごとく進んでいく。
「パオラ、全騎士に通達。今こそ、王位簒奪者（さんだつしゃ）を成敗する！」
ミシェイルを先頭に突撃してくる竜騎士たちを見て、ミネルバが叫んだ。
白騎士団の女騎士たちが少し高い声で雄々しく応え、たちまち激しい空中戦が始まった。
「まずいな、これでは迂闊に弓は撃てない。歩兵部隊は、弓兵隊と合流するんだ。騎馬隊は先行させて城を占領させよう」
乱戦に持ち込まれて各部隊の長所を封じられたと悟ったマルスは、守備陣形に切り替えるとともに城の攻略を急いだ。
弓兵との合流をさせじと、竜騎士の一隊がマルスたちの行方を阻む。だが、そんな敵を正確に射抜く炎の矢があった。
「ジョルジュか。奴ならではだな」
低空から突き出された竜騎士の槍をメリクルソードで真っ二つにしながら、アストリアがつぶやいた。白刃は、振るわれるたびに大気を切り裂いて露をほとばせる。冷ややかな刀身は、敵を斬っても曇り一つ浮かばなかった。
地上で、そして空中で、マケドニアの総力を結集した戦いが繰り広げられる。

「兄上、覚悟されよ」
白銀に輝く槍を構えながら、ミネルバが叫んだ。繰り出される槍を、ミシェイルが軽く受け流してすれ違う。
「この程度か。言うほどの力を見せてみるのだな。力無き者の言葉など、俺は耳を貸さぬ」
大音声でミシェイルが答えた。
「言うことは……それだけですか、兄上！」
互いに素早く反転すると、両者は再び槍を交えた。ミネルバの突き出す槍を、騎竜を横に回転（ロール）させながらミシェイルがアイオテの盾で弾いた。身体が開き、ミネルバがバランスを崩して騎竜ごと飛行が乱れる。ミネルバが体勢を立て直したと思ったとたん、ロールからすぐに反転してきたミシェイルが横にならんだ。
「何、速……」
驚くミネルバの右手を、ミシェイルが槍の柄で激しく打ち据えた。衝撃でミネルバが手放した槍が、くるくると回転しながら地上へと落ちていく。
「まだ！」
ミネルバは痛む手を無視して、予備の槍を鞍から外して手に持った。
「甘いな、ミネルバ。それでは、殺してくれと言っているようなものだ。未熟者は、おとなしく逃げるのだな」

再びミシェイルが正面からミネルバにむかってくる。
「私を未熟者と呼ぶか、兄上」
ミネルバは唇を噛みながら槍を構えた。先ほどから、彼女の攻撃はことごとく防がれてしまっている。それどころか、ミシェイルは彼女を弄ぶかのように手加減した攻撃しかしてこなかった。
やはり、兄は兄なのだ。
「私は、兄上を許さない。私は、超えてみせる！」
「その意気込みが、不相応だと言っているのだ。すべては俺に任せればいいのだ、ミネルバ」
再びミシェイルがミネルバの槍を叩き落とした。猛スピードですれ違う一瞬に、槍の穂先を絡めて捻り飛ばしたのだ。とても常人のまねできる技ではない。
肩が抜けそうな力を受けたミネルバは、痛みを押さえて鞍に手をのばした。そして愕然とする。そこにもう槍はなかったのだ。これでは、兄の言う通り、逃げることしかできない。
「いや、刺し違えても、兄上を討つ」
ミネルバは、体当たりしてでも戦うことを決意した。この高さからまともに落ちれば、助かる可能性は低い。マリアさえ生き残れば、マケドニア王家は正しく再興されるはずだ。
だが、ミネルバの決意を見抜いたミシェイルは、簡単にそれを許してはくれなかった。ミネルバの後ろについたまま、体当たりの機会さえ封じたのだ。
「それほどまでに死に急ぐか。残念だ」

ミシェイルが、手槍を構えた。がら空きのミネルバの背中に狙いを定める。そして放たれた手槍が、ミネルバの左腕をかすめて傷つけた。

「くっ……」

右手で慌てて手綱をつかみ直すと、ミネルバは体勢を立て直した。全速で飛ぶ飛竜によって受ける風によって、激しく髪が躍り、流れ出る血が吹き飛ばされていった。

「今のは警告だ」

「嫌だ！」

兄の言葉を思い切り否定すると、ミネルバは口で手綱をくわえて腰のナイフを取り出した。それで鞍と身体をつないでいる命綱を切ろうというのだ。タイミングさえ合えば、後ろを飛ぶミシェイルにぶつかることができる。うまくいけば、体勢を崩した飛竜は墜落するはずだ。

ミネルバが無謀な決意を固めたとき、やっと二人に近づいてくる騎士の姿があった。戦場を無視して高速で空中戦を繰り広げていた二人は、他の騎士たちから遙か遠くに離れてしまっていた。乱戦のために、部下の騎士たちも二人をなかなか見つけられないでいたのだった。

「ミネルバ様！」

叫びながら、パオラが上空から二人の間に割って入った。すぐさま、ミシェイルが真横にロールしてパオラの攻撃をかわす。それどころか、すれ違い様に、反撃でペガサスの翼に傷を負わせた。

白い羽根が舞い、パオラが墜落していく。

「パオラ！」
なんとかミシェイルの追撃から逃れたミネルバは、悲痛な叫びをあげた。
「よくも姉様を！」
パオラとともにやってきていたカチュアとエストが、果敢にミシェイルに挑んでいく。絶妙のコンビネーションで攻撃を仕掛けてくる二人に、さすがのミシェイルも翻弄されて防御に専念した。
その間に、ミネルバは落ちていくパオラにむかって急降下していった。
傷ついた翼を広げて必死に減速しようとしているが、勢いは衰える気配がない。このままでは、大地に叩きつけられるのは必至だ。
「追いつけないのか」
ミネルバがあきらめかけたとき、横合いから一騎のペガサスが現われてパオラのペガサスの手綱をつかんだ。やや、落下速度が減速する。そのおかげで追いついたミネルバが無理矢理下に回り込んで減速させた。
なんとか落下をまぬがれたパオラのペガサスは、地上間近で自力で着地することができた。
「大丈夫か、パオラ」
「はい。ありがとうございます、ミネルバ様、シーダ姫」
浅手を負ったパオラは平気なふりをすると、自分を助けてくれたシーダとミネルバに礼を言った。

「彼女は私が看ます。ミネルバ王女は……」
「私は、空に戻る。戻らなければならない」
ミネルバは頭上を見上げて言った。そこでは、竜騎士と天馬騎士が激しく戦いを繰り広げていた。マルスの指揮の下、弓兵隊と連携した白騎士団は敵竜騎士団を掃討し、ペガサス三姉妹を追ってきていたのだった。そこへ、マケドニア城から守備隊であった新たな竜騎士たちがやってきたのである。
「でしたら、これを」
パオラを地面に寝かせると、シーダが自分の槍をミネルバに差し出した。
「すまない」
ミネルバは一礼してそれを受け取ると、再び空に上がっていった。
「カチュア、エスト、無事か！」
大声で呼ばわると、元気な声とともに二騎のペガサスがミネルバの横によってきた。
「私がパオラの代わりをする。力を貸してほしい」
「はい」
ミネルバの言葉に、二人は声をそろえて答えた。
三人は、一列にならんでミシェイルを目指した。
「まだ俺にむかってくる騎士がいるのか」
突っ込んでくるカチュアを見て、ミシェイルがつぶやいた。

槍を構えて正面から迎え撃つと、直前でカチュアが横に移動して進路を変えた。その後ろに隠れていたエストが、反対側にペガサスをよせて姉とならぶ。そして、その後ろからミネルバが忽然と姿を現わした。

カチュアとエストが左右を押さえ、ミシェイルの進路を限定している。コースを変えれば激突してしまうだろう。そのため、彼はまっこうからミネルバと対峙するしかなかった。

「兄上!」

全身全霊を込めて、妹が突っ込んでくる。我知らず、ミシェイルは微かに笑みを浮かべてしまった。

そのとき、すれ違い様に左右からカチュアとエストが手槍を投げつけてきた。単に動きを封じるだけであろうと考えていたミシェイルは、虚をつかれて慌ててその攻撃をはねのけようとした。槍と盾を持った手が大きく開かれ、一瞬だけ無防備になる。

ミネルバとミシェイルがすれ違った。ミネルバの槍とミシェイルの身体が交差する。

「甘いのは、俺の方か……」

脇腹に突き刺さった細身の槍をつかんで、ミシェイルは自嘲した。力を込めて槍を引き抜くと、地上へと投げ捨てる。出血によるめまいが彼を襲ったとき、彼の乗る飛竜がぐらりとかしいだ。見ると、カチュアの投げた手槍が飛竜の下腹に突き刺さっている。槍で払いのけたつもりが、ミシェイルから逸れた手槍は彼の騎竜に命中していたのだった。

不運であった。そのまま力を失った飛竜は、ミシェイルを乗せたまま深い森の中に落ちて

いった。
「笑っていた……」
ミシェイルの姿が消えるのを見届けて、ミネルバはつぶやいた。
遺体を確認しようとしたが、敵の生き残りの竜騎士たちがそれをさせてはくれなかった。
「暗君は倒れた。騎士としての心あるならば、我が命に従え。槍を下げよ！」
ミネルバは、竜騎士たちに投降を呼びかけていった。

10

「本当にガトー様の居場所を知っているんだね」
主戦場から離れた道を急ぎながら、マルスはチェイニーに確認した。
「ああ。間違いなくマケドニア王家の別荘ってところにいるよ。道だって、間違いないだろ」
チェイニーは、話を聞きつけて無理矢理ついてきたマリアに同意を求めた。
「ええ、こちらの方にも、別荘はあったはずです」
チェイニーの意に反して、マリアが何ともあやふやな返事をする。
「とにかく急ぐとしよう。マケドニア城は僕たちの手に落ちたとはいえ、まだ戦闘は散発的に続いているんだ」
マルスがみんなを促した。さすがに、ミシェイルの死はマリアには告げなかった。

まだ抵抗を続けている敵がいるとは言え、すでに戦いの大勢は決していた。マケドニアにおける最も大きな目的をほぼ果たした今、マルスはもう一つの目的のために本隊とは別行動をとったのであった。目指すは大賢者ガトーのいる館。案内役をかって出たチェイニーを先頭として、マリア、ロレンス、レナ、ジュリアン、ナバール、マリク、リンダ、ウェンデルが同行している。

「今、何か声が聞こえなかった？」

じきに館に着くというとき、最後尾を歩いていたマリアが突然立ち止まった。

「誰か怪我人でもいるのかしら。だとしたら、放ってはおけません」

レナが、マリアの横で耳をそばだてた。

「だが、ここで時間を費やしているわけにはいかぬぞ」

「そうそう。ガトーは急いでるみたいだぜ」

ウェンデルの尻馬に乗っかって、チェイニーが皆を急かした。

「では、私たちだけで見にいってみます。マルス様は、先をお急ぎください」

「レナさんたちだけだなんて、危ないよ」

ジュリアンが、慌ててレナを引き留めた。

「では、わしがついていこう」

ロレンスが、二人の護衛をかって出た。ジュリアンもついていきたがったが、館に忍び込むようなことになれば彼の力が必要なため、しぶしぶ断念した。

「もし負傷者であったなら、もう戦いが終わったことを説明して近くの家まで運びましょう。確か、この近くにエストの幼なじみのウォレンという猟師の家があったはずですから」
レナは説明すると、マリアの聞いた声の主を探して森の中へと分け入っていった。
彼女たちと別れたマルスたちは、ほどなく一軒の館にたどり着いた。館の玄関には、ガトーに言われた使用人たちがマルスを出迎えに待ちかまえていた。
「よくぞ参った、マルス王子」
ガトーは、慇懃（いんぎん）に一同を出迎えてくれた。彼のいる部屋には祭壇が作られており、その中央には光り輝く透明な宝玉が祀られていた。
「初めまして、大賢者ガトー様。アリティアのマルスと申します」
実体のガトーと初めて対面したマルスは、あらためて挨拶をする。
「お言葉に従い、光と星の宝玉を持って参りました」
マルスは、光り輝く二つの宝玉を差し出した。
「さすがはアンリの血を引く者じゃな。これでスターライト・エクスプロージョンの魔法を生み出すことができる。その力をもってすれば、ガーネフのマフーも破れるはずじゃ。だが、急がねばなるまい。魔法生成を始めれば、わしは結界を解かねばならぬ。さすれば、そなたの姉がガーネフに対して無防備になるゆえ」
「それは、どういうことなのですか」
予期せぬガトーの言葉に、マルスは身を乗り出して訊ねた。

「ガーネフの狙いは、オームの杖なのだ。奴とてまだ生ある人間のはず。老いと迫りくる死に怯えておるのじゃろう。そのため、莫大な生命力を秘めたオームの杖から、力を引き出そうと考えたのじゃ。愚かなり、愚かなり」
やりきれぬと言った口調でガトーが答えた。
「それで姉上を……」
マルスは、それですべてが納得いった。アリティア王家の秘宝であるオームの杖は、生命力を内に宿した杖であった。その力を引き出せるのは、アリティア王家の血を引き、高位のシスターとなった者のみ。すなわち、現在はマルスの姉のエリスのみであった。それゆえ、ガーネフはアリティアを襲ったときにエリスだけを殺さずに連れ去ったのだろう。
「その通り。今はわしの張った結界によってガーネフはそなたの姉に指一本触れられないはずじゃ。だが、わしが力を解けば、しばらくは残留する力で結界が保つとはいえ、じきに消滅する。ガーネフがそれに気づく前に、そなたたちはテーベの都にいかねばならぬ」
「しかし、僕たちはテーベがどこにあるのかさえ知りません」
「案ずるな。騎士団の一つぐらいであれば、わしが魔法で送り届けてやろう。テーベはカダインのさらに北、マーモトード砂漠の北端に存在しておる。そなたは、すぐにテーベに赴く者たちを選ぶのじゃ。その間に、わしはスターライトを生み出そう」
「よろしければ、お手伝いさせてはいただけませんか」
それまで静かに話を聞いていたウェンデルが、申し出た。

「それは助かる。そなたは、現在のカダインの長、ウェンデルであったな」
「はい。そして、彼が私の弟子のマリク、それに、ミロア司祭様の娘リンダでございます」
ウェンデルが名を呼ぶと、マリクとリンダが深々とお辞儀をした。
「うむ。では、結界を解くぞ。しばらくは効果は残るが、急がねばならぬ」
ガトーはそう言うと、祭壇に手をかざした。祀られていた宝玉が光を失う。それが合図であるかのように、一同はあわただしく動き始めた。

11

「何があろうとも、エリス様をお救いいたしましょう」
ドーガがグラディウスで大地をトンと突きながら言った。グルニアにやってきたボア司祭によって、傷はほとんど癒されていた。
アカネイア軍の到着と同時にすぐに出発したドーガたちの部隊は、戦いが終わった後にマケドニア城に到着したのだった。戦闘に間に合わなかったことをドーガは悔しがったが、疲労していない兵士の到着は、これからテーベにいくには何とも都合がよかった。
「それでは、ついにガーネフと決着をつけるときがきたのですね」
戦いの疲れを見せずにカインが言った。一戦を終えたばかりであったが、精鋭と呼べる歴戦の勇士たちの士気は衰えを見せていないこともマルスにとって頼もしかった。

「ああ、姉上を救い出そう」
マルスは答えた。そのとき、山の方の上空で大きな花火のようなものが爆発した。星のような光が弾け、一二の流星となって散っていった。
「ガトー様の魔法が完成に近づいているのだろう。急いで部隊の編成をするぞ」
マルスは、一同にむかって言った。
ウェンデルにささえられるようにしてガトーが現われたのは、それから少ししてのことであった。
「準備は整っておるな。魔法生成で相当消耗したのか、かなり疲れているようであった。
「準備は整っておるな。では、テーベへそなたたちを送り届けよう。ガーネフのおる神殿の中に飛ばすゆえ、急いで奴を倒すのじゃ。もう結界が消滅する」
「準備はできております」
整然と整列した部隊を後ろに従えて、マルスは力強く言った。それに、リンダと、スターライト・エクスプロージョンの魔道書を持ったマリクが加わる。
「では、ゆけ！」
ガトーが両手をあげた。めまいに襲われたかのように、マルスたちの視界が奇妙に湾曲して、渦巻く水に絵の具を流したような色の奔流と化す。やがて色の固まりが本来の形を取り戻すと、彼らは恐ろしく古びた建造物の中に立っていた。
そこは、アリティア城がまるまる入ってしまうような規模の巨大な塔の中であった。その中央に、祭壇をかねた神殿が建てられている。二層からなる神殿は、台座となる層の上に、

長い階段をもつ上層が載っている。青白い色の篝火に照らされた神殿は、ラーマン神殿を思わせる不思議な装飾に彩られていた。
「マルスの小僧か、よくもここまでやってきたものだ。おおかた、ガトーの奸計だろうが」
突然、ガーネフの声が響いた。同時に、忽然と兵士たちが現われる。転移の波動を感じたガーネフは、侵入者を手薬練引いて待ちかまえていたのである。
「姉上を返してもらうぞ、ガーネフ」
神殿の最上部にいるガーネフにむかって、マルスは叫んだ。
「やってみるがいい。お前にそれができるのかな。マフーとファルシオンある限り、わしはメディウスでさえ支配することができる。わしがこの世の永遠の王なのだ。すでに、それを阻むことはガトーでさえできぬ。そう、ガトーでさえも……」
恍惚としたようにガーネフが言った。
もはや問答をしている場合ではないと、マルスは全員に攻撃開始を命令した。主に剣士で構成された部隊が、神殿最上部を目指して進む。カインが、ドーガが、ハーディンが、オグマが、マルスとマリクがガーネフにたどり着くまでの道を切り開いた。
「覚悟しろ、ガーネフ」
マルスはついにガーネフの前にたどり着くと、大声で叫んだ。だが、次の瞬間、ガーネフのおぞましき手管に驚いた。そこには、四人のガーネフが立っていたのである。
「さすがに、カミュとミシェイルを始末してくれただけのことはある」

「わしの手間を省いてくれて礼を言おう」
「どのみち、奴らはいずれ邪魔者となるはずであったからな」
「後は、ここにいるお前たちを殺し、ニーナを殺せば、すべての王国は消え去るのだ」
口々に言うガーネフたちの後ろに、光で作られた柱のようなものが見える。
「エリス様！」
マリクが叫んだ、その中にエリスとオームの杖がそれぞれ囚われていたからだ。まるで光の筒の中の重さのない空間にいるかのように、エリスと杖はそれぞれの光柱の中に浮かんでいた。だが、その光も明滅しながら消えかかっており、エリスの姿もゆっくりと空中を上下してる。
そのとき、炎の矢がガーネフの一人を貫いた。獣のように悲鳴をあげて倒れたガーネフが土塊に姿を変える。
ジョルジュとともに駆けつけたアストリアが、メリクルソードでもう一人のガーネフを倒した。余裕を見せすぎてマルスだけを見ていたガーネフたちは、他の兵たちの素早い動きに対処が間に合わなかったのだ。
残る手前の一人には、ドーガがグラディウスを繰り出そうとした。三種の神器をもって駆けつけた三人の同時攻撃は功を奏すかに見えたが、なぜかドーガの攻撃だけが途中で止まる。
「マルス様、奴です」
顔をゆがめながらドーガが叫んだ。マフーの力に守られた者が、本物のガーネフだと証明

したのだ。
「お下がりを、マルス様」
満を持してマリクが前に出る。
「愚かな。死ぬがよい。漆黒の宝玉よ。闇に棲みし眷属（けんぞく）は心の闇を喰らえり。放たれよ、暗黒の亡者どもよ！」
ガーネフがマフーの魔法を唱えた。悪霊が解放される。
だが、同時にマリクも呪文を唱えていた。
「光と星の宝玉よ。星々の解放は闇を砕く光。弾けよ、星辰の閃光よ！」
虹色に輝く魔方陣がマリクの前に現われた。そこから飛び出した無数の輝きが、ガーネフの周りを取り巻く。次の瞬間、敵の身体の一点に光が収束して爆発した。
「スターライトの魔法か……、ガトーめ……！」
光に身体を焼かれたガーネフが膝をつく。だが、彼はなんとかその身を持ちこたえた。同様に、マフーをその身に受けたマリクも、かろうじて命をつなぎ止めていた。とはいえ、彼も瀕死には違いなく、肝心の魔道書を手から落としてうずくまっていた。
マルスたちは今こそガーネフにとどめをと思ったが、マフーの呪縛によってその場を動くことができなかった。
「よくやった、若き愚かな魔道士よ。だが、二度目はない」
よろめきながら立ち上がると、ガーネフが再びマフーを放つべく魔道書を掲げた。

「光と星の宝玉よ。星々の解放は闇を砕く光。弾けよ、星辰の閃光よ！」
女性の凛とした声が、その場に響いた。マリクに駆けよったリンダが、拾い上げたスターライトの魔道書を読み上げたのだ。
「おのれ。だが、もう遅い。我は……」
光がガーネフをつつみ込んで弾けた。そのままどうと倒れ込み、ガーネフが動かなくなる。
「やった。父様の仇を……」
ぺたんと尻餅をついてしゃがみ込むと、リンダが荒い息でつぶやいた。
「ああ、君がガーネフを……。危ない！」
リンダを賛美しようとしたマリクが、突然彼女を突き飛ばした。投げ出されるようにして床に伏せたリンダの眼前で、立ち上がったマリクが雷球につつまれる。今一人残っていたガーネフの複製に、トロンの魔法を放たれたのだ。
「マリク！」
マフーの呪縛から解かれたマルスが、素早く飛び出して敵を一刀のもとに斬り倒す。倒れゆくガーネフの複製の背後で、光柱が光を失っていった。からんという音を立ててオームの杖が床に倒れ、同じようにエリスが倒れる。
「姉上！」
マルスは慌ててエリスに駆けよると、彼女の上半身をだき起こした。二三度身体をゆすると、エリスが意識を取り戻した。

「マルス!?　ああ、マルスなのね」
驚きと喜びを全身で表現しながら、エリスがマルスをきつくだきしめた。
「姉上。会いたかった」
「私もですよ、マルス。それで、ガーネフはどうしたのですか」
微かな不安にかられて、エリスがマルスに訊ねた。
「ガーネフは、マリクが倒しました。でも……」
「マリクがきているのですか」
心底嬉しそうに、エリスが顔を上げて周囲を見回した。だが、その目に映ったのは、悲しげなマルスの仲間たちに囲まれたマリクの変わり果てた姿であった。
「マリク！」
エリスはマルスを放すと、オームの杖を拾ってマリクの許に駆けよった。
「マリク、ああ、マリク……」
マリクの傍らにしゃがみ込んでその顔をのぞき込むと、エリスは涙をこぼした。頬に落ちた涙に、マリクの唇が微かに動く。それは、エリスの名を形作ろうとしているようであった。
「まだ彼を救うことはできます」
周囲の者を下がらせると、エリスがオームの杖を掲げた。
「解放されよ、命の煌めき。宿れ、愛しき者の上に」
聖句を唱えるエリスの身体が光につつまれる。同様にマリクの身体が光につつまれた。直

後に、オームの杖が力を使い果たして粉々に砕け散った。
「なぜ……！」
エリスが狼狽する。杖に秘められた力は、マリクを救っても余りあるはずであった。余分な力が杖から引き出されない限り、砕けるなどということはないはずだ。もしや失敗したのではと、エリスは大きな不安にかられてマリクをのぞき込んだ。
「エリス……様……」
マリクが言葉を発した。
「ええ、私です。ありがとう、マリク、私を守ってくれて」
喜びを隠すことができず、エリスがマリクをだきしめながら言った。九死に一生を得たのも忘れて、マリクが真っ赤に頬を染める。
そんな二人の間に入ることができず、リンダは傍らに立ちすくむだけであった。
「魔法の戦いとは、何とも激しく、そしてあっけないものだな。剣と槍に生きる身には、理解しにくいものだ」
ガーネフの死を確認しようと、遺体に近づきながらハーディンがつぶやいた。敵も掃討し、神殿は静寂を取り戻したかのようだ。だが、司祭の長衣（ローブ）を纏（まと）ったガーネフに手をのばしかけて、ハーディンはぎょっとした。ガーネフの身体が、溶けるようにして消えてしまったからだ。慌てて後に残ったローブをつかんで持ち上げるが、遺体は影も形もなかった。そのかわりに、黒い宝玉がローブからこぼれ落ちた。微かに妖しく光を帯びていたが、それはすぐに

消えた。

「何だ、これは」

ハーディンは、その宝玉を拾い上げてのぞき込んだ。深い闇が、宝玉の中に広がっていた。心の中を見透かされるような闇の深淵に、ハーディンは思わず宝玉を取り落とした。

乾いた音を立てながら宝珠は床の上で何度か弾み、建物の影の中に消えていくと、それきり二度と見つからなかった。

12

回復したガトーの魔法によって帰還したマルスたちは、マケドニアで万全な態勢を整えると、いよいよドルーア本国にむけて進軍を開始した。

マルスの腰には、テーベ神殿をくまなく捜索して発見した光剣ファルシオンが威風堂々と下げられていた。左手には、ファイアーエムブレムの盾がしっかりと握られている。

タリスでマルスたちが決起してから、すでに一年以上の月日が流れていた。

ドルーア帝国のある土地は、山々に囲まれた荒れた土地であった。かつて人間たちによって追い立てられたマムクートたちは、この地でメディウスを王として国を起こしたのだ。

そもそもは、竜族が突如人間を襲い、滅亡の直前まで追い込んだのが始まりだった。だが、神の力によって封印された竜族はマムクートとなり、逆に人間によって辺境へと追いやられ

たのだ。再びまとまった彼らは帝国の力で人間を奴隷として従えた。だが、人間は抵抗し、帝国を滅ぼした。そして今また、復活した帝国は人間の王国を滅ぼし、人々は帝国を滅ぼそうと戦いを挑んでいる。歴史は、繰り返すばかりなのであろうか。

最後の戦いは、国同士の戦いというよりも、すでに人とマムクートとの戦いという図式をあらわにしていた。

けれども、そんな単純な欲望と憎しみの縮図に終始しなかったのは、マルスの存在ゆえであった。彼の許には、マムクートでさえ集まっていたのだから。

「あたしは、マルスおにいちゃんが好きだから。だから、一緒に戦うよ」

バヌトゥにつきそわれたチキは、健気(けなげ)にもそう言ってみせた。

野生化し本能で動いている火竜と、理性をとどめたマムクートが竜石で変身した火竜の群れが、ドルーア本国で解放軍を待ちかまえていた。

「山を越えていこう」

斥候に出たカチュアからの報告を聞いたマルスは決断した。統制のとれた火竜たちと戦うのは並大抵のことではない。だが、メディウスを倒すことができれば、統制を失った火竜たちを個別に倒すことができるはずであった。あわよくば、マムクートたちは再び大陸に散っておとなしく隠遁生活に戻るかもしれない。

「彼らは、メディウスによって野心を植えつけられたに過ぎない存在。メディウスさえ倒れれば、自らの愚かさに気づく者もおるでしょう」

彼らと同じ火竜族であるバヌトゥが、希望ともつかぬ言葉を口にした。マルスも、それを信じることにしたのだ。すくなくとも、敵の戦力が減ることはあっても増えることはありえない。

「じゃ、あたしたちが道を造るから、おにいちゃんたちは後をついてきて」

そう言うと、チキが神竜石を取り出して掲げた。透明な光り輝く石が輝きを増すと、その中で小さなチキの姿が巨大な輝く神竜のものに変わっていった。同様に、火竜石を掲げたバヌトゥも火竜に姿を変える。

二人は山を切り開いて道を造ると、ドルーア城の裏手へと突入していった。

「おのれ、どこから現われたのだ」

城を守るゼムセルが唸った。自らも魔竜に変身すると、配下の火竜たちを多数引き連れて解放軍にむかってくる。

『おにいちゃんをいじめる奴は、許さないんだから』

火竜が吐く炎をものともせず、神竜と化したチキが白い霧状のブレスを敵に吐きつけた。細かな光の粒子にも見えるその霧につつまれると、火竜はあっけなくその場に倒れた。

『神竜族の者か。おのれ、未だに人間などというものに荷担するのか。許せぬ。許せぬぞ』

ゼムセルは、火竜たちを押し退けてチキに突進していった。肉弾戦に持ち込んで、チキを嚙み殺そうというのである。だが、横から飛び出したバヌトゥが、彼の首筋に深々と牙を突き立てた。咆哮をあげながら、ゼムセルはバヌトゥを振り飛ばした。そこまでであった、バ

ヌトゥが離れたと見るや、チキがブレスを彼に浴びせかけたのだ。どうっと、魔竜が倒れる。チキは彼を踏みつけると、城にむかって進んでいった。むかうところ敵なしで進むチキの後ろで、瀕死のゼムセルが首をもたげる。せめて一矢報いようとするところへ、ジョルジュの放ったパルティアの一撃が喉へ命中した。ブレスを封じられて再び魔竜が頭を大地に倒したところへ、竜殺しの剣を持ったオグマが飛び込んでいった。渾身の力を込めたオグマに、首に剣を突き立てられてゼムセルは絶命した。

「人間だって、まったくかなわないというわけじゃないんだぜ」

剣を引き抜きつつ、オグマがつぶやく。

「みんなチキとバヌトゥに続け、一気に城を攻めるぞ」

マルスは叫んだ。チキが城の一部を崩し、そこから兵たちが一気になだれ込む。

城の中は、さすがに人間の兵たちがほとんどであった。チキたちに負けじと、アストリアやドーガが血路を切り開いていく。

チキたちは、通路を進むのももどかしいと別のルートから壁を崩しながら進んでいった。その後を追うようにして城内の奥深くに入ると、マルスの本隊はメディウスがいるであろう玉座の間を目指した。

チキたちが城内のマムクートを引き受けてくれている間に、とうとうマルスはメディウスのいる広間にたどり着いた。

「アンリか」

頭髪のない老人の姿をしたメディウスが、血のように赤く輝く目でマルスを睨みつけながら問いただした。がっしりとした体躯は、圧倒的な存在感でもって人間たちを威嚇している。
「僕はアンリの血を引く者だ。名は、マルスと言う」
ファルシオンを構えながら、マルスは堂々と名乗った。
「ほう、ではアンリは死んだのだな。人間とは何と儚(はかな)いものか。我ら地竜族のように、大地とともに蘇るすべも知らぬとはな」
「それがどうした。勇者アンリの心は、すべての人々の心に受け継がれている。お前が何度蘇ろうとも、人々を苦しめるのであれば、アンリの心を受け継いだ多くの人がお前を倒す！」
「うぬぼれるな。自分たちがいかほどの存在か思い知るがいい」
立ち上がると、メディウスが地竜石を取り出した。その姿が、巨大な地竜に変化する。
「マルス様を援護しろ」
ゴードンが、部下の弓兵たちに命じた。けれども放たれた矢は、メディウスの身体にことごとく弾かれる。
『うるさい、目障りだ』
邪魔をするなとばかりに、メディウスが闇のブレスを吐き出した。慌ててゴードンたちがそれを避ける。だが、逃げ遅れた数人の兵士たちが直撃を食らってばたばたと倒れていった。外傷はないが、生命力を失ってこときれている。
『決着をつけよう、ナーガ！』

メディウスが言った。その言葉に導かれたかのように、広間の壁を突き破って、チキとバヌトゥが飛び込んできた。
『邪魔だ』
軽く身体を動かすと、メディウスが飛びかかってくるチキたちをあっけなく弾き飛ばした。もんどりうって倒れるチキを、メディウスが踏みつける。チキが、甲高い笛のような悲鳴をあげた。
「メディウス、貴様の相手は、僕だ！」
マルスがファルシオンを掲げた。その刀身から、輝く光の固まりが無数に飛び出す。光はメディウスの周りで輪を成すと、地竜の動きを一時的に止めた。
チキがその身体を必死に起こす。足下をすくわれたメディウスがもんどりうって倒れた。
『おのれ！』
倒れたまま、メディウスがマルスにむかって闇のブレスを吐こうとする。だが、マルスの仲間たちが一斉にメディウスに対して攻撃を仕掛けた。たいした傷は与えられないものの、充分に牽制の役を果たす。
仲間たちの援護の中、マルスがメディウスにむかって走った。光につつまれるファルシオンを地竜の喉に柄まで通れと突き刺す。死にものぐるいで首を振り、メディウスがマルスを振り払った。その首を、チキが踏みつけて動けなくした。
『マルスおにいちゃん』

チキに促されて、マルスはメディウスの眉間にファルシオンを突き立てた。
くぐもった悲鳴をあげ、メディウスが動かなくなる。
「マルス様が、メディウスを討ち取ったぞ！」
誰かが叫んだ。
「マルス様が、メディウスを倒した。我らの勝利だ」
「メディウスは、倒れたぞ」
兵士たちが次々に唱和していく。
チキが、一声長く勝利の雄叫びをあげた。
それに応えて、マルスは光り輝く剣を高々と掲げたのだった。

エピローグ　闇のオーブ

こうして、後に暗黒戦争と言われることになる、大陸を二分したドルーア帝国と解放軍の戦いは幕を閉じた。
人々は祖国に戻り、戦いで荒れ果てた国土を復興させるために力を尽くしていく。
勇者アンリの再来と讃えられたマルスの活躍によって、平和は永遠に続くかに思われた。
ファイアーエムブレムは、今はアカネイア王国パレス王宮の宝物庫で静かに眠っている。だが、それは新たな出番を待つ、一時の眠りに過ぎなかった。

闇の中で、何かが跳ねた。
ゆっくりと、まるで生き物であるかのように、その球体はテーベ神殿の奥深くで弾んでいた。人気のない闇の中で、周囲の闇よりもなお暗きその宝玉は、取り込んだすべての悪意に再び形を与えようとしていた。
オームの杖より奪った力によって、闇のオーブから立ち上った霧のような闇がだんだんと人の姿を取り戻していく。やがて、完全に人間の姿となった闇の影は、床で弾み続ける闇のオーブをその手につかんで声もなく笑った……。

【～紋章の謎・上～に続く】

後書き

ページが、たりませーん。

本来なら数冊でやりたいところ、一冊なので怒濤（どとう）の展開となっています。しかも、自分のホームページでどんなシーンが見たいかリクエストしてしまったので、エピソードの多いこと多いこと。また一部で詰め込み過ぎだと言われるんだろうなあ。

それでも、読者やゲームにはまった人には楽しんでもらいたいので、端役の一人に至るまでなるべく台詞や見せ場は作るようにしています。最初から出さないなり、さっさと戦死させてしまえば凄く楽なんですが、やはりそれはできません。

エムブレムの場合、どんなキャラでも愛してくれるユーザーがいますから。

トラキアのときなど、マーティやラルフがちょこっと活躍するシーンで凄く喜んでくれる人がいたりするわけで。紋章でも、カシムでさえ存在意義を出してあげなければと考えてしまいます。

そのうえで竜騎士同士の空中戦とか、マルスとシーダのラブラブとか、細かいところでは好きに書いてます。その辺で、ゲームと違うけれど、エムブレムそのものだよねと感じてもらえれば幸いです。

篠崎　砂美

■ご意見、ご感想をお寄せください。

ファンレターの宛て先
〒154-8528 東京都世田谷区若林1-18-10
株式会社エンターブレイン メディアミックス書籍部
篠崎砂美 先生
日野慎之助先生

■ファミ通文庫の最新情報はこちらで。

エンターブレインホームページ
http://www.enterbrain.co.jp/

FB Famitsu Bunko

ファミ通文庫

ファイアーエムブレム 紋章の謎～暗黒竜と光の剣～

二〇〇〇年十一月三日 初版発行

著者 篠崎砂美（しのさきさみ）
発行人 浜村弘一
編集人 青柳昌行
発行所 株式会社エンターブレイン
〒一五四-八五二八 東京都世田谷区若林一-一八-一〇
電話 〇三（五四三三）七八五〇（営業局）
編集 メディアミックス書籍部
担当 宮地千里
デザイン 西谷恵美子
写植・製版 株式会社パンアート
印刷 凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-7577-0190-X

篠崎砂美の著作リスト

ブレイクーエイジ
戦士たちの夏　Fighters in Summer grand Battle 2005

ブレイクーエイジ
戦士たちの秋　The hide-behind of the fighter 2009

アーマード・コア
～ザ・フェイク・イリュージョンズ～

アーマード・コア
～マスターオブアリーナ～

ファイアーエムブレム トラキア776 ①
～王都解放～

ファイアーエムブレム トラキア776 ②
～誓いの剣～

ファイアーエムブレム トラキア776 ③
～二つの槍～

ファイアーエムブレム 紋章の謎
～暗黒竜と光の剣～

ISBN4-7577-0190-X

C0193 ¥640E

定価 本体640円 +税

発行○エンタープレイン

アカネイア大陸。太古の時代、そこは竜族が支配する世界であった。しかし、守護神ナーガにより竜族は封じられ、アカネイア暦元年、人間の時代が始まる……。が、アカネイア暦四百九十年。竜族は、より人に近い形となってドルーア帝国を建設、次々に人間の王国に攻撃を開始。そして六百二年、遂にアリティア、アカネイア王国が滅亡する。ひとり残されたマルス王子は、ドルーア帝国を倒すため立ち上がるのだが……!?
人気ファンタジーゲームの原点の完全ノベライズ化が、遂に登場!!